

博士学位論文

『地域コミュニティにおける高齢者ボランティア活動の
分析—日本と中国との比較を通じて』

2022 年度

比較文化研究科

D19002

大手前大学 湯 艶

指導教授 鳥越皓之

目 次

序 章 研究課題

1. 問題意識……………1
2. 内容構成……………3

第一章 日本における高齢者ボランティア研究の現状と課題

1. 問題関心……………6
2. 日本における高齢者ボランティアについての研究……………7
 - 2.1 高齢者の社会活動……………7
 - 2.1.1 「社会活動」の定義について……………7
 - 2.1.2 「社会活動」の関連要因……………8
 - 2.1.3 社会活動と生活満足度との関連……………10
 - 2.1.4 社会活動と生きがいに関して……………12
 - 2.2 高齢者ボランティア活動の動機および継続性……………13
 - 2.2.1 活動の動機に関する研究……………13
 - 2.2.2 活動の継続性に関する研究……………15
 - 2.3 活動の健康に及ぼす影響……………16
 - 2.3.1 ボランティア活動は健康にどう影響するか……………16
3. 結語……………18
- 参考文献……………21

第二章 高齢者のコミュニティ・ボランティア活動を促す「無自覚な自己快楽」—兵庫県西宮市の香櫨園地区を事例として

1. 問題設定……………24
2. 香櫨園地区とその地区のボランティア活動……………26
 - 2.1 「NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」……………28
 - 2.2 「ふれあい配食」……………29
 - 2.3 「ひろばカフェ」……………29
 - 2.4 「神戸・灘 おもちゃ病院」……………30
 - 2.5 「いきいき体操」……………31
3. 高齢者ボランティアの活動事例……………31
4. 結論—目的のない動機について……………37
- 参考文献……………39

第三章 コミュニティにおける高齢者の居場所

1. 問題関心	42
2. 高齢者施設の特徴	43
2.1 厚生労働省の見解	44
2.2 専門的なケアとリズムのある生活	44
2.3 経済面の安定感	45
2.4 高齢者施設の課題	45
2.4.1 高齢者施設の量的不足	46
2.4.2 施設福祉内容の質的な未熟さ	46
2.4.3 介護福祉士の不足	47
3. 高齢者施設の活動内容と高齢者の居場所	48
3.1 高齢者の活動内容	48
3.1.1 ルールが優先され自己決定が期待されない	48
3.1.2 孤独・孤立化	49
3.2 居場所としての高齢者施設の長所	50
3.2.1 介護のプロの存在	50
3.2.2 居場所感・安心感	50
3.2.3 日本介護についての中国の研究者の指摘	51
3.3 居場所としての高齢者施設の問題点	53
3.3.1 介護職員からの虐待	53
3.3.2 孤立感	53
4. コミュニティにおける高齢者の居場所の事例	54
4.1 交流を通じて絆を形成し、居場所を作る	54
4.2 社会貢献	57
4.3 新しい自分の発見・自己実現	63
5. コミュニティにとって高齢者の居場所の意味	64
5.1 人間関係としての絆	64
5.2 社会貢献による充実感	66
5.3 新しい自分の発見	68
6. 結論	70
参考文献	72

第四章 中国における高齢者ボランティア研究の現状と課題

1. 問題関心	78
2. 中国の高齢者ボランティアについての研究	79
2.1 中国の高齢者ボランティア活動の概況	79

2.2 高齢者ボランティア活動の動機と参加についての要因分析	81
2.3 高齢者ボランティア活動実践の困難性と対応施策	85
2.4 高齢者のボランティア活動の刷新について	86
3. 中国高齢者施設に関する研究	87
4. 中国のコミュニティ(社区)における高齢者ボランティアに関する研究	90
5. 結語	94
参考文献	98

第五章 中国の社区における高齢者ボランティア活動 —積極的高齢化の課題に焦点をしばって

1. 問題関心	102
2. “協助型”の事例	103
3. “参与型”の事例	110
4. “積極的高齢化”と自分の生きがいの分析	116
4.1 他人の便益のため	117
4.2 地域文化と社区環境を守るため	119
4.3 自分の便益のため	119
5. 結論	120
参考文献	121
結論	124

序章

研究課題

1 問題意識

中国では高齢化問題がとても深刻になっている。この高齢者たちはほとんどが“在宅養老”（家で老後生活を送ること）であるが、中国の高齢化問題を解決するために、中国政府が考えているのは以下のとおりである。すなわち、高齢者福祉施設をいっそう増やすこと、もうひとつは、施設に代わって、コミュニティが養老的な機能を引き受ける方法である⁽¹⁾。

上の3つの形態、すなわち伝統的な“在宅養老”、それと“高齢者福祉施設の養老”、“コミュニティの養老”のいずれもが長所と欠点を持っている。だが、とりわけコミュニティ養老が今後の高齢者に対する政策としてもっとも必要と思われる。その理由は、伝統的な在宅養老は、家族の負担が大きいととも、高齢者が仲間の高齢者と分断されて孤立化する危険を備えているからである。また、高齢者福祉施設は、多くの長所をもつものの、第三章でも紹介するように、いくつかの致命的な欠点をもっている。ひとつは国の財政負担の問題、また施設の管理による機械的（人間的ではない）対応の問題などがある。そのため、コミュニティ養老が近年、注目されつつある。

しかしながら、コミュニティ養老については、期待が大きいものの、その実態や課題について十分な研究がなされていない。本論文はこのコミュニティ養老を分析の課題とする。

コミュニティ養老とは、文字通りの表現としてはコミュニティが老人を養うことであるが、実際は、コミュニティを舞台として、そこで高齢者たちが主体的に活動することである。この主体的活動とは、通常はコミュニティ・ボランティア活動と言われる。したがって、本論文ではコミュニティ・ボランティア活動を分析することになる。高齢者ボランティアがコミュニティにおいてどんな役割を果たし、高齢者ボランティアがボランティア活動の参加を通して、どんな老後生活になるのかを具体的には示すことになろう。高齢化

問題⁽²⁾が進んでいる日本と母国の中国を対象としている。

研究者の張紀南・韓懿によると、「2001年以降、中国の高齢化率は7%を超え、“高齢化社会”に突入した。2016年になると、中国の65歳以上の人口は1億5,003万人となり、10.85%に達し、高齢化問題が一層深刻な社会問題になっている」（張紀南・韓懿、2019、p83）という⁽³⁾。

深刻な中国の高齢化問題に対して、すでに述べたように、中国政府が考えている施策の中には高齢者福祉施設を増加させることがある。たとえば、中華人民共和国2018年国民経済和社会发展統計公報によると、「現在“養老服務機構”(高齢者福祉施設)は3万に達し、養老服務ベッド数は746.3万に達している」という。

研究者陳芳芳・楊翠迎によると、「養老ベッドはまだ不足があって、全国各地で“養老服務機構”を拡大し続けていて、ベッド数を増やしていけると予測される」（陳芳芳・楊翠迎、2019、p11）という。また高齢化問題に臨んで、中国政府が考えているのは社区（コミュニティ）に頼り、社区養老サービスを行うことである。たとえば、『國務院办公厅関与印發社会養老服務体系建設規劃（2011年－2015年）的通知』においては、「社区養老サービスは在宅養老⁽⁴⁾サービスの重要な支えである。家庭に昼間世話人のいない家庭や介護そのものできない高齢者に社区としてサービスを提供する」と書いている。

そして多くの中国の研究者は以下に示すように、コミュニティ養老（中国語では“社区養老”という）がこれからの中国の重要な養老方式であると指摘している。

たとえば、「社区は社会ガバナンスの基礎であり、重要な部分であり、コミュニティ養老は中国人民の養老習慣に適応し、コストの安さとサービスの便利さ、それに家庭在宅介護を補うことができるとともに、高齢者福祉施設の不足が補充できるなどというメリットがあるからこそ、これから中国高齢化問題の必然な選択になれる」（殷婕、2019、p90）という重要な指摘をしている。

また他の指摘として「社区は地域性社会生活の共同体として、政府と市場（経済）の両方からみて不可欠な効果をもっている。人口高齢化が厳しくなる情勢下に備えるために、政府は“社区在宅養老”を大いに普及させるべき」（梁海艶、2019、p3322）という指摘がある。

許愛花によると、「2004年7月28日に山東省済南市に“夕陽紅社区養老服務中心”が設立された。この“養老服務中心”は毎週の水曜日に接待日を設置し、高齢者のために直面する困難を解決し、定期的に高齢者に見合った文化活動と知識交流を行う。この“養老服務中

心”の成立は区内の 3000 人の高齢者を、孤独と寂しさから離れると予測される」（許愛花、2005、p109）と指摘した。

これらに加えて、「『中国高齢者事業発展“十二五”発展企画』において“在宅養老を基礎として、コミュニティを頼りにして、福祉施設を支えとする”と書いてある。“社区在宅養老”は未来中国式養老の主な形式になる」（顔秉秋・高曉路、2013、p 1269）という予想もある。つまり社区養老がこれからの中国の提唱される主な養老パターンとして社会に見受けられると予想されている。

ところで大切なことは、社区養老を行うときには、そこがコミュニティという地域空間であるから、不可欠なのは高齢者に対するボランティアの存在だろう。ただ、ここで考えておかなければならないのは、コミュニティにおいて高齢者がサービスを受ける側ではなくて、自分自身もボランティア⁽⁵⁾になれる主役として活躍できることである。

2 内容構成

第一章として、日本における高齢者ボランティア研究の現状の理解と政策的課題を別出することを目的とする。「コミュニティ養老」にかかわる日本の研究成果を整理・分析する。したがって、高齢者を支えるために、福祉施設に代わり、コミュニティにおけるボランティア活動が高齢者の養老生活においてどのような役割を果たすことができるか、という点をテーマとする論考をこの章の対象とした。

なぜ、高齢者たちは自分たちの通常の活動動機を超えて、がむしゃらに強い熱意で活動をしつづけていられるのだろうか、という疑問がある。そのがむしゃらな熱意とは何であるかを別出しようとすることを第二章の目的としている。それをあきらかにするために日本の兵庫県の西宮市の香櫨園地区を研究フィールドの対象地として選んで分析をした。

第三章として、コミュニティのなかで、高齢者ボランティアの活動を分析することを通じて、なぜ、そしてどのような環境において、高齢者がコミュニティの居場所に満足しているのかをあきらかにしようとした。

第四章では、中国のボランティア活動の実態、高齢者たちのコミュニティでの活動内容、また高齢者施設では高齢者たちはどのように遇されているのか、に関心を絞りながら、中国での研究の実態を紹介することを目的とする。

第五章では、具体的には、中国高齢者たちがボランティア活動に参加することによって、どのように自分の生きがい確立していったかを分析することにしたい。

なお、この五章にあたる場所は、当初は中国でフィールド調査を行うことを予定していた。しかしながら、コロナ禍によって、中国で調査をすることが不可能になった。そのために研究者等によって収集された資料や分析に依拠して論理を構成した。

【参考文献】：(アルファベットの順序)

- 顔秉秋・高曉路「城市老年人居家養老滿意度的影響因子与社区差异」、
『地理研究』、32 卷 7 号、2013 年
- 許愛花「中国城市社区老年人養老模式之反思」、『寧夏大学学報（人文社
会科学版）』、27 卷 3 号、2005 年
- 国家統計局、『2018 年国民經濟和社会發展統計公報』ホームページ、2019 年 2 月
http://www.stats.gov.cn/tjsj/zxfb/201902/t20190228_1651265.html
閲覧日 2022 年 2 月 18 日
- 候雲春「積極应对人口老齡化加快發展養老服務業」、『社会治理』、
11 号、2019 年
- 梁海艷「人口老齡化背景下的社区居家養老」、『中国老年学雜誌』、39 卷、2019 年
- 周金蘭「中国における高齡化の現状と高齡者対策」、『現代社会文化研究』、61 卷、2015
年
- 張紀南・韓懿「中国における高齡者福祉の現状および問題点に関する分析：天津市住民
を対象にアンケート調査を中心に」、『城西現代政策研究』、2019 年
- 陳芳芳・楊翠迎「基于政府職責視角的養老機構公建民營模式研究」、『社会保障研究』、4
号、2019 年
- 中華人民共和國国务院办公厅、『国务院办公厅関与印發社会養老服務体系建設規劃（2011
-2015 年）通知』ホームページ 2011 年 12 月、http://www.gov.cn/zhengce/content/2011-12/27/content_6550.htm 閲覧日 2022 年 2 月 18 日
- 殷婕「樂山コミュニティ養老サービス体系に存在する問題と対策の研究」、『公共管理』、
21 卷 3 号、2019 年

薛迪 「中国の大学に見る援助規範意識の特性とその規定要因ーボランティア活動に注目してー」『Proceedings:格差センシティブな人間発達科学の創成 公募研究成果論文集』、お茶の水女子大学グローバル COE プログラム「格差センシティブな人間発達科学の創成」、12、2010 年

【注】

(1) 全国高齢工作委員会弁公室の責任者によると、今後中国政府の主要任務としては、在宅養老、社区養老、施設養老の3つのカテゴリーで構成される中国の社区養老サービスの構築を主軸に「90-7-3方式」（高齢者の90%が在宅、7%が社区施設、3%が養老施設で老後生活を送る）という目標を実現することである。（周金蘭、2015、p141）。

(2) 日本では高齢化問題ではなくて、高齢者問題という言い方が多い。ただ、中国では、急速に高齢化が進んでいるために、高齢化もんだいという言い方をする。

(3) また、国务院発展研究中心原副主任候雲春によると、「UNの予測では1990年から2020年世界高齢者人口の平均増速は2.5%で、同じ期間で中国の増速は3.3%である。我が国はもうすぐ深い高齢社会に入り、2040に超高齢社会に入る。遼寧省、上海市、山東省、四川省、江蘇省、重慶市の6つ省市は2018年65歳および65歳以上の高齢者人口比は14%を超え、早めに深い高齢社会段階に入る」（候雲春、2019、p33）という。

(4) 在宅養老：“高齢者施設養老”とは相対的概念で、高齢者達が自宅で安心して、定年後の生活を送り、老人ホームに住まないということである。

(5) 研究者薛迪の指摘によると以下のような経緯があった。「中国では儒教の歴史が社会の価値観や基準に多大な影響を与えてきた。その相互扶助の考え方に、欧米社会のボランティアという概念が導入された。“ボランティア活動=志願者活動”と訳された」（薛迪、2010、p73）。この指摘のように中国語ではボランティアのことを「志願者活動」と表現している。

第一章

日本における高齢者ボランティア研究の現状と課題

1 問題関心

社会が高齢化して、それが将来大きな社会的問題になるだろうことはしばしば指摘されている。それは日本に限らず筆者の母国である中国にとっても、近い将来、深刻な問題となることが予測されている。

序章でも述べたように、筆者の本来の関心は将来に備えての中国における高齢者たちの養老問題であるが、世界的にみても、高齢化現象がとて進んでいる日本⁽¹⁾において高齢者たちがどのように老後生活を送っているのか、それをボランティア活動に焦点をおいて考えてみたい。とくに日本の施策に意を注ぎながら学びたいと思っている。

そのためには、いままでのこの分野の研究や施策の理解と、当該問題が生起している現場での現状分析の2点が必要であると思っている。この第一章においては、そのうちの前者についての諸研究の整理をしたいと思っている。より具体的には、本章は、日本における高齢者ボランティア研究の現状の理解と政策的課題を剔出することを目的とする。なお、ここでいう“高齢者ボランティア”とは高齢者が地域コミュニティにおいて、同じ高齢者を援助するボランティア活動を意味する。いうまでもなく、高齢者ボランティア活動は高齢者施設でも成立するが、以下に述べる理由により、コミュニティ活動に焦点を絞る。

そもそも中国政府が考えている施策は、高齢者福祉施設を増加させるという福祉施設にポイントをおいた政策と、コミュニティを通じて、多くの在宅高齢者に在宅サービスなど多様なサービスを行うというコミュニティにポイントをおいた政策がある。ただ最近、中国の研究者たちは「コミュニティ養老」(コミュニティが高齢者を支えること)を、これからの中国の高齢化に対応する重要な養老パターンとして指摘している(殷婕,2019: p 90、梁海艶,2019: p 3322)。

もっとも現在のところ、それは模索段階であり、筆者はこの「コミュニティ養老」について実証的な研究を深めたいと望んでいる。いま述べたように、本章は実証的な研究のた

めの前段階である。すなわち「コミュニティ養老」にかかわる日本の研究成果を整理・分析する。本論文の目的からして、高齢者を支えるために、福祉施設に代わり、コミュニティにおけるボランティア活動が高齢者の養老生活においてどのような役割を果たすことができるか、という点をテーマとする論考のみを本章の対象とした。

なお、筆者の問題関心を支えている仮説をここで示しておくならば、「コミュニティ養老」を行うときには、コミュニティといわれる地域空間が大切な場であること。また、ボランティアの育成には、2つのことが考えられるのではないか。1つはコミュニティにおいて高齢者がサービスを受ける側だけではなくて、自分自身もボランティアになれる主役として活躍できるかもしれないこと。2つ目として、高齢者を尊敬する気持ちから高齢者が積極的にボランティアになれるような社会雰囲気に基づいた政策が想定できるのではないかということである。このような仮説をテーマとする論文も本章の対象とした。

2 日本における高齢者ボランティアについての研究

日本における高齢者ボランティアについての既存の論考は以下に示すように3つの研究テーマに分類できるので、その分類にしたがって紹介をする。その1つは「高齢者の社会活動」に関する研究である。2つ目が「高齢者のボランティア活動の動機及び継続性」である。3つ目が「高齢者ボランティア活動の健康に及ぼす影響」である。

2.1 高齢者の社会活動

2.1.1 「社会活動」の定義について

これは高齢者がどのような社会活動をしているのかを考える研究分野である。ところでそもそも、この高齢者の社会活動といっても、「社会活動」がなにを意味するのかという点において、必ずしも社会的に（また研究者間で）明瞭に理解されているわけではないので、その定義の研究が存在する。

平野美千代は「高齢者の社会活動という概念を分析し、その特性を明らかにし再定義することで概念を明確化し、この概念が地域看護実践にどのように活用できるかを検討」（平野美千代、2011、p122）しようとしている。彼女は「最近の“高齢者の社会活動”の概念の使われ方を見るため、1999年～2009年の10年間の発表された文献を対象」（同上、p122）

として分析をした。そしてその結果として次のように指摘した。社会活動とは以下のようなものであると彼女は結論づけている。「日本の高齢者の社会活動の概念は家族以外の身近な人との相互交流や集団・組織への参加、また他者との交流を主眼にせずこれまで会社や家庭内で役割を果たしていた時間を自分のために使う、自己完結する活動を通じた社会との関わりである」(同上、p124)と説明した。

この説明は文意がやや分かりにくいだが、言っていることは、高齢者の社会活動は自分の日常生活の比較的狭い活動範囲からはじめる自己完結型の活動であるということである。

岡本秀明は「地域高齢者の社会活動に関する量的研究の中で、概念定義と測定、活動促進要因の2つに焦点を当て」(岡本秀明、2014、p347)分析を行っている。すなわち「社会活動は、老年学において非常に扱いづらい概念である。概念定義に一致した見解があるわけではないため、研究によりさまざまなとらえかたがされているのが現状である」(同上、p347)と先ず問題点を示す。そのうえで、「社会活動の促進要因として共通していたのは親しい友人や仲間の数が多いこと、外出や活動参加に誘われること、中年期(高齢者になる前)に地域とのかかわりがあったこと。これらの3つの要因は都市部の地域高齢者の社会活動促進要因として特に重要なものであるため、これらの要因をとくに考慮した対策が求められよう」(同上、p352)とまとめている。すなわち促進要因として、仲間、外出機会、老年期以前からの活動の重要性を指摘している。

橋本修二・青木利恵・玉腰暁子他は「高齢者の社会活動を“家庭外での対人活動”と規定し、仕事、社会的活動(社会参加、奉仕活動)、学習的活動、個人的活動の4側面からとらえ、側面ごとに活動の実施状況に関する指標を作成」(橋本修二、青木利恵、玉腰暁子他、1997、p761)している。すなわち、高齢者の社会活動を上記の4つの対人活動としてとらえ、高齢者の社会活動を理解しようとして、多変量解析を行ったのである。その結果、社会的活動、すなわち、社会参加や奉仕活動が大きな役割をもっていることを示した(同上、p767)。

2.1.2 「社会活動」の関連要因

坂上ゆかり・河原田まり子は「調査内容は、個人特性、社会活動、社会活動の影響要因(準備要因、強化要因、実現要因)とし、“個人特性”、“社会活動”、“準備項目”で構成した」(坂上ゆかり・河原田まり子、2017、p40)と調査内容を述べた。

「準備要因(社会活動の実施の動機付けになる要因)」「強化要因(社会活動の継続に影

響を与える要因)」「実現要因(社会活動の実施を促す要因)」(同上、p39)という社会活動指標をとりだし、以下のように指摘した。すなわち「地域で自立して生活する後期高齢者の社会活動と準備要因、強化要因、実現要因との関連を検討した。ロジスティック回帰分析の結果、社会活動と有意に関連があった準備要因は前期高齢期の社会活動の経験、実現要因は近所や市内での活動の情報の認知、ソーシャルネットワークが高い、強化要因は社会活動の人とのかかわりの拡大と身体的負担感がないであった」(同上、p44)ということである。すなわち社会活動の実施を促す要因は近所や市内での活動の情報の認知、ソーシャルネットワークであること。継続性に影響を与える要因としては、社会活動の人とのかかわりの拡大と身体的負担感がないことである事実を見出している。また後期高齢者にとっては前期高齢者の時期の社会活動経験の大切さも指摘している(同上、p43)。

また、岡本秀明は分析に使用した変数として、身体、心理、社会・環境的な変数を用意して、都市部に在住する高齢者の社会活動に関連する要因を分析している。「高齢者の社会活動を活発にするには、親しい友人や仲間をはじめとする豊かな社会関係であることが示された。人と人とのつながりが豊かであれば、一緒に活動したり誘いを受けたり、活動情報を直接得られることを含めて活動情報を入手する重要な経路となるなど、大きな波及効果が期待できる」(岡本秀明、2012、p13)と指摘している。すなわち、社会活動を活発にするには、豊かな社会関係が必要であることを指摘した。

岡本秀明はまた「居住年数と社会活動との関連について、居住年数が5年未満と短い者は、社会参加・奉仕活動への参加の阻害要因となっていた。地域社会への態度得点が高い者は、個人活動が活発、社会参加・奉仕活動や学習活動に参加する傾向が見られた。親しい友人・仲間の多さは個人活動や社会参加・奉仕活動の参加を促す要因であった」(岡本秀明、2012、p11)とまとめている。

矢庭さゆり・矢嶋裕樹は「地域で他者のために役割を果たすことができる活動を社会参加として捉え、地域在住の高齢者を対象として社会参加の現状とその関連要因を明らかにすることを目的とした」(矢庭さゆり・矢嶋裕樹、2011、p117)。

かれらによると、「生活機能が高いほど、社会参加がしやすいこと、経済ゆとり感がある者のほうが、他者の支援をする余裕も持てるということが社会参加の基盤にあることが考えられる」(同上、p120)という。さらに「高齢者は活動に参加するだけでなく、参加を通して他者との関係性の相互交流の中でネットワークを強化していくことこそ、社会参加の意義だと考えられる」(同上、p121)とも指摘している。すなわち生活と経済面に

においては余裕があれば、社会参加をしやすい。経済面と生活面は関連性が高いことを明らかにした。

桂理江子・佐藤直由は「すべての種別において、活動群と非活動群に有意差が認められた項目を独立変数とし、重回帰分析を行った結果、仙台市在住の社会活動を行っている高齢者の特性として、暮らし向きが普通以上であること、外出などへの誘いがあること、スポーツおよび学習活動への活動参加意向があること、の3項目が社会活動の参加に関連していることが明らかとなった」（桂理江子・佐藤直由、2017、p8）と述べている。

また竹内香織・福井享子などは「地域高齢者の主観的幸福感に関連する社会活動要因を明らかにし、地域高齢者に応じた社会活動を高めるための看護支援の在り方を検討する」（竹内香織・福井享子、2011、p24）として、つぎのように論じた。「後期高齢者を多く含む、農村部で暮らす高齢者を対象とし、主観的幸福感に関連する要因を社会活動4側面に着目して検討を行ったものである。性別、家族構成をコントロール要因として主観的幸福感を従属変数として重回帰分析を行った結果、主観的幸福感と関連していたものは、社会活動の個人活動、主観的健康感、家族構成であった。看護支援としては、地域性を考慮し、個人活動レベルから社会参加への動機付けが重要であることが明らかとなった」（同上、2011、p28）と指摘した。

岡本秀明によると、「高齢者の社会活動の関連要因をその要因どうしの関係も含めた全体像を把握すること、その際には活動情報へのアクセスや行政開催活動に対する高齢者の意識にも焦点をあてながら検討する」（岡本秀明、2008、p148）ことを論文の目的として、次のような結論を出した。すなわち「6つの主要カテゴリーが見いだされた。主要カテゴリーのうち、“他者との結びつき”、“活動へのアクセス”、“活動に結びづく後押し”の3つは社会活動の促進要因であり、これらが関係し合いながら活動するに至ると考えた、残りの“新たな場への参加を好まない”、“新たな活動をすることなどに対する関心が低い”、“新たな活動をすることでない”の3つは阻害要因であることが考えられた」（同上、p151）という。そして結果を「社会活動の関連要因についての全体的な概念図」で指摘している。

2.1.3 社会活動と生活満足度との関連

社会活動についてはとくに生活満足度との関連を述べた論文が多いので、ここでひとまとめにしておく。

岡本秀明によると、「高齢者が自由になる時間に行う社会活動などの活動の主観的効果

を、より敏感にかつ簡便に把握できる“日頃の活動満足度尺度”を作成する」（岡本秀明、2009、p47）ことを目的とする。

そしてその結論として「本研究で作成した“楽しめる活動”、“やりがいのある活動”、“有意義な自由時間”、“興味・関心もてる活動”の4項目からなる“日頃の活動満足度”は一定の信頼性と妥当性を備え、有用性も高い尺度であることが確認された」（同上、2009、p53）という結果を述べている。

香川幸次郎・中嶋和夫・芳賀博は「本調査は、層化多段無作為抽出により、北海道高齢者960名（65～84歳）を対象になされたものである。解析には、人口学的属性（性、年齢、家族形態、教育歴、健康状態）と生活満足度及び社会活動を用いた」とする（香川幸次郎・中嶋和夫・芳賀博、1998、p72）。彼らによると「高齢者の社会的活動をインフォーマルとフォーマルな側面から捉え、それら社会活動と生活満足度の関連性について、性、年齢、教育歴、世帯、健康度を加味した因果関係モデルを独自に設定し」（同上、1998、p71）た。その結果「インフォーマルな社会活動は女性に比して男性で、また健康度が高い高齢者ほど社会活動全般において活発になることを示していた。健康度が高い者ほど社会活動が活発なことは、これまでの研究に一致する傾向である。ただし、健康であっても教育歴の低い高齢者ほど、生活満足度に関連が乏しいフォーマルな社会活動に参加していた。」（同上、p75）という。

岡本秀明によると、「高齢者の社会活動と、新たな2つの尺度である“日頃の活動満足度尺度”の得点および“社会活動に関連する過ごし方満足度尺度”の得点との関連を男女別に検討する」（2013、p4）。そして「“社会活動”は“地域基盤的活動”“貢献活動”“趣味等仲間内活動”の3つの活動領域を設定した（同上、p5）。そしてその結論として「第一、男女ともに、日頃の活動満足度に地域基盤的活動が関連していなかった。第二に、2つの尺度の分析結果の双方ともに、趣味等仲間内活動の標準偏回帰係数との単純比較において数値が大きい傾向がみられた。第三に、下位尺度別の得点に関して、女性の分析結果ではすべての下位尺度得点が3つの活動領域と関連していたのに対し、男性では、他者・社会貢献満足度以外の3つの下位尺度得点が地域基盤的活動と関連していなかった」（同上 p10-12）という。

伊藤順子によると、「高齢者ボランティア活動の意義と課題について、特に参加動機とボランティア活動満足感、活動から得た利益および生活満足度との関連を明らかにする」（伊藤順子、2019、p43）とした。

そして結論として、「ボランティア活動動機の両志向性がともに高いほど、ボランティア活動満足感、ボランティア活動から得た利益が多く、両志向性がともに低いほど活動満足感も得られた利益も少なかった。また、生活満足度は活動動機と有意な関係はなかった。ボランティアするもの、されるものの相互作用がボランティア活動の本来の意味とも考えられる」(同上、p50)と述べている。

神江伸介は「まず一九九〇年から二〇〇五年の二〇世紀、二一世紀データを通じて、高齢者一般の政治意識・行動を見、その上で、仕事をやめることが高齢者の生活満足度や政治満足度にどのようにつながるか、ボランティア活動は離職による生活満足度の減退を補うことができるのか、それが政治に対する意識にどうつながっていくか」(神江伸介、2010年、p2)を論文の目的として論じる。結論としては「高齢者は加齢に従って、政治、生活に対して満足化の傾向を持っているし、そこに職業が果たす役割が大きいが、職業と同等かそれ以上の役割を果たすものに老人クラブがある。純粋高齢者の団体として機能しているクラブは有職者でありクラブに不参加の高齢者と比較したら生活・政治満足で差を見た」(同上、p42)と指摘した。

2.1.4 社会活動と生きがいに関して

梅谷進康・石田易司は「高齢者の就労・ボランティア活動と生きがいの関連性に関して、踏み込んでとらえることを目的とする」(梅谷進康・石田易司、2017、p50)とあって、次のように結論付けている。すなわち「高齢者が生きがいを得る方法としては、就労やボランティア活動以外にも家族との団らん、趣味・スポーツ活動、友人・知人とのかかわりといったさまざまなものがあるが、就労やボランティア活動を“している人”は“していない人”と比べ、生きがいの社会的要素である“人の役に立っている”“大切な役割を担っている”、ライフコース的要素である“知識・能力が活用できている”という意識を持つ傾向があり、その関連性はボランティア活動が就労よりも強いことがわかった」(同上、p58)という。

高間由美子・杉原利治は「高齢者の社会参加がどのようにして可能になるのか、またどのような参加のありかたが望ましいかを探ろうと」(高間由美子・杉原利治、2002、p31)する。彼らによると、「高齢者の能力やパワーを他者に活用すれば、教えたり、伝えたりあるいは教えられたり技術や知識の伝授のみならず、相互交流も盛んになる。それこそが高齢者自身の生きがいであり、社会参加であり、社会貢献となりうるのである」。また「高齢者自身が自立できることへのすばらしさは“人の役に立つ”“人に喜ばれる”などを自覚で

きる時であり、それが生きる喜びを感じる時でもある」(同上、p38)と指摘している。

村岡則子は「個々の趣向など個人因子に反映されることの少ない人間の共通ニーズである食に関わる地域社会活動と生きがい感に焦点をあて生きがい感への影響関連を見出す予備的研究とした。そして地域における高齢者自身の自助力さらに高齢者相互間での共に支え合う力を強固にする取り組みの一つとして、地域社会活動の有用性を明らかにすることを試みた」(村岡則子、2014、p31)という。その結果として、「生きがい感を構成する“存在価値”とボランティア活動年数とに正の相関を認めることができた。活動を継続して実施していく過程で、通常のご家庭生活に留まらない多くの豊富な社会経験を得て自己の存在価値を高めていったと考える。(中略)また、食に関わるボランティア活動では調理や献立立案、食材の購入などのこれらは、日常生活においてこれまで彼らが家庭で役割取得してきたものである。生活活動は日常生活における役割としてとらえることができ、このような日常役割は、自己効力感などの心理的素因とも密接に関わっているとされているように家事全般のボランティア活動は、彼ら本来の役割取得の継続を図るものであり、多様な役割を持つことによって自己の“存在価値”に影響を与えたと考える」(同上 pp35-36)と述べている。

2.2 高齢者ボランティア活動の動機および継続性

2.2.1 活動の動機に関する研究

高齢者たちはなぜボランティア活動に参加するのか、代表的な「動機」に関する論考は以下のようなものである。

田中共子・兵藤好美・田中宏二は「参加動機については、(中略)ボランティア自身にとっての活動の意味を把握するには、活動から得るものや活動の経済的評価、生活の満足感や張り合い、活動開始後の生活実感の変化などを尋ねた。対人関係面における充実も想定して、ネットワークが拡大したかどうかも聞いた。こうした枠組みで目指しているのは、人と人とが支えあう“ソーシャルサポートの交換”を通じて、授受する両者の間に豊かな人間関係が育まれた時、共生社会の基盤を支える心とシステムの安定が生まれていくのではないか、という可能性を描くことである」(田中共子・兵藤好美・田中宏二、2007、p53)という。かれらによると、「参加者の意識の上では、助け合いに次いで自己の向上を目指す気持ちが強い。動機は、大きく向上動機と慈愛動機の2因子に分かれた。これは自己に焦

点を当てた向上を目的とした動機と、他者に焦点を当てた愛他的な動機と解釈できる。二種類の動機に有意な相関はなく、独立した動機と考えられる」(同上、p66)と指摘した。すなわち動機には主に自分の内在の動機と他者を愛する動機が作動していることが指摘された。そしてそれらの動機の相互に相関性がないという指摘は注目に値する。

伊藤忠弘は田中らの結論と類似の視点で「ボランティア活動の動機について、“他者のため”という利他的動機と“自分のため”という利己的動機の枠組みでの整理を試みる。さらに、このような動機がボランティア活動を継続していくなかで変遷していく可能性について検討を行う。最後にボランティア活動の動機と達成行動における他者志向的動機の類似点について考察を行う」(伊藤忠弘、2011、pp35-36)とした。かれによると、「ボランティア活動の動機においても、利己的動機と利他的動機は明確に区分することはできず、1人のボランティアであってもその両方を同時に保持していると考えられる。その一方でボランティア活動の定義として「無償性」や「自律性」が意識されると、ボランティア個人のなかで「誰のための活動か」「何のために活動しているか」という問題に対して葛藤が生じることもあるだろう。ボランティア活動に対して謝礼金をもらうことや「義務感」を感じるものがボランティア活動の継続意志に影響を及ぼしうることが面接調査によって指摘されている。ボランティア活動を継続している人にとって、その動機が変容していくだけでなく、意識される複数の動機をいかに調整して統合しているのか、その有り様を明らかにする必要性は、達成動機付け研究と共通している点と考えられる」(同上、pp52-53)と指摘した。

森保文・森賢三・犬塚裕雅他は「個人の志向として、動機(ボランティア参加に何を期待するか)を取り上げて、社会的背景や経済的要因と共に、これらと種類別のボランティア活動との関係を明らかにする」(森保文・森賢三・犬塚裕雅他、2010、p2)という。かれらによると、「1、ボランティア活動への参加開始には、その活動の種類に特有の動機が関係し、一方、すべての種類のボランティア活動に共通して関係する動機はなかった。2、社会背景的要因についても、要因によって関係するボランティア活動の種類は異なった。係数の正負(たとえば女性か男性か)もボランティア活動の種類によって異なった。3、経済的要因である収入はボランティア活動への参加に対して関係が見られなかった。4、以上から、応募者の持つボランティアに対する動機と社会背景的要因から、興味を持ちやすいボランティア活動の種類を選択することが可能であった。5、動機の充足とボランティア活動の日常的参加との関係は認められなかった」(同上、p10)と興味深い指摘をした

(2)。

堀口康太・小玉正博によると、論文の目的としては、「自己決定理論の枠組を参考にしながらも、発達課題の特徴を考慮したうえで社会的活動参加動機づけと Well-being の関連を検討すること」(堀口康太・小玉正博、2014、p102) であるという。

そして次のように結論づけている。すなわち「こうした社会からの影響を超えて、活動に対して自分なりの意味を持ち、自律的な動機づけに基づき参加することが Well-being を促すことを示唆している。つまり、研究者や実践家は活動頻度だけでなく、高齢者の動機付けを考慮する必要があると考えられる。また本研究で示された社会的活動参加動機付けと Well-being の関連は自律性欲求の充足という観点から説明することが可能であると考えられる」(同上、p110) と指摘している。

すなわち、自律的な動機付けが社会活動での生き甲斐を促すという。

2.2.2 活動の継続性に関する研究

「高齢者のボランティア活動継続性」に関する研究がある。いかに高齢者ボランティアが必要といってもそれが継続しなければ意味がない。その関心のもとに、以下のような論考がある。

村社卓は「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティア継続特性—ボランティアの楽しさに焦点を当てた定性的データ分析」という論文にボランティアの「楽しさ」に焦点を当てて分析を行った。分析した結果、「カフェに参加する住民ボランティアの継続は推進機能と維持機能から可能になることが明らかにされた」(2018、p 38) という。また「ボランティア継続の推進機能のカテゴリーと言えば、“双方向の体験”、“活動への没頭”、“意欲的な試み”からなっている。ボランティア継続の維持機能のカテゴリーと言えば、“無理のない姿勢”、“活動での気楽さ”、“自己管理による改善”からなっている」(村社卓、2018、p 36) という。すなわちボランティア活動が継続できるのは“推進機能”と“維持機能”からなると思われる。

また、田中共子・兵藤好美・田中宏二は「ボランティア活動の理由や入り口の事情などよりも、活動の結果次第で継続意志が決まってくるのだろう。その活動とはどれだけ具体的なサポートを提供して、交流のある人間関係が作れたという側面が、深く関わっていると考えられる。人への深い関与によって成果を得ることがさらに活動を定着させて、更なる成果にも結びつくという、循環的な面も指摘できるだろう」(田中共子・兵藤好美・田中

宏二、2007、p68) と述べた。

さらに、小宇佐陽子・清水由美子によると「“住民ボランティアを地域での自主活動に繋げるための支援”、“自主化した活動を継続するための要素”、“点的な一事業を地域に面的に広げていくプロセス”」(小宇佐陽子・清水由美子、2012、p. 162)を見ようとして、「活動が継続してきたことの要因としては、教室参加者との定期的・継続的な交流の楽しみとともに、教室運営に対する役割意識が定着したことも原動力になった」(同上、p. 167)と指摘した。

つまりボランティアの継続要因は、交流の楽しみと役割意識であるといっている。

2.3 活動の健康に及ぼす影響

2.3.1 ボランティア活動は健康にどう影響するか

岡崎昌枝は「香川県坂出市に暮らす 65 歳以上の高齢者を対象とし、アンケートを行った」。彼女によると、「高齢者は、社会活動と社会交流を行うことにより、認知症の予防のみならず、高齢者が主体的に生活できる期間の伸展にもつながり、非自立期間を短くすることができる。そこで、高齢者が日常的に行う外出を日常生活、健康維持、趣味、ボランティア、その他の5つの社会活動として分析し、高齢者の社会活動がボランティアとして転換できるか、社会活動が社会交流や健康維持に結び付くかについて検討する。加えて、高齢者の社会活動及び社会交流をボランティア活動に転換させるためには、地域社会内での高齢者の活動傾向や地域社会の実態に精通しているコミュニティーソーシャルワーカーであると考え」(岡崎昌枝、2017、p 66)。また、「高齢者は、自らの社会活動への参加に参加することによって、より長く健康を維持したいと考えているのではないかと推察する。坂出市の高齢者の社会活動は日常生活の維持のみならず、健康維持、娯楽活動、ボランティアなど活発で非自立期間も短かった。このことから岡崎昌枝には社会活動への積極的な参加が有効であることが示された」(同上、pp 68-70)と坂出市の調査を通してあきらかにした。

山内加奈子・斎藤功他は「地域高齢者を対象にした縦段調査を実施し、①主観的健康感の5年間の変化、②初回調査時に主観的健康感の高かった者が5年後に主観的健康感が低下したことに関連する心理・社会活動要因について明らかにすることを目的とした」(山内加奈子・斎藤功他、2015、p538)と述べた。「地域高齢者の主観的健康感は5年間の追跡後に有意に低下したが、主観的健康感が維持される者の割合も比較的多かった。主観的健

康感を低下させる心理・社会活動要因としては、性・年齢群別でみると生活満足度の低さがすべての群において関連しており、それに加えて前期高齢者の女性ではうつ傾向有、後期高齢者では男女共に老研式活動能力指標の低さが関連していることが明らかとなった」（同上、p 545）と述べた。

藤原佳典・杉原陽子・新開省二は論文において北米における研究を概観することにより、以下の点が明らかになった。「①高齢者のボランティア活動は高齢者自身の心理的な健康度を高める。②ボランティア活動は死亡や障害の発生率の抑制といった身体健康を高める効果が示されているが、心理的效果に比べて先行研究数が乏しい。③性や人種、健康状態、社会経済状態、社会的交流の多寡等によってボランティア活動の効果が異なる可能性がある。身体的な健康に対しては高年齢の者ほど効果は強いが、社会的交流の活発な者、不活発なものいずれが、より強い効果を得やすいかは議論が分かれる。④ボランティア活動の内容による心身の健康への効果の相違を分析した研究は数少ない。⑤心身の健康に最も好影響を及ぼす量的水準は、おおむね活動時間が年間40～100時間程度とするものが多いが、必ずしも一致せず、現時点で時間やグループ数についての至適水準を示すことは難しい。⑥ボランティア活動に参加すると心理的要因、身体的要因および社会的要因が改善することにより心身の健康度を高めると考えられてきたが、これらの要因の媒介効果は比較的弱く、メカニズムに関しては未解明の点が残されている」（藤原佳典・杉原陽子・新開省二、2005、p 302）という研究結果が出たという。すなわち、ボランティア活動に参加することによって、心身の効果が多くなるということである。

小石真子・小笠原知子他は「社会参加を果たしている老人クラブ入会者を対象に主観的な健康観と社会参加の実態を把握し、健康度を高めるための保健師活動について考察する」（小石真子・小笠原知子他、2002、p13）を論文の目的とする。結論としては、「ウェルネスを高めるために、以下の要素が必要である。①健康への心がけを持ち、生活をしている。②老人クラブで人との関わりを通して精神的安定や楽しみができ、それを他者にも広げようと、勧誘活動にも結びついている。③老人クラブ入会后、交友関係が増え、生活が楽しくなり、活動を積極的に行っている。④社会参加により、一定の役割を持ち、役に立っているという実感を得ることによって、活動の満足感や感動が高まる。⑤自分の生活だけでなく、仲間や地域のことに関心を持つ。このように社会活動に対するニーズを高め、自らのコミュニティ福利に貢献する社会的発達を促すこと。⑥高齢者自身が自立した経済的基盤を持ちながら、職業やボランティアなど一定の役割で社会と何らかの関わりを持つとい

う社会的発達及び職業的発達を促すこと」(同上、p16)と指摘している。

3 結語

高齢者のボランティア活動の先行研究を以下にまとめておきたい。

高齢者によるボランティア活動は、高齢者による社会活動であるので、そもそも「高齢者による社会活動とはどのようなものであるか」が研究者の間で問われた。平野は高齢者の社会活動には特色があり、日常の生活、すなわち家庭やかつての職場などの視野からの自己完結型の活動であって、一般にひろく各種のコミュニティ活動に参加するというパターンではないと指摘した。また岡本は社会活動の定義が多様であることを前提としながらも、量的研究をつうじて、親しい友人や仲間の多さ、活動参加に誘われることが社会活動の促進要因となっていることを指摘した。これは平野の指摘と一部重なりながらも、仲間の人数の多さや、誘われることの大切さは促進要因として大切であろうというあたらしい指摘をしている。とくに中年期において、地域とのかかわりを経験していたことがプラスの要因になるという指摘は注目すべきであろう。

次いで「社会活動の関連要因」の研究では、坂上ゆかり・河原田まり子が、社会活動との関連要因として、前期高齢期の社会活動、近所や市内での活動情報の認知、ソーシャルネットワークの高さ、身体的負担感がないことなどをあげた。また経験的にはあたりまえであるが、岡本秀明は「居住年数が5年未満と短い者は、社会参加・奉仕活動への参加の阻害要因となっていた」ことを指摘した。

矢庭さゆり・矢嶋裕樹によると「生活機能が高いほど、社会参加がしやすいこと、経済ゆとり感がある者のほうが、他者の支援をする余裕も持てるということが社会参加の基盤にある」という。桂理江子・佐藤直由の指摘も類似しているが「高齢者の社会活動には、暮らし向きが普通以上であること、外出などへの誘いがあること、スポーツおよび学習活動への活動参加意向があること、の4項目が関連していること」と4項目との関連性を述べているところが大切であろう。竹内香織・福井享子は「主観的幸福感を従属変数として重回帰分析を行った結果、主観的幸福感と関連していたものは、社会活動の個人活動、主観的健康感、家族構成であった」と指摘した。

3番目の「生活満足度と社会活動との関連」では、岡本秀明が“日頃の活動満足度”の重要性を指摘した。香川幸次郎・中嶋和夫・芳賀博は「インフォーマルな社会活動は女性に

比して男性で、また健康度が高い高齢者ほど社会活動全般において活発になること」を示した。岡本秀明は「男女ともに地域基盤的活動が日ごろの活動満足度に関連していなかった」と指摘した。伊藤順子は「生活満足度は活動動機と有意な関係はなかった」と指摘した

高齢者の社会活動と生きがいに関する研究においては、梅谷進康・石田易司などはボランティア活動をする人はしていない人と比べて、人に役に立つ、大切な役割を担う、知識と能力が活用できるという意識がある傾向が見られると指摘した。高間由美子・杉原利治は高齢者の能力やパワーを生かせばお互いに技術や知識の伝授だけでなく、相互交流ができる。それこそが高齢者自身の生きがいであることを指摘した。村岡則子は「生きがい感を構成する“存在価値”とボランティア活動年数とに正の相関を認めることができた」と指摘した。神江伸介は高齢者がボランティア活動から生きがいを感じる傾向が見られると指摘した。つまり高齢者はボランティアをやることにより、知識と能力が生かせるし、高齢者間での相互交流ができるし、ボランティア活動により高齢者の老後生活にもっと生きがいのある存在価値が感じられるという。

「高齢者のボランティアの動機」については、田中共子・兵藤好美・田中宏二が動機として、大きく「向上動機」と「慈愛動機」の2因子に分けた。そして分析した結果、二種類の動機に有意な相関はなく、それぞれが独立した動機であるとかれらは判断した。

また伊藤忠弘は、「利己的動機」と「利他的動機」は明確に区分することはできず、1人のボランティアであってもその両方を同時に保持していると考えられると指摘した。

森保文・森賢三・犬塚裕雅他が以下の結論を出した。それはとても重要なので原文通りに引用しておく。すなわち「1、ボランティア活動への参加開始には、その活動の種類に特有の動機が関係し、一方、すべての種類のボランティア活動に共通して関係する動機はなかった。2、社会背景的要因についても、要因によって関係するボランティア活動の種類は異なった。係数の正負（たとえば女性か男性か）もボランティア活動の種類によって異なった。3、経済的要因である収入はボランティア活動への参加に対して関係が見られなかった。4、以上から、応募者の持つボランティアに対する動機と社会背景的要因から、興味を持ちやすいボランティア活動の種類を選択することが可能であった。5、動機の充足とボランティア活動の日常的参加との関係は認められなかった」。堀口康太・小玉正博は「自律的な動機づけに基づき参加することが Well-being を促すことを示唆している」と指摘した。

「高齢者のボランティア活動継続性」では以下のとおりである。村社卓はカフェに参加すれば、住民ボランティアが継続し、またその活動が維持できることを明らかにした。さらに無理のない姿勢や、気楽さ、自己管理という指摘があり、それも大切であろう。田中共子・兵藤好美・田中宏二は人への深い関与が活動の成果を得ることができるし、それを定着させることを指摘した。小宇佐陽子・清水由美子は活動の継続要因として、教室参加者との定期的・継続的な交流とその楽しみがあり、その結果として教室運営に対する役割意識が定着したことを指摘した。

「高齢者ボランティア活動の健康に及ぼす影響」においては、岡崎昌枝は坂出市の調査にもとづき、高齢者たちは、自らが社会活動へ参加することによって、より長く健康を維持したいと考えているのではないかと推察した。山内加奈子・斎藤功は以下のように指摘した。すなわち「初回調査時に主観的健康感が“健康”であった者が、5年後に“非健康”へ変化したことに関連する心理・社会的活動要因としては、性・年齢群別のすべての群において、初回調査時の生活満足度の低さが抽出された」ことを示した。藤原佳典・杉原陽子・新開省二はすでに他の論文で指摘したことと類似の指摘が多いが、それ以外に以下のことを新しく指摘している。すなわち、高齢者のボランティア活動は高齢者自身の心理的な健康度を高めるということ。また、身体的な健康に対しては高齢者ほどその効果が強い。さらに身の健康に最も好影響を及ぼす量的水準は、おおむね活動時間が年間40～100時間程度とするものが多い、という指摘である。

以上にまとめたように、日本の高齢者ボランティア活動の研究は、政策につながる多様な事実を別出してくれている。これらの指摘から「コミュニティ養老」サービスは、高齢者福祉施設での効果では得ることができない別の効果をもっていることも示している。たとえば、その活動が身体的、心理的にプラスの効果をもっていることなどがそうである。また、その効果を最大限に上げるには条件があることも教えられた。経済的な余裕や、付き合いの範囲や、前期高齢期からのやや長期の活動歴などがそうである。また誘われることの大切さ、活動を継続させることの工夫（人への深い関与、楽しみなど）の重要性などが指摘されている。

【参考文献】：(アルファベットの順序)

朝日新聞 Digital 「日本の高齢化率、世界最高 28.4% 推計 3588 万人」9 月 16 日発信、2019 年

藤原佳典・杉原陽子・新開省二「ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響 地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義」『日本公衛誌』、2005 年 p302

平野美千代「日本の高齢者の社会活動：概念分析」『日保学誌』3 号、2011 年 pp122-124

橋本修二・青木利恵・玉腰暁子他「高齢者における社会活動状況の指標の開発」『日本公衛誌』10 号、1997 年 pp761-767

堀口康太・小玉正博「老年期の社会的活動における動機付けと Well-being (生きがい感の関連) 自立性の観点から」『教育心理学研究』、2014 年 pp102-110

伊藤忠弘 「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』、2011 年 pp35-36、pp52-53

伊藤順子 「高齢者のボランティア活動参加動機とボランティア活動満足感、活動から得た利益および生活満足度との関係」『高齢者のケアと行動科学』24 巻、2019 年 pp43-50

香川幸次郎・中嶋和夫・芳賀博「高齢者の社会活動と生活満足度の関係」『日本保険福祉学会誌』、5 号、1998 年 pp71-75

小石真子・小笠原知子他「高齢者の健康度と社会活動について」『日本健康医学会雑誌』、11 巻 1 号、2002 年 pp13-16

神江伸介「最近の高齢社会：高齢者の政治参加、ボランティアと生きがい」『香川法学』30 巻、2010 年 p2、p42

小宇佐陽子・清水由美子「地域の保健・福祉の向上を目指した住民ボランティア育成への取り組み埼玉県鳩山町におけるこれまでの歩みと今後の課題 (小宇佐陽子・清水由美子など)」『日本公衛誌』、3 号、2012 年 pp162-169

韓榮芝「中国の高齢化と養老保障問題に関する研究」『長崎国際大学論叢』4 号、2004 年
桂理江子・佐藤直由「地域在住高齢者における社会活動の関連要因—仙台市を事例として」『Journal of health&social services15』、2017 年 p8

梁海艶「人口高齢化の背景の下でのコミュニティ在宅養老」『中国老年学雑誌』39 号、

2019年 p3322

森保文・森賢三・犬塚裕雅他「参加したいボランティア活動の種類と動機の関係」『The Nonprofit Review』、2010年 pp2-10

村社卓「高齢者の孤立予防を目的としたコミュニティカフェに参加する住民ボランティア継続特性—ボランティアの“楽しさ”に焦点を当てた定性的データ分析」『社会福祉学』58号、2018年 pp36-38

村岡則子「食に関する地域社会活動が生きがい感に及ぼす影響—地域高齢者の調査結果を通して」『地域総研紀要』12巻1号、2014年 pp31-36

岡本秀明「地域高齢者の社会活動研究における概念定義と測定および活動参加促進要因」『老年社会科学』36号、2014年 pp347-352

岡本秀明「都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討」『社会福祉学』53号、2012年 pp11-13

岡本秀明「高齢者の活動に着目した日頃の活動満足度尺度の作成」『社会福祉学』、50号、2009年 pp47-53

岡本秀明「高齢者における社会活動の促進・阻害要因の検討：独居・要介護・在日韓国人高齢者へのインタビュー調査から」『社会福祉学』48号、2008年 pp148-151

岡本秀明「高齢者の社会活動と開発された活動満足度の得点との関連—“日ごろの活動満足度尺度”“社会活動に関連する過ごし方満足度尺度”」『老年社会科学』、35巻1号、2013年 pp4-12

岡崎昌枝「高齢者の社会活動と社会交流が健康寿命の延伸に及ぼす影響；地方都市における高齢者の社会活動からの検討」『日本福祉教育・ボランティア学習学会研究紀要』、2017年 pp66-70

坂上ゆかり・河原田まり子「地域在住の日常生活動作が自立した後期高齢者の社会活動の実施に関連する要因」『日本地域看護学会誌』20号、2017年 pp40-44

竹内香織・福井享子「地域高齢者における主観的幸福感に関連する社会活動要因」『三重看護学誌』、13号、2011年 pp24-28

田中共子・兵藤好美・田中宏二「高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果—ソーシャルサポートの交換の視点を中心に」『文化共生学研究』5号、2007年 pp53-68

高間由美子・杉原利治「高齢者の社会参加と生きがいに関する研究 1 高齢者の社会参加の意義」『東海女子短期大学紀要』28巻、2002年 pp31-38

梅谷進康・石田易司他「高齢者の社会参加といきがい」『桃山学院大学総合研究所紀要』、2017年 pp50-58

殷婕「乐山コミュニティ養老サービス体系に存在する問題と対策の研究」『公共管理』21号、2019年 p90

矢庭さゆり・矢嶋裕樹「地域高齢者の社会参加の実態とその関連要因」『新見公立大学紀要』、32号、2011年 pp117-121

山内加奈子・斉藤功他（2015）「地域高齢者の主観的健康感の変化に影響を及ぼす心理・社会活動要因 5年間の追跡研究」『日本公衛誌』、2015年 pp538-545

【注】

(1) 日本の高齢化率は28.4%で、それは世界でもっとも高い（朝日新聞 Digital,2019）

(2) 高齢者のボランティア活動の動機の研究はそれ以外に、桜井政成（2005）、桜井政成（2002）、小野奈奈（2013）などがある。

第二章

高齢者のコミュニティ・ボランティア活動を促す「無自覚な自己快楽」—兵庫県西宮市の香櫨園地区を事例として

1 問題設定

ボランティア活動にはそれぞれ固有の目的がある。しかし、高齢者たちは自分たちの通常の活動の目的を超えて、がむしゃらに強い熱意でボランティア活動をしつづけることがしばしばある。本章では、そのような動機の背景として、結論的には「無自覚な自己快楽」と名づけた特徴をすくい上げたいと考えている。

そもそも筆者が目的のない動機ということに関心をもったのは、著名な政治学者、佐々木毅・金泰昌の共編になる『公共哲学7』に収録された鳥越皓之の論文「ボランティアな行為と社会秩序」に刺激を受けたからである。そこで鳥越は阪神淡路大震災における被災者としての経験から、被災地に遠くからやってきて、自分たちの横に単に立ってくれたその事実だけで心の支えとなり、涙が出そうになった。そしてその人たちは「止むに止まれぬ」動機からやってきたのだと指摘する。そしてつぎのようにいう。「これを社会学的に見ると難しくなってくる。“止むに止まれぬ”というのは“目的”がない。例えば里山を守るためという目的」をもつ「ボランティアとは違う」（鳥越皓之、2002、pp231-239）という。

筆者は阪神淡路大震災というような大災害にかぎらず、ボランティア活動にはこの「目的のない動機」があるのではないかと仮定した。目的のない動機が、鳥越の指摘のように「止むに止まれぬ」ものなのか、それとも異なるものがあるのか、それは不明であるが、西宮のボランティアを分析することで、この「目的のない動機」とはなんであるかを明らかにしたいと思った。これが本章の課題である。

よく言われるように、ボランティアには自発性というものが不可欠なものである。そして「人間の自発性を考察するにあたり、それが関与する次元として、試みに<動機

づけ>と<意味づけ>という二つの次元を想定する」(海野和之、2014、p3)と海野が指摘するように、動機というものが、意味づけと並んで、ボランティアを考えるときにとても大切である。

この動機に言及をしていて、かつ本章の課題である「高齢者のコミュニティにかかわるボランティア活動」の代表的な論文として、田中共子・兵藤好美・田中宏二「高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果—ソーシャルサポートの交換の視点を中心に」、伊藤忠弘「ボランティア活動の動機の検討」、森保文・森賢三・犬塚裕雅他「参加したいボランティア活動の種類と動機の関係」などがある。それらは日本の高齢者のコミュニティの研究において、高齢者がコミュニティ活動に参加する動機を分析したものである。

ここではどのような動機によって、高齢者がコミュニティ活動に参加するかを分析している。たとえば田中共子らによると動機というものは、大きく向上動機と慈愛動機に分かれる。これらは自己に焦点を当てた向上を目的とした動機と、他者に焦点を当てた愛他的な動機のことである(田中共子・兵藤好美・田中宏二、2007、p66)。この愛他的動機は、もしかしたら、目的のない動機かもしれない。

また伊藤忠弘は、ボランティア活動を継続している人にとって、その動機が変容していくだけでなく、意識される複数の動機をいかに調整して統合しているかを検討する必要性を指摘している(伊藤忠弘、2011、p53)。この「動機が変容する」という事実は、目的のいわば“揺れ”が想定され、複数の動機というものも、目的があってそれに基づいて動機付けられるということを勘案すると、目的が不明瞭になっているかもしれない。

そういうことを考えると、これらはともに貴重な指摘である。

森保文らは高齢者ボランティア活動にはそれぞれ固有の目的があり、その目的に合わせて動機があるため、ボランティア活動全体に共通する動機はなかったと指摘している。すなわち、これは目的のない動機というものがないという指摘であり、そのため共通する動機がないと言っている。「共通する動機がない」という指摘は、裏を返すと「目的のない動機はない」という前提に立っている。これは本章の仮説に対置する意見であるので、刺激的な指摘であると言えよう。

筆者の第一章の研究史の論考「日本における高齢者ボランティア研究の現状と課題」で複数の動機の関係性やそれらの種類を検討した。それをさらに深める試みとして、

先に述べた本稿の目的をここで改めて確認しておきたい。

なぜ、高齢者はがむしゃらに強い熱意で活動をしつづけていられるのだろうか、という疑問がある。高齢者たちにはそれこそ、自分の体力や精神力を超えるほどの頑張りを日常のコミュニティ活動でしている人たちが見受けられ、また、このような人たちがいるからこそ、コミュニティが活発になっているのである。この「がむしゃらさ」の背景を探ることが本章の課題であり、そのための作業仮説としてここでは、鳥越が「止むに止まれぬ」動機と表現する側面が強く作用しているとの見方をとる。以下では、兵庫県西宮市の香櫨園地区を対象地に事例を取り上げて分析し、この仮説を検証したい。

2 香櫨園地区とその地区のボランティア活動

香櫨園地区は、西宮市の南西部に位置し、南は大阪湾の一部である香櫨園浜に接し、西は芦屋市と境界を接する閑静な住宅地である。この地区は、香櫨園小学校区の12の町⁽¹⁾から成り、人口は約13,363人で、このうち65歳以上の高齢者は2,396人で高齢者比率は約18%である。(西宮市町別年齢5歳刻み住民基本台帳ホームページ、2021年)

この香櫨園地区は、郊外の都市住宅地であり、日本でコミュニティにおける高齢者ボランティア活動を分析する場合の典型的な場所のひとつであるのと、筆者が属する大学の近隣であるので、調査が便利であるという理由でこの場所を選んだ。

兵庫県西宮市のボランティア活動についての特性とボランティア組織について簡単に紹介しておきたい。

まず、この地域は1995年1月の阪神淡路大震災を経験した地域である。そのときのボランティアの経験があったからこそ、現在高齢となっても各分野のボランティア活動に参加しているという人もいるくらいである。すなわち、高齢者ボランティアが盛んな地区なのである。

この地区で、高齢者たちはさまざまな活動をしている。たとえば喫茶店の運営、子どもに対する環境教育、玩具病院、生き生き体操、ふれあい配食などである。



写真1 わがまちクリーン大作戦 2019年12月8日

筆者撮影

阪神淡路大震災のときはどんな状態であったのかを、ある地域のリーダーからその経験を聞き取りした。それをここに記しておこう。

「1995年1月17日5時46分に発生した巨大地震により、6,434人が亡くなっ

た。10万5千戸の家屋が全壊し、14万4千戸の家屋が半壊した。

電気・ガス・水道のライフライン

が止まり、阪急・阪神・JRの鉄道がストップし、高速道路も橋脚が倒壊して通行不能となった。震災発生直後、倒壊した建物の下敷きになった人々を助けだすために、隣近所の人たちが協力し合って懸命に救出活動をした。また、たまたま備蓄していた家庭の水や食糧は隣り近所の人たち同士で分け合って命をつないだ。住む家を失った人、間断なく続く余震に怯える人たちは近隣の小学校体育館や集会施設に避難して、寒空の中で辛い避難生活を送った。

公共交通機関がストップし高速道路も使用できないため、道路はあふれる車両で身動きが出来ないほどの激しい渋滞であった。1日平均2万人、3ヶ月間で117万人のボランティアが全国から集まった。日本では、この年は“ボランティア元年”⁽²⁾と呼ばれ、その時生まれたボランティア精神・ボランティア行動は、その後に発生した東北大震災や熊本地震、相次ぐ自然災害などの復旧・復興支援に活躍している災害ボランティアに引き継がれていると思う」。

このようにこの震災があった1995年が“ボランティア元年”とよばれたように、この地域から日本では、本格的なボランティア活動がはじまったのである。

そのときのボランティアの経験があったからこそ、現在高齢となっても各分野のボランティア活動に参加しているという人もいるぐらいだと地元の人たちは言っていた。

この地区では、高齢者たちはさまざまな活動をしている。最初に代表的な活動グループの活動概要を紹介しておこ

う。



写真2 出前講座での全体説明

2019年11月29日 筆者撮影

2.1 「NPO法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」⁽³⁾

このグループのボランティア活動は「チーム里浜づくり」、「ビーチ・クリーニング」、「出前講座」の3つに分けられる。

「ビーチ・クリーニング」は雨

のない日に毎朝メンバーがゴミを拾う作業をする。毎日曜日に10時から12時まで約8人の

メンバーが集まってゴミの収集と除草を行う。ゴミの収集実績（H28年度）として、45Lゴミ袋526袋、90Lゴミ袋729袋、草束を23束回収した。延べ年間898名が参加した。

「出前講座」とは近隣の小学校（香櫨園小学校、浜脇小学校）の3年生児童を対象に御前浜・香櫨園浜で自然環境学習を行っていることを指す。海浜植物の観察、海辺の生き物（カニ、貝など）の観察、西宮砲台の見学、凧あげ、炭拾い等を行っている。

凧あげは子どもたちに自然の風を知ってもらう。御前浜・香櫨園浜は現在でも自然



写真3 出前講座でのボランティアによる説明

2019年11月29日 筆者撮影

の砂浜の残る貴重な海岸なので、それを子どもたちに体験してもらおう。西宮砲台など歴史にあふれている国の文化財も知ってもらう。

この法人は小学生向けの里浜環境教育をおこなっている。具体的には、掃除や草むしりなどであ

る。

参加者はここでのボランティアをすると、情報の交換ができる、ネットワークを作ることができる、自然に接するこの作業は、気持ちがいいという。毎回掃除するのは5、6人である。ただ登録されているメンバーは20人ほどであるという。ここでよく言われるスローガンは「好きな時に、好きな人たちが、好きなところをやる」である。

2.2 「ふれあい配食」



西宮市香櫨園地区社会福祉協議会が開いた高齢者ボランティア活動の一つとして「ふれあい配食」⁽⁴⁾がある。それは6年前にスタートした。ふれあいを通して、地域の高齢者を守るという趣旨である。具体的な活動として、利用者が高齢者が自治会を通してチケットを10枚単位で買う。1食で消費税込みで600円である。ボランティアは、「こんにちは！」と見守りをかねて必ず声掛けする。訪問の高齢者ボランティアは安否確認や簡単

写真4 ふれあい配食の食事内容

2019年12月9日 筆者撮影

なお話をするという。お弁当の内容はカロリーと塩分が控えめのおかずを5品とご飯である。訪問の高齢者ボランティアのスタッフが夕食のお弁当

を週1回「月曜日」に希望者の自宅へ届ける。訪問時間は毎週月曜日の午後2時から4時の間である。対象としては、1人暮らしの高齢者（障害者）、家族と別々に食事をする高齢者、高齢のご夫婦である。それに携わる高齢者ボランティアは主に7人である。年齢は平均で70歳である。毎回配食の依頼を受けるのは26～27人ぐらい。毎週一回なので、対象は毎月のべ100人ぐらいで、1年で同1,200人ぐらいの計算になる。

2.3 「ひろばカフェ」

ひろばカフェ運営の最大の特徴は、有償ボランティア（現在12人のスタッフが午前・午後に分かれ、それぞれ2名ずつシフトに入る仕組み）であり、熱意、チャレンジ精神、助け合いの心によって運営（活動）が推進されていると関係者が言っていた。

スタッフの主要メンバーは、ひろばカフェの最初の開設準備段階から計画作りに参画している。どんなイメージの喫茶コーナーを創っていくか（基本コンセプト）、その

イメージに合わせてどんな施設・什器・備品（調理器具・テーブル・椅子・カーテンなど）にするか（設備、備品コンセプト）、どんな品目をいくらで価格で提供していくか（メニュー）、接客では何に気を付けるか-----などがくり返し論議されて、ひとつずつ決められていった。

その中で「ひろばカフェ」というネーミング、「ちょっとおしゃれで、ほっと一息できる憩いの場」という、基本コンセプトが固まっていった。

この「スタッフが主体的にひろばカフェの運営に関わり、皆の知恵と力を合わせて、よりよい運営をしていく」という組織風土が今日まで引き継がれており、ひろばカフェ運営の改善方針（方針変更）は、2ヵ月に1回開催されるスタッフ会で協議されて、その結論を上部機関である「喫茶部会」に報告・提案することになっている。

ひろばカフェは「県民交流広場事業」小学校区を単位として、施設整備費1千万円、活動費300万円（60万円×5年間）を兵庫県が補助し、地域活性化を目的として2005年に始まった県の事業である。

2.4 「神戸・灘 おもちゃ病院」

日本玩具病院協会は、壊れた「玩具」を原則無料で修理し、新しい生命を与えることに価値を見だし、生きがいを感じているボランティアグループである。それは1996年に全国組織化された。

玩具病院の活動内容は得意技を生かすボランティア活動である。玩具ドクターの会員は、長年の経験や専門技術を活かすことに誇りを持って地域玩具病院でボランティア活動を行っている。子どもから「ありがとう！」の聲がかかると嬉しいという。壊れた玩具を直すことによって、資源の消耗を少しでも減らすことは、大切なリサイクルであり、それは消費者の使い捨てる意識の改善にも役に立つという。（日本おもちゃ病院協会ホームページ 2021.1.31）

「神戸・灘おもちゃの病院」は神戸での玩具病院のボランティア団体である。この団体には玩具ドクターが50名ほどいる。神戸・西宮地区10か所でおもちゃ病院を開設し、おもちゃの修理をしている。2018年からLさんはおもちゃドクターとして、香櫨園おもちゃ病院を開設した。毎月第3土曜日10時～12時、ひろばカフェ内の大テーブルを利用して、子どもたちにとって大切なおもちゃを無料で修理し「物を大事にする心」を育てている。



写真5 神戸・灘おもちゃの病院 おもちゃを修理する高齢者ボランティア 2019年11月16日 筆者撮影

2.5 「いきいき体操」

西宮いきいき体操は、地域住民がグループで、身近な場所において行う高齢者向けの筋力向上を目的とした体操である。手首や足首におもりをつけ、DVDの映像にあわせて行う。いきいき体操の効果として、体操初回と1年後の体力測定効果を比較したところ、80%以上の参加者が改善した。また、体操に毎週参加することで、「友達の輪が広がりました」と言った声が聞かれ、健康づくりだけでなく、仲間づくりと地域づくりに繋がっている。香櫨園地区でも高齢者のために、週に一回、おおむね30人ぐらいが集まり、だれでも参加できる体操をしている。(西宮市健康福祉ホームページ、2021)

3 高齢者ボランティアの活動事例

一つ目として「ひろばカフェ」の運営から説明をする。

普通は喫茶店と言えば、多くの人を抱くスタッフの印象としては若い女性の姿であろう。しかし、ひろばカフェに行ってみると、見られるのは年を取った高齢者のボランティアの女性である。最高齢の女性は79歳である。しかし、年を取ってもみんな元気にひろばカフェでボランティアをしていて、元気にお客様に声をかけて、積極的に対応している。

たとえば、図書館の近くに住んでいたお婆さんは亡くなる前は、晴れる日は息子さんが車いすを使ってひろばカフェを利用していた。お婆さんが来ると、当番の高齢者

ボランティアはだれでも優しく対応をして、いろいろ話を聞いたりした。そしてそのお婆さんはひろばカフェの音楽を聴きながら、上を仰いできれいな青空を見るのがすごく好きになった。

ここに来た客にとっては、ここは夙川公園付近の安らぎの場所である。ここは西宮市民図書館を利用した人にとって疲れたときに、休むところである。ここはまた子どもを連れて本を読んだ後で軽食を済ませるところでもある。さらに一週間での仕事に疲れると、週末に友達の間で静かにおしゃべりができる場所でもある。

ここで働いているボランティアを見ていると、客が落ち着いている感じがする。たとえば、ある客は長野県出身で、ちょうどこのスタッフのひとりも長野県出身であり、いろいろな長野県の話が出てきて、故郷への恋しさが放たれて、ホームシックがだんだんなくなったという。

ひろばカフェはおしゃれな喫茶店ではないが、きれいで、おいしいコーヒーが飲めるところで、机の上に毎日小さくて白くて透明の瓶の中にきれいな一輪の花と特別な草などが飾られている。それにより、高齢者ボランティアは細かいところまで考えていることが分かるし、ボランティアたちはたいへん頑張っている。また BGM の音楽で気持ちを軽やかにさせることができるようになっている。家庭料理みたいな昼ご飯のメニューもよく考えてあり、旬の味のご飯を提供している。それらはボランティアたちがいろいろ工夫して考えたメニューなのである。

なぜこのひろばカフェがこんなに人気があるかというと、中心リーダー格の T さんと他のリーダー、そして 1 人の建築士のボランティアが一生懸命に頑張り、ひろばカフェの設計とひろばカフェの運営に力をそそぎ、行き届いた管理があるからである。

また、大切なことであるが、ここでの高齢者ボランティアはひろばカフェに来て自信がついたという。特にここで一番年齢が高い女性は二年前ご主人がなくなってしまった。ご夫婦はすごく仲が良く、一時彼女はとても悲しかった。もしひろばカフェのボランティアという仕事がなかったら、たぶん毎日悲しい日々を送っていたかもしれない。しかしひろばカフェのおかげで、自信をつけて、楽しい毎日を送っている。ひろばカフェで働いているリーダーがいうには、ここでのボランティアのスタッフはボランティアの仕事で生きがいを再発見したという。またいろいろな人に出会うのが楽しいようだともいっていた。

二つ目として「NPO 法人チーム御前浜・香爐園浜 里浜づくり」の活動を検討する。

ここでのボランティアでは、まず「出前講座」である。

「出前講座」がなぜ興味深いかというと、高齢者たちは子どもを連れて凧あげをしたり、海浜植物の観察、海辺の生き物（カニ、貝など）の観察、西宮砲台の見学などをさせる。子どもの教育に携わるのは学校の先生と保護者たちだけではなくて、いろいろな地元の高齢者ボランティアと一緒に手伝って助けていることになる。それは子どものいろいろな社会勉強になるし、子どもたちは愛情にあふれた社会環境に囲まれてすくすくと育っている印象をもつ。

高齢者たちは長い社会経験があるので、子どもに対してたんに環境教育だけではなくて、いろいろな知識を与えることができる。そしてその経験を子どもたちに教えたりするので、子どもたちは高齢者の知恵を感じることができるのである。

たとえば、一緒に三年生の子どもたちを連れて凧あげをするときに、子どもはすぐに凧があがった様子を見たがった。しかし、実際の現場に行ってみたら、はじめは風がなくて、子どもたちは風を待つうちに疲れて休んでしまった。そんなときに、高齢者ボランティアが言ったのは「みんな静かに待っていて、風がもうちょっとするとやってくるよ。どんな時でも急がないように」である。

こんな短い言葉であるけれども、子どもに対して「どんなことが欲しくても、落ち着いて待つ道理を伝えた」とボランティアの人が言っていた。

そのうちに風が来て、だんだん凧があがるようになって、子どもたちは興奮して、大騒ぎをした。高齢者が説明することもぜんぜん聞かないで。その時だんだん子どもたちは風の強さのせいで、咳が出てきて、不調を訴える子が出てきてしまった。それで高齢者のひとりが子どもの先生に対してこう言った。「やはり凧あげという活動であるから、前もって風邪気味の子ども、また咳が出る子どもを控えたほうがいいのじゃないかな」というアドバイスをした。

ボランティアのリーダーの多くは孫を持っているから、逆に現場の先生方にも「子どもに対していつでも行き届いた配慮が必要なことを伝えた」という。その日も担当の若い先生にとっても成長の機会になったのではないかという感想をリーダーは言っていた。

「ビーチ・クリーニング」の活動はつぎのようなものである。雨のない日に毎朝メンバーがゴミを拾っている。日曜日なのに、掃除されて、音を出して、「うるさい」

という苦情を言った住民もいた。そのため、警察官が呼ばれた。その時、ボランティアのひとりはずごく怒ってその住民と喧嘩になってしまった。

かれが怒ったのは、一生懸命に頑張って浜をきれいにしたことに、苦情をいわれたからであった。これに対して住民たちは、せっかくの日曜日に朝寝坊をしたいということで、苦情が出たのであった。また、雑草を刈り取ったときには、「海岸には貴重な草を置いてほしい」という反対意見もあった。高齢者のボランティアたちはずごく迷った。しかし、リーダーが言ったのは「浜がきれいになって、自分もすがすがしい気持ちになる」。「今では浜は完全にきれいになりましたね」と。

筆者の質問に対し地元の人たちの「マナーがよくなってきたのはいつからと説明できません。いつの間にかとしか言えませんねえ。きれいになったので捨てにくくなるものですよ」と答えていた。

「それに、台風の時には、いつも応援していただいている大阪ボランティア協会に応援を依頼した。また別の団体も多くの人を集めて対応してくれた。市も特別態勢で臨んでくれた」。高齢者ボランティアたちが浜をきれいにしたために、多くの市民たちが浜を大事にする意識が育まれたという解釈である。

リーダーがいうには、かれらボランティアの人たちと付き合っているうちに感じたのは彼らが年を取っても負けない気持ちがあって、何かをやっても必ず精いっぱいやることだ、そうだ。

たとえば、「NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」を運営するために、一定のお金が必要である。彼らはインターネットでセブンイレブン記念財団の助成金情報を検索して申請した。そのための書類作成に多くの時間を割き、また仕事に集中した。さらに自分で懸命にPPT作成をし、会社の面接会で懸命に説明をし、結果として、そのプログラムのお金をもらった。そのため去年の「NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」の活動の金銭的保障ができたのである。

またリーダーのひとりから聞いたボランティアの動機について。彼が言ったのは「ビーチ・クリーニングは主に除草することですが、春から夏にかけては除草の早さが生えてくる速さに追いつかないので焦りながらビーチ・クリーニングをしている。しかし、自分のやった除草の成果は目で見えて判りやすいので、成果を楽しみながら除草している。責任を負って実施しているわけではないので気楽である。自宅に居るだけでなく、仲間と一緒にテニスしたり、屋外の自然に触れながらの除草は植物の生態

を身近に感じることができ、すがすがしくも感じる。色々な植物の名前を知ること
楽しみの1つである」。

高齢者ボランティアはそのボランティアをやっているうちに、自然への楽しみも一
つになるのだろうと推察される。自然の楽しみとともに、生きがいを感じる。ボラン
ティアの彼が言ったのは「ビーチ・クリーニングをするのは、良く歩いて健康を貰
い、浜がきれいになってすがすがしい気持ちになります。そして皆さんから喜んで
もらえます。“している”のでなく“させてもらっている”である」と。

また、ここでのボランティアの多くは一緒にテニスをするメンバーたちでもある。
知らず知らずに、コミュニケーションをしたり、情報を交換したりして、信頼感があ
って、チームワークの形成ができて、一緒にボランティアをする雰囲気を作った。

そして、ボランティアのリーダーの2人が言ったのはボランティアを続ける理由は
「自分がもし今日体が良くない場合、今日行かなくてもいい。今日すごく体が良さそ
うで、いっぱいやる」ということである。自分のペースでやるのが続けられる理由で
ある。またボランティアグループのスタッフの間での友情は素直で、競争関係がなく
て、お互いに交代してやりたいときやる。それはボランティアを長年続ける理由であ
る。つまり高齢者のボランティア活動に従事する動機はボランティア活動を自分のペ
ースに合わせて従事しつつ、友情関係を築きながら行うということである。

三つ目は「ふれあい食事」である。

ふれあい食事は独居高齢者のために、一週間に一度、高齢者にお弁当を配ること
である。お弁当を通して高齢者の安否が確認できる面白いアイデアである。お弁当を
配る作業をした高齢者ボランティアの中の1人のSさんは、今年で72歳である。彼
が配ったお弁当の相手は80歳のご夫婦である。夫婦のうち妻の方とSさんは共通の
趣味は株の話である。同じ趣味で、お弁当を配りながら、二人ともいろいろ話が盛り
上がって、お互いに信頼関係が築けて生きがいになる。

毎週、なにか期待できるものがある。高齢者ボランティアのSさんにとっても一週
間に一回株の最新の情報を集めて女性に伝えて彼女の笑顔を見て、元気であることを期
待している。

高齢者ボランティア活動に参加して、お弁当を通して、孤独から離れて世間からの
温かさを感じることができるという。

四つ目は「いきいき体操」である。生き生き体操は一週間に一回高齢者を集めて活動をする。興味深いのは、生き生き体操の後で、その高齢者ボランティアはカラオケをしたり、自分の才能を生かしたりして高齢者たちを楽しませることである。

例えばその1人の高齢者はもともと小学校の先生であった。笛ができて、毎回彼の番になると、彼が笛を吹いて、高齢者たちは歌を歌ったりする。それはすごく盛り上がっている。生き生き体操の後でみんなは合唱会にも参加できて、体と心も全部で休ませることができる。毎回終わる時、快くなって、新しい一週間に向かって、みんなが頑張る意欲がもらえるという。

五つ目は「玩具病院」である。

玩具病院に参加するドクターは5人ぐらいである。その中で最高齢は84歳のNさんである。彼はもともと建設会社でエンジニアとして勤めた。60歳になって定年になった。彼は、子どもを接待するのが好きなのだそう。それで定年になってから神戸科学館でボランティアとして生徒たちに展示物を紹介した。4年前から神戸・灘玩具病院に入るようになって、一か月に30個ぐらいの玩具を修理する。

子どもと保護者が来ると、彼はまず受付で微笑みながら保護者から手渡された玩具を真面目に見ながら確認する。彼が言うには「歳を取っているうちに、子どもの顔を見て元気をもたらって嬉しくなる」と。「子どものために、何かできることをいつも考えて、それが生きがいになる」と言った。それで玩具病院に来た。11月16日に来た母親と娘さんはおもちゃの「自動販売機」を持ってきた。受付で手続きをしてから、Nさんが1人の高齢者のボランティアのところに案内した。お母さんが言ったのは「この自動販売機は上のお姉さんがこの子にあげた玩具です」。

「よく娘さんのために玩具を買うのでしょうか」と私が聞いてみた。その母親は「あまり買わない。ただクリスマスとか、お誕生日ぐらいの時だけ買ってあげる」と答えた。また「その自動販売機がすごく気に入っていて、修理に来た」と答えた。

「もし、修理ができたなら、嬉しいの?」と筆者はその娘さんに聞いてみた。彼女が真面目に1人の高齢者ボランティアの修繕作業の様子からとても期待をしていることがその様子で分かった。ドクターの高齢者ボランティアは一生懸命に道具を使いながら自動販売機がなぜ動かないのかをチェックしていた。やはり目の前で診断して、すぐ修理できないそうである。それでその保護者と娘さんに「この玩具は入院する必要がある」と伝えた。

もう一人の高齢者ボランティアは玩具病院のリーダーである。彼はここで待っている子どものためにたくさんの手作りの玩具を見せながら対応している。彼の説明によると、玩具病院は日本全国で行われているボランティア活動のひとつである。高齢者たちが子どものために何かできることがあるのか、という考えから玩具病院が生まれた。

玩具は時代によって異なるものの、玩具は子どもの時の貴重な思い出である。お姉さんから受け継がれても、妹さんにとってもその玩具はもっていてうれしいもののようにだ。その玩具にたいしての愛着が受け継がれるのだと言えるかもしれない。

高齢者ボランティアは一生懸命に自分の技を生かして子どものためにできるだけ玩具をもとの様子に戻れるようにしようとするのは本当に素晴らしいことである。高齢者たちはそのボランティア活動を通して自分はまだ頭がしっかりしていて、まだ若い人と同じように技術を生かすことができる。もし玩具をちゃんと修理できたら、達成感があるし、生きがいも感じられるという。

日本の高齢者ボランティアたちはいろいろな分野で活躍していて自分の力でコミュニティに貢献している。多くの高齢者たちが言ったのは高齢者ボランティア活動があって、毎日充実した日々を送っていて、家に閉じ込もっているよりいい。素朴な感じ方であるけど、一人ひとり自分の力で子どものために、高齢者が相互に高齢者のために一生懸命に頑張っている。

4 結論——目的のない動機について

1の「問題設定」で述べた「目的のない動機」とは活動目的が結果的に明瞭でなくなったか、消滅しているものを指す。ボランティアの活動は言うまでもなく、その組織のボランティアの目的がある。だが、事例をつぶさにみていくと、本来の目的とは異なる動機があることが分かる。鳥越皓之が述べた「止むに止まれぬ」もそうだろうが、それとは異なった何かもある。それはなんだろうか。

筆者が想定しているボランティアの本質的要素をめぐっては、示唆的なものとして、「異なる他者と支えながら生きる」(西山志保、2005、p3)や「ボランティアは個人化社会における“連帯の体現者”としての意義」(三谷はるよ、2016、p19)という指摘が

ある。ただし筆者は、それらとは若干ニュアンスを異にするものの作用をここで強調したい。

またしばしば動機は利他主義的なもの、利己主義的なもの、そのふたつの混在した複数動機的なものに分けられる（桜井政成、2007、pp23-27）という指摘もある。だが、すでに見た高齢者ボランティアたちの体験談は、これらの指摘に適合しつつも、なにかこの解釈では割り切れないものを残している。それはなにであろうか。

それをあきらかにするために、1節の問題設定のときに指摘のあった愛他的動機などを念頭におきながら、3節の「高齢者ボランティアの活動事例」から、まず、ポイントを3つにまとめよう。

1つは、人間相互の絆というものをとても重視して、その絆の維持に高いプラスの評価を与えていることである。たとえば、2節で「ここでのボランティアは多くは一緒にテニスをしたメンバーたちである。知らず知らずに、コミュニケーションをしたり、情報を交換したりして、信頼感があって、チームワークの形成ができて、一緒にボランティアをする雰囲気を作った」という。この背景にはリーダーによる絆形成への配慮としてテニスの活動があったのであるが、ともあれ、絆の維持のために、おもいつくことはなんでもするという活動の多様性と、人間相互の親密性を生み出しており、そのためか、現在も彼らは一緒にテニスをしている。

自然に築かれる絆もある。「お弁当を配りながら、二人ともいろいろ話が盛り上がって、お互いに信頼関係ができて生きがいになる」。このような事例である。このような絆を媒介として、「自信をつけて、楽しい毎日を送っている」ということになる。

2つは、活動する高齢者はいわば「主役」となっている。このばあいの主役とは自分たちが活動をするからこそ、状況が変化するという「変化を促す主体」を意味している。たとえば、ビーチ・クリーニングで一部の住民と小さな諍いを起こすが、あるリーダーが言ったのは「浜がきれいになって、自分もすがすがしい気持ちになる。(中略)」。マナーがよくなってきたのはいつからと説明できません。いつの間にかとしか言えませんねえ。きれいになったので捨てるにくなるものですよ」と答えていた。この“自分たちが”動くことで、周りが人間的信頼と環境美化を生み出すという体験である。

3つは自分たち自身に直接かかわることだが、「心のやすらぎ」を覚えるからである。元小学校の先生が「笛を吹いて、高齢者たちは歌を歌ったりする。それはすごく盛り上がっている。生き生きの体操の後でみんなは合唱会にも参加できて、体と心も

全部で休ませることができる。毎回終わる時、快くなって、新しい一週間に向かって、みんなで頑張るという意欲がもらえる」。また、「歳を取っているうちに、子どもの顔を見て元気をもらって嬉しくなる」。「子どものために、何かできることをいつも考えて、それが生きがいになる」などもそうである。ただ生きがいといえば、先ほどの桜井の分類の利己主義的動機とも言えるかもしれない。ただ、阪神淡路大震災やその他のさまざまな厳しい経験をしてきたかれらの心のやすらぎや事例でも出てきた楽しみと表現されているものは、本人もそうだが、観察者にとっても、その気持ちが分かってなかなか言葉で表現しがたいものである。

ともあれ、たしかにこれらは「福祉」や「清掃」のためという明確な目標ではないし、抽象的な動機である、利他的や利己的な動機といってもしっくりこないものである。そこで、ボランティア活動の本来の目的から離れた、このようなものがあってこそ、ボランティア活動はつづけられていることがわかる。それは彼らの言葉を借りれば「好きだから」「出会いがあるから」「若い者に負けない気持ちがあって、精いっぱいやる充実感」「孤独を離れた世間からの温かみ」というようなさまざまな表現がある。それらを思い切って一言にまとめれば「無自覚な自己快楽」ではないだろうか。そしてこの「無自覚な自己快楽」を高齢者が持続できるのは、もちろん快楽そのものもあるが、それ以外に、3節の事例で示したように、ボランティア活動は、他から強制されたものではなくて、自分の体の調子に合わせて活動できること、また「ボランティアグループのスタッフの間での友情は素直で、競争関係がなくて、お互いに交代してやりたいとき」にやれることであろう。

すなわち、目的のない動機として鳥越のいう「止むに止まれぬ」もそうだろうが、それは大きな災害などの特殊な環境で顕現しやすいものだと思う。それ以外にいま述べた「無自覚な自己快楽」がとりわけ、高齢者ボランティアには存在すると思われる。

【参考文献】：(アルファベットの順序)

川村匡由 『ボランティア論』 ミネルヴァ書房、2006年 pp32-33

三谷はるよ 『ボランティアを生み出すもの』 有斐閣、2016年 p19

西山志保 『ボランティア活動の論理』 東信堂、2005年 p3

日本おもちゃ病院協会ホームページ、<https://www.toyhospital.org/about/service>、「日本おもちゃ病院協会とは」、閲覧日 2021年6月5日

日本西宮市健康福祉ホームページ

<https://www.nishi.or.jp/kenko/koreishafukushi/ikigai/kaigo-yobo.html>、「介護予防事業 西宮いきいき体操」、閲覧日 2021 年 6 月 5 日

日本西宮市町別年齢 5 歳刻み住民基本台帳人口ホームページ、

<https://www.nishi.or.jp/shisei/tokei/jinko/daichojinko5.html>、「令和 3 年（2021 年）3 月末現在町別年齢 5 歳刻み住民基本台帳人口」、閲覧日 2021 年 6 月 19 日

桜井政成『ボランティアマネジメント』ミネルヴァ書房、2007 年 pp23-27

田中共子、兵藤好美、田中宏二「高齢者援助ボランティアにおける活動の動機と効果 —ソーシャルサポートの交換の視点を中心に」『文化共生学研究』5 号、2007 年 p66

鳥越皓之「ボランタリーな行為と社会秩序」佐々木毅・金泰昌編『公共哲学 7』東京大学出版会、2002 年 pp231-239

海野和之『社会参加とボランティア』八千代出版、2014 年 p3

伊藤忠弘「ボランティア活動の動機の検討」『学習院大学文学部研究年報』58 号、2011 年 p53

湯艶「日本における高齢者ボランティア研究の現状と課題」『大手前大学論集』、2021 年 pp245-257

森保文・森賢三・犬塚裕雅他「参加したいボランティア活動の種類と動機の関係」ノンプロフィット・レビュー1号、2010年

(1) 12 町は松下町、屋敷町、弓場町、川西町、中浜町、堀切町、上葭原町、中葭原町、下葭原町、大浜町、川東町、川添町である。

(2) 川村匡由によると、「1995 年 1 月 17 日 5 時 46 分ごろ、マグニチュード 7.2 の地震が発生、淡路島と神戸を中心に震度 6~7 を記録し、死者行方不明者 6427 人、家屋の全半壊 25 万 7890 戸、焼失家屋 7465 棟を出した震災。淡路島から神戸にまたがる地層の活断層が原因とされたが、この地震で、災害とボランティア活動の連動の難しさと重要性が認識された。阪神淡路大震災では、ボランティア活動に従事した人達は延べ約 200 万人以上にのぼった。その結果、この年を遅まきながらも“ボランティア元年”といわしめた」（川村、2006、pp32-33）という。

(3) 特定非営利活動法人チーム御前浜・香櫛園浜里浜づくりの事務局長枝光宏征によると、「海辺と人との多様な付き合い方を大切にし、御前浜・香櫛園浜をかけがえの

ない地域の宝“里浜”として、よりよいかたちで未来に継承することを目的とする。具体的な事業としては、“浜を守る事業”である。たとえば、ゴミのない浜の環境を守る事業である。“浜を使う事業”である。たとえば、遊びを通して学ぶ環境体験学習事業である。“浜を育てる事業”である。たとえば海・川への親水性を高める環境づくりをめざす研究・提言や、行政との協働事業である」という。

(4) ふれあい配食は、この西宮市だけではなく、尼崎市や伊丹市など兵庫県下にみられるものである。

第三章

コミュニティにおける高齢者の居場所

1 問題関心

しばしば高齢者の課題として、高齢者の居場所というものが問題となる。なぜなら、高齢者にとって自分のやすらぎのための空間としての居場所というものがとても大切であるからである。この場合の「空間」とは心理的空間と物理的空間の両方を意味しておきたい。高齢者施設もたしかにひとつの居場所であるが、次の節で明らかにするように、高齢者施設において、高齢者は必ずしも居場所としての施設に満足をしていない側面がある。

高齢者施設に代わって、コミュニティというものが居場所としての機能をもつかもしれない。たとえば丸尾直美・宮垣元・矢口和宏は「ふれあいサロンやコミュニティカフェ、自治体が取り組み始めている総合事業など、社会福祉や保健福祉の現場で進められている地域の高齢者のボランティアへの関わりの促進に加えて、地域における高齢者の就労を支援していくことも、今後の高齢者の地域での役割や生きがい、居場所づくりとして、さらには地域の活性化としても重要ではないだろうか」(丸尾直美・宮垣元・矢口和宏、2016、p109)と指摘している。これも高齢者にとってのコミュニティと居場所を結びつけた視点であろう。

また、鈴木幾多郎は以下のように述べている。すなわち「今後、益々進展する超高齢社会においては、居住地域で過ごす時間が多くなる高齢者にとって地域での人々とのつながりの中で住み慣れた地域・自宅で自立した日常生活を送れることが望ましい。しかし、今日の地域社会では、人間関係がますます薄くなり、高齢者が主体的に行動し他者と繋がらない限り、誰も世話を焼いてくれず、誰もかまってくれない社会になりつつある。このことは、高齢者の孤独、孤立化を招くことになる。それを乗り越えるためには、高

高齢者は地域の人々とのつながりを強め、新しいコミュニティを作らなければならない。地域社会には、町内会・自治会、老人クラブ、婦人会、消防団、商店会、社会福祉協議会、民主・体育・保健・環境の各委員会、NPO、コミュニティ・ビジネス等の多くの組織・団体がある。国・自治体は高齢者に社会の支え手として大きく期待している」（鈴木幾多郎、2017、p146）。鈴木は現在の高齢者の孤独化を問題としてとりあげ、その解決策をコミュニティの諸組織に求めている。

このように高齢者にとってのコミュニティの果たす役割に気づいている研究者が散見される。

本章では、コミュニティのなかでの、高齢者ボランティアの活動を分析することを通じて、なぜ、そしてどのような環境において、高齢者がコミュニティの居場所に満足するのかをあきらかにすることを目的としたい。この分析をつうじて、高齢者施設が与えることができない、コミュニティ固有の高齢者にとっての魅力をさぐることになるろう。

そこで最初に、つぎの2節において、とくに居場所に焦点をあてながら、既存の高齢者施設が、利用者にとってどのような長所や問題点があるかを整理しておきたい。

2 高齢者施設の特徴

高齢者施設の典型としての養護老人ホームは、その源流を明治時代に遡ることができる。かつて「養老院」と呼ばれる施設があった。それは貧困により生活に困窮した高齢者を対象としたものであった（鳥羽美香、2008、pp 137—138）。河合・清水の指摘によると、1929年に救護法が制定され、救護施設の一つとして、はじめて養老院が位置づけられたという。さらに1946年旧生活保護法の制定に伴い、養老院は生活保護法に基づく保護施設と定められ、1950年の生活保護法では名称も「養老施設」に変わった（河合克義・清水正美他、2019、p19）のである。

より詳細には、この施設は、厚生労働省の定義に従うと、介護保険の3種類の施設として、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、介護療養型医療施設に分けられる。そしてそれらは、高齢者向け住まい、施設にはサービス付き高齢者向け住宅、有料老人ホーム、養護老人ホーム、軽費老人ホーム、認知症高齢者グループホームなどに分けられ

る(厚生省社保審一介護給付費分科会の施設・居住系サービスについてのホームページ、pp1-2)。

また、矢部広明・宮島直丈は日本の高齢者施設について「老人福祉法 5 条の 3 項は、老人福祉施設として、老人デイサービスセンター、老人短期入所施設、養護老人ホーム、特別養護老人ホーム、軽費老人ホーム、老人福祉センター、老人介護支援センターの 7 種類を規定している」(矢部広明・宮島直丈、2009、p 187) という。

これら高齢者施設は高齢者の居場所の一つとして、大切な社会役割を果たしてきたと推定される。だが、これらの施設は高齢者にとってどんな居場所であるのだろうか、つぎに高齢者施設の長点と欠点に留意しながら、高齢者の居場所について考えることになるだろう。

2.1 厚生労働省の見解

厚生労働省、社保審一介護給付費分科会の介護老人福祉施設の参考資料によると、介護老人福祉施設の人員・設備基準について、具体的に示している。たとえば、設備基準として居室、医務室、食堂および機能訓練室、浴室、廊下の面積や定員が定められている(『参考資料 2』 p 2)。介護老人福祉施設の居室類型にはユニット型個室、ユニット型準個室、従来型個室、多床室(準ユニットケア加算)、“多床室”に分けられる。

また同上、18 頁の説明においては、例を示しつつ、ユニット型施設においては、ハードウェアとソフトウェアの双方ともに、認知症高齢者ケアにも有効であるような配慮がなされている。「認知症ケアに有効」とは、小規模な居住環境、家庭的な雰囲気、なじみの人間関係、そして在宅に近い居住環境、入居者一人一人の個性や生活のリズムに沿うし、他人との人間関係を築けるからであると述べている。すなわち厚生労働省の見解としては、ケアされる者の必要に応じて対応しており、とりわけ認知症高齢者に配慮しているといえよう。

2.2 専門的なケアとリズムのある生活

高齢者施設においては、家族以外との接触機会が増え、それが刺激になったり、イベントなどで変化・刺激に富んだ生活ができる(有料老人ホーム検索探しくす、ホーム

ページ) というような指摘もある。

また、介護ホームの魅力としてホームページでは、以下のような説明がみられる。それをふたつ引用しよう。

そのうちのひとつでは以下のとおりである。「介護付有料老人ホームは主に民間の事業者によって運営されている介護施設で、食事や清掃、身体介護、リハビリといった通常の介護サービスだけでなく、レクリエーションやサークル活動など幅広いサービスを受けることができる。施設のケアマネジャーが入居者の状態を確認しながら介護計画をたてるため、提供されるサービスはニーズに即したものとなる。(中略) 24 時間体制で介護を受けることができる。レクリエーションや共用施設など、介護以外の面も充実している。重度の要介護状態でも利用できる」⁽¹⁾ (あなぶきの介護、ホームページ)。

ふたつめの魅力の説明はつぎのとおりである。「自立した生活ができない高齢者と常時介護が困難な家族にとって、専門の介護、看護スタッフが配置されており、入居後に専門的なケアを受けられる特別養護老人ホームは非常に魅力的な存在である」(介護アンテナの介護、ホームページ)。このように自立が難しい高齢者(その多くは後期高齢者であろう)への配慮が高齢者施設ではおこなわれていることに注目しておこう。

2.3 経済面の安定感

津軽谷恵は、在宅高齢者と施設入所者を対象として、Visual Analogue Scale を用いて、主観的 QOL の調査をした。その結果、「主観的 QOL の経済状態において、在宅高齢者群よりも施設入所者群の方が有意に高く、経済状態には満足している」と指摘した。そしてその解釈として、「施設入所者は、在宅高齢者に比較して、毎月の支出が安定しており経済状況に関しての満足感が得られていること」であると(津軽谷恵、2003、p52) 指摘した。

横内理乃・新田静江は「老健入所時の家族介護者の精神的健康度を測定した GHQ 精神健康調査票-12 得点の平均は(中略) 精神的健康状態不良を示す 4 点以上が大半であり、入所目的が介護負担の軽減はその他の目的より有意義に高かった」(横内理乃・新田静江、2012、p84) と指摘した。つまり介護施設に入って経済面において節約できて安定していると思われる。

2.4 高齢者施設の課題

すでに高齢者施設においていろいろな問題があることが以下に示すように研究者によって指摘されている。その指摘にしたがうと、それらは大きく次の3点に要約される。その3点とは「施設の量的不足」「施設福祉の質的な未熟さ」「介護福祉士の不足」である。簡単にでも以下にその3点を検討しよう。

2.4.1 高齢者施設の量的不足

川村匡由は「医療の進歩や健康に関する考え方の変化などにより、高齢者の寿命が延び、年齢の上昇とともに、寝たきりや認知症の要介護高齢者は増加する。しかも高齢化率の急速な伸長により、要介護高齢者の絶対数も増えつつある」(川村匡由、2005、p170)と基本的な問題点を指摘したのち、さらに川村は以下のように具体的な問題点を取り上げている。ひとつは家族介護力が低下していること。ふたつめが特別養護老人ホームをつくりつづけても、つねに潜在的なニーズがあり、施設不足がつづいている(川村匡由、同上、p170)。とくに家族介護力の低下の指摘は留意する必要があるだろう。

丁英順は「日本は2015年まで、65歳以上の高齢者人口は総人口の26%を占めており、歴史上で一番最高の数になる。日本内閣府の資料によると、2060年まで日本の65歳以上の高齢者は総人口の40%を占める。75歳以上の後期高齢者は26.9%を占める。介護を受けなければならない高齢者はますます多くなる。しかし、高齢者福祉施設の数がどんどん増えてきて高齢者の需給に追いつかない。特に自分一人では生活できず、他人の助けを必要としている要介護老人や半分要介護老人たちはベッドをなかなか求められない」(丁英順、2016、p63)と指摘した。その他、施設不足の指摘の論文は多い(森川洋2018、小黒一正平方啓介2017、飛田英子2015など)。

2.4.2 施設福祉内容の質的な未熟さ

先ほど引用した川村匡由はさらに施設の質的な未熟さも指摘している。すなわち「入所者はわずかな着替え程度をもって入所してくるなど、入所後の生活においても、サービスや施設のあり方が“生活の場”として、うるおいや安らぎがあるとは言えない例も少

なくない。入浴回数や食事時間帯などが、一般社会の生活と比較して不自由な部分もまだ存在する。また、施設立地や運営姿勢が、高齢者を社会から隔離して地域や他世代の人達と交流を持ちにくくしている例が現状ではまだ多くみられるのである」(川村匡由、2005、p172) という。

楠永敏恵・山崎喜比古は生活変化における高齢者の経験を把握するために、1990年代に設立された3施設を研究対象としてインタビューした。「職員との関係における不満をたずねると、31人中18人が不満を表明した。職員の不親切な態度、不機嫌な態度、職員の配慮に欠ける行為、介助が自分のペースに合わない」(楠永敏恵・山崎喜比古、2003、p86) とその結果を指摘した。またサービスと設備に対する不満として「21人が食事の内容などが嗜好に合わないことがあるし、10人がレクリエーションの内容が希望に合わないことがある」と(楠永敏恵・山崎喜比古、同上、p87) 回答したという。

2.4.3 介護福祉士の不足

丁英順は「介護福祉士が足りないのは日本の介護サービスにおいては大きな問題である。介護福祉士は仕事が大変で、収入は少なく、多くの人は高齢者施設で就職するのをしたくない。また、高齢者施設で働いても離職率も高い。介護福祉士が足りないので、高齢者施設が空いても、入れない高齢者もいっぱいいる。日本の厚生労働省の予測では、2025年に日本は253万の介護福祉士が必要である。しかし、現在の介護福祉士の増加の傾向を見ると、その時介護福祉士が38万も足りない」(丁英順、同上、p63) と述べた。

新井康友・原田由美子も類似の指摘をしている。すなわち「介護保険制度実施後、介護保険事業所の急増、社会的な景気低迷による求職者の増加等により、介護職員は目に見えて増加している。しかし、ながら“夜間等が多く仕事がきつい”、“仕事の割に給与が低い”等の世評が定着し、離職率が高く、人材の入れ替わりが激しく、特に都市部においては慢性的な人手不足状態という現実もある」(新井康友・原田由美子、2015、p44) という。

伊藤真理子は「日本の人口は2006年を境として減少しており、2050年の人口は約1億人になると推定されている。そのため、人口が減少していく医療や分野において外国人看護師および介護福祉士を受け入れることについて介護現場で問題になってくる」(伊

藤真理子、2014、p 100) という。すなわち、ここで引用したすべての論文は施設における専門職員の不足を指摘している。

3 高齢者施設の活動内容と高齢者の居場所

3.1 高齢者の活動内容

3.1.1 ルールが優先され自己決定が期待されない

多くの研究者たちが高齢者施設の活動内容と施設内の状況について論じている。例えば、羽田圭子は「一般的に、高齢者が施設に移り住む理由としては、自宅の手入れ、掃除、食事の支度等が負担になること、日常的に介助や介護が必要になること、緊急時の対応に不安があることなどが挙げられる。施設においては、安全性や生活の利便性は高まるが、共同生活のため施設のルールに従うことが求められ、生活における自己決定の範囲、すなわち自律性は低くなるであろう」（羽田圭子、2017、p 2）と指摘している。それはすなわち、多くの高齢者施設に入る高齢者たちが自分の生活は自分で管理できなくて、高齢者施設の生活スケジュールに頼って生活するということである。

そこで、老人ホームと介護施設での一般的な1日の流れを見ると、以下の流れである。

表 老人ホームと介護施設での一般的な1日の流れ

7:00	起床・身支度・整容（モーニングケア）
8:00	朝食・服薬・口腔ケア
9:00	体操（主に平日）
9:30	入浴
12:00	昼食
13:00	レクリエーション
15:00	おやつ
18:00	夕食
21:00	就寝（ナイトケア）

注：“みんなの介護”のホームページをもとに筆者が作成

（入居者はこの時間に沿って、機械的に対応していかなければならない。）

またいま引用した羽田圭子と類似の指摘として、鄭春姫はつぎのようにいう。「施設入所高齢者の生活を考えると、一日同じフロアでの生活をするようになり、できるのにさせてもらえない、身の回りのことは何もやることはない等による能動性の低下がみられる。また視野の能動性と考えるならば、興味を持って見るのではなく、“目に入ってくる”場面が多いと考えられる。施設入所高齢者はほぼ一日中同じフロアにいと視覚まで受け身となり、同じ物・ことだけ見えるため、無味乾燥な日常になりがちであると考えられる」（鄭春姫、2016、p26）。

このようなマイナス面がみられるために、施設を住む高齢者に対して「何らかの目的を持った外出でなくても、自分が住んでいる施設はこのような地域にある、このような変化があるなど、愛着が生まれ、地域を理解しようとする行為自体が交流にも繋がる」（同上、p27）という外出の呼びかけをしている。

3.1.2 孤独・孤立化

また鈴木政史は「社会福祉施設が地域社会から孤立した状態にあり、社会福祉施設に関わる人が、高齢者、児童、“しょうがい”を持つ人とその家族、職員・ボランティアなど、一部の関係者だけで構成され、地域社会から隔離されている状態はノーマルではなく、今後の社会福祉施設における地域社会との関わりは地域住民を含めた多様な人と共に活動・生活するという視点が不可欠である」（鈴木政史、2009、p32）と指摘している。鈴木はこの論文では、社会福祉施設は地域との交流が少ないという表現をしているが、本論文ではこれを高齢者施設として解釈をしておきたい。

藤原武弘、来嶋和美は老人ホームの孤独感の高さ、という注目すべき指摘をしている。すなわち「老人ホームの老人と独居老人の孤独感の高さを比較すると、前者のほうが孤独感が高いことが明らかになった。（中略）社会的ネットワークの違いが考えられる。とりわけ社会的サポーターの有無とその量を両者で比較すると、老人ホームの老人の場合は（その有無を調べた結果）社会的サポーター有りの比率が低いこと、またサポーターの数も少ないことが明らかとなった」（藤原武弘、来嶋和美、1989、p63）という。

また「ホーム老人の社会的サポーターの内容を見てみると、48.6%が子どもで、36%

が自分の親戚（多くは 60 歳代 70 歳代）であった。すなわち社会的サポーターの 84.6% が血縁関係であった、(中略) 独居老人にくらべて老人ホームの老人の場合、社会的サポーターと“直接会う”機会が少ないことが見出された」(同上、p63) という。

木村勇介・深谷安子という。「施設においては、集団生活の秩序や職員による生活支援の効率性などの点から多くの生活の規制が存在する。これらに対して高齢者は我慢を余儀なくされていることが伺われる」(木村勇介・深谷安子、2008、p55)。さらに清水祐子・佐藤みつ子他は「入所群では、人との関わりが多く、主観的健康観が高いにも関わらず、抑うつ状態の高齢者が多かった」(清水祐子・佐藤みつ子他、1999、p26) と述べている。

3.2 居場所としての高齢者施設の長所

3.2.1 介護のプロの存在

高齢者施設に勤めている従業員は入居している高齢者と直接関わるのであるから、厚生労働省は介護従事者に対して専門的な知識および技術を学ばせるようにしている。具体的には介護福祉士と社会福祉士になるためには国家試験を受けなければならない。この制度は老人福祉施設の質的な人材確保のために貢献しているといえる。

吉岡なみ子は「1987 年の社会福祉士および介護福祉士法の制定は、介護職員の専門性の確立や、これに対する社会的評価を高める契機になった」(吉岡なみ子、2011、p106) と指摘した。また、彼女は首都圏にある A 市の介護老人福祉施設 B 園での 19 人の介護職員に対して調査をした。この B 園での介護職員のレベルはその調査から推察できる。すなわち、調査対象者の 19 名のうち、「介護職としての職歴の平均は 5.2 年で、正規採用職員の平均年齢は 27.5 歳、パートタイム職員の平均年齢は 47.5 歳であった。15 名が介護福祉士であり、2 名がホームヘルパー 2 級資格者で残りの 2 名は無資格者であった」(吉岡なみ子、2011、p111)。すなわち、資格のある介護職員がとても多いことがこれで分かる。

3.2.2 居場所感・安心感

中村美智代の実態把握調査では、「総得点・カテゴリー別得点・高低群で比較して分析

したところ、少数データではあるものの、入所施設利用者の“居場所感”は、概ね物理的居場所感が高く、役割的居場所感の低い傾向にあることが分かった。自由開放的居場所の 카테고리では、施設生活の中で自由度を感じながらも、嗜好にあった、継続した活動ができていないことがうかがわれた。主体的居場所の 카테고리では、日々の暮らしは自分が決めていると認識しているが、“これから先のことまで分からない”、“考えが及ばないから”といった傾向がみられた。(中略) 全高得点タイプは、自らの趣味や活動などを楽しんでいる人が多く、自らの活動を肯定的に受け止めていることが分かった」(中村美智代、2018、p23) という。

伊藤智子・加藤真紀他は対象高齢者社会関連性に関する特養入居前後の変化結果を基に事例検討を行っている。すなわち事例1については、「ゆくゆくは現在の特養入居を考えており、納得して入ったことで生活に対する意欲を落とすことなく“生活の主体性”が維持できていると考えられた。家族との頻回な面会や外泊時の近所の人との会話が今までの社会とのつながり感を保ち、本人の心の安定につながっていると思われた。社会への関心、他者との関わりは特養生活5年の中で徐々に薄くなっていると考えられるが、特養生活の中での役割を本人の意向を聞いたり、本人の入居前の趣味を生かしたものとすることで維持できると考えられた」(伊藤智子・加藤真紀他、2007、p52) また事例2について「“身近な社会参加”や“他者との関わり”は入居前後で低下しているが、入所者同士の交流によって維持が可能と考える。入居してから“気持ちが楽になった”という気持ちの変化は、忙しい息子夫婦にお世話をしてもらわなければならない負い目から解放されたことが関係していると考えられた」(同上、p52)。

3.2.3 日本介護についての中国の研究者の指摘

じつはこの日本の介護については中国での関心も高く、そのためにいくつかの中国語による日本福祉研究がある。それを以下に紹介しておこう。

文婧は日本の介護人材システムが完璧な域に達していると指摘している(文婧、2020、p88)。その理由は人材システムが介護対象によって具体的に分類されているからだという。その分類とは、「すなわち、社会福祉士、介護支援専門員、医療関係社会工作者、介護福祉士、訪問介護員のことである。ところで、このうち前者の三つは主に養老介護の

仕事の問い合わせ、評価、そして管理などの仕事である。そして、介護福祉士と訪問介護員は高齢者の介護の仕事のことである」(文婧、同上、p88)。そしてさらに「介護福祉士と訪問介護員はまず国の資格試験に合格しなければならない。介護人材の教育体系を通して日本は専門的でいろんなレベルの人材を育てた」(文婧、同上、p88)と指摘している。

さらに陸継鋒・陳偲は日本の高齢者施設について以下のようにまとめている。まず、プロフェッショナルな介護についてのことである。すなわち「日本の高齢者施設で仕事をしている人は介護保険管理師、介護士、普通のスタッフに分けられる。介護保険管理師と介護士は福祉、医療と保健などの知識を背景として、職業道德の知識を受け、専門的な理論学習、そして専門的な実践訓練を受けなければならない。学習と訓練を受けてから介護関係の仕事に取り掛かることができる」(陸継鋒・陳偲、2018、p1)。

また、「人間的なサービスがある。日本の高齢者施設は都市から遠くにあるので静かである。そして交通も便利だし、病院から近い。施設の中にはエレベーター、テーブル、浴室、ベッド、使ったお皿など、全部で高齢者の好みに合わせて設置している。どこでも高齢者の感想と需要を考えながら人間的なサービスを提供している。

たとえば、食事の手配の組み合わせについて、ちゃんと各高齢者の細かい注意事項まで詳しく書いている。サービスをする介護士は丁寧な言葉遣いを使って、笑いながらサービスをする。もし入居した高齢者は突然なくなってしまったら、高齢者施設で働いたスタッフはそのなくなった高齢者のご家族のご要求に応じて、特別な葬式を行って、親戚を迎えて遺体の最後の告別式を行う。日本の高齢者施設に対する評価は高齢者の利用感想と満足度を重要な根拠として、評価する」(陸継鋒・陳偲、同上、p2)と指摘している。

馬天月は「日本の高齢者施設においては要介護高齢者のためにリハビリ師、介護福祉士、薬剤師、栄養士、管理員、事務員からなるサービスチームをアレンジし、各クラス、それぞれのリハビリサービスを提供する。介護士は定期的に入居の高齢者のために健康診査を行ったり、高齢者の飲食と体の体調、そして病状の進展などを注目して、詳しいメモを取る。体操と手芸、そして遊芸などを通して体と心の健康を保つ」(馬天月、2018、P2)と指摘した。さらに彼は「日本は介護サービスをとても重視している。少なくとも

130 時間の理論的な知識と実践訓練の授業を受けなければならない。また、介護の仕事関係の基礎知識、コミュニケーションの技、そして介護の仕方等を受けなければならない」(馬天月、同上、p2)と紹介している。

これらは高齢者介護施設の長所である。すなわち、それぞれの分野に分かれる専門性の保証、また高度に組織化されていること、気持ちとしての人間性が配慮されていることなどである。とくに中国人の研究者は日本の高齢者施設をとてよりよいように見なしているようである。中国との比較からそうなるのであろうか。

3.3 居場所としての高齢者施設の問題点

3.3.1 介護職員からの虐待

永松美菜子・村山浩一郎は「介護職員による高齢者虐待は未だ後を絶たず、“平成 25 年度高齢者虐待防止法に基づく対応状況等に関する調査”(厚生労働省)によれば、虐待が認められた施設・事業所種別では、特別養護老人ホーム(介護老人福祉施設)がもっとも多い」(永松美菜子・村山浩一郎、2016、p24)と指摘した。

大橋美幸は高齢者施設で高齢者虐待に関する調査をして、「現在グループホーム等で勤務している人が仕事に、虐待や不適切なケアと思われる行為をされている利用者を目撃したことがある 39 人(45.3%)。半数弱が虐待や不適切なケアと思われる行為をされている利用者を目撃したことがある」(大橋美幸、2012、p85)という事実を指摘した。

原田聖子は「高齢者虐待防止法に基づく養介護施設従事者等による虐待と判断された件数は、平成 18 年度の 54 から平成 25 年度は 155 件にまで増加しているが、福祉現場の実情を知るものであれば、この件数は氷山の一角を示しているに過ぎないのではなかろうかという疑念を抱くだろう」と(原田聖子、2014、p75)と鋭く指摘した。

3.3.2 孤立感

中村美智代は以下に示すように、孤立感の指摘をしているが、これは本稿の課題である居場所の問題と直接関わってくるものである。

中村はいう。「住居を変えることに伴う過度の負担は、高齢者の心身に悪影響を及ぼすリロケーションダメージとなる。このダメージは、高齢者に心理的な混乱を生じさせ認

知症等を急速に進行させる恐れが高く、高齢者の意欲を低下させる。本来、安心して暮らせるはずの施設での生活が急速に高齢者に生活不活発病をもたらすのである。この生活不活発病に陥った高齢者は、他者との関係を喪失してしまう。これにより、施設での生活や地域、社会においても“居場所がない”と感じるようになる。その結果、孤立感が増加する状況に陥ってしまうため、居場所の獲得が重要だといえる」(中村美智代、2017、pp17-18)と指摘した。

また同様に、中村美智代・大橋徹也・松山光生は「内閣府(2011)“高齢者の居場所と出番に関する事例調査結果”において、高齢者が自ら進んで出かけられる“居場所”の創造や、高齢者の“居場所と出番”を持った“社会的な活動”への参加促進による孤立防止が必要であることを指摘している」(中村美智代・大橋徹也・松山光生、2019、p36)という。

外山義は「あたかもお互いが存在しないかのように、同じ空間の中で没交渉に暮らす。それはまるで、現実の四人部屋・六人部屋の生活の中では、他者と一緒にいることの“負の教育”がされているのと同じである。すなわち一緒にいることは楽しいことではなく、トラブルも起こるし、ストレスも生じてしまうということを、意識下で日々刷り込まれているようなものだ」と(外山義、2011、p55) 高齢者施設での問題を追究した。すなわち「そういう生活の中では、人と共にいることが楽しいことだという原則自体が否定されているに等しい」と(外山義、同上、p55)ととても大切なことを指摘している。

4 コミュニティにおける高齢者の居場所の事例

筆者自身の聞き取り調査に加えて、すでに存在する類似の事例を論文等から拾い出し、ここにコミュニティにおける高齢者の居場所の事例を紹介する。その後、次節でこの事例を中心に、分析をおこなう。

4.1 交流を通じて絆を形成し、居場所をつくる

以下は静岡県掛川市の運転ボランティアの例である。この地区ではマイカー時代が到来して、路線バスが廃止された。それに代わって、とくに必要とされる病院への通院に対して、ボランティアが行う“通院車”が登場することになる。

そこで、“通院車運営委員会”が成立される。運営委員会の山本会長は、「生きがいとは人との触れ合いの中の感動によって生まれるもの。運転ボランティアは人生における感動以外の何物でもない」との思いを伝えている」（横橋孝保、2010、p15）。そして病院からの伝言を家族へ伝えるなど、まさに地域全体で高齢者を見守っている。

運転ボランティアの人が言うには「“友愛はらだ号”は単に高齢者を病院へ運ぶだけではなく、地域の人々の交流の場にもなっている。車内では野菜づくりの話やお孫さんの話などいろいろな話題が飛びあい、その安堵感から少しの間でも身体の痛みを忘れるほど会話が弾む。（中略）通院車運営委員会の初代会長の熱い思いと、長く閉塞感が続く現代社会、こんな時代だからこそ人と人との触れ合いを大切にしなければ、地域の繋がりを育てていきたい」（同上、p16）という。つまり“友愛はらだ号”はいわば動く交流の場となっているのである。

つぎは“ふれあい朝市”の例である。北九州市八幡西区の茶屋の原団地でも高齢化が進んでいる。そこでは、毎週の火曜に“ふれあい朝市”を開催している。「自治区会の高齢化対策委員会が中心となって、経費をなくすために商品の陳列台やのぼり設営から片付け、清掃、広報活動に至るまで、すべて自分たちの手で行うことにした」という。そして朝市が行われる火曜の早朝には、地元老人会の水田正男会長（82）が宣伝カーで団地を回って朝市をPRしている。渡辺正博氏（76）は定年後、減反地を利用して野菜づくりを始め、キュウリやピーマン、オクラをさばいていた。彼が言うには、「定年して暇だから、健康のために野菜を作って自分で食べていたんだけど、余ったものをみんなにも格安で分けたいと思った」（中河原文、2010、pp14-16）という。

「野菜をつくって儲かるということはないけれど、お客さんと顔なじみになってここで話すのが楽しいね」（同上、p16）。「“みんな気心が知れとるけんね”40年前にできた新興住宅地ゆえに、自分たち自身で繋がり、耕さなければ地域コミュニティの土壤が潤うことはなかった。だからこそ住民が結束し、掘り所を作り上げようという共通の思いが、住民が住民を支え珍しい形の朝市を成功させている」（同上、p16）というように、顔なじみ、楽しさ、掘り所をつくる、というようなことがキーワードになっている。

「横浜市戸塚区の俣野町と深谷町に広がる大規模中高層団地“ドリームハイツ”では、地域住民によって組織された“特定非営利活動（NPO）法人いこいの家夢みん（むーみ

ん) ”が高齢者などを対象に交流活動を行っている。住民の高齢化が進む中で、日中ひとりで淋しい、誰かとおしゃべりしたいという声が聞かれるようになった。そこで地域住民が利用者やボランティアとして関わり集える高齢者のための居場所として交流サロンをつくることになった」(清水英孝、2014、p11) “夢みん”には専従職員がいなくて、すべての活動はボランティアの手によって運営されているという。「さまざまな活動が行われ、世代を越えた交流が生まれる複合拠点ができないか、“夢みん”がその一つの核になればと思っている」(同上、2014、p13) という。

滋賀県の草津市の事例である。「JR 草津駅から徒歩数分。毎週火曜日、午前 10 時半くらいから、就園前の子どもを連れのお母さんたちが、草津まちづくりセンターの 2 階に集まってくる。このビルの託児室で子育て支援サポート広場“ふあふあ”が開催されているのだ。この“ふあふあ”を主催するのは、特定非営利活動法人ニッポン・アクティブ・クラブ (NALC) (以下ナルク) びわこ湖南。ナルクは 3 万人の会員を擁する全国組織で平均年齢は 67 歳、男性が 41% を占める。NPO としては男性の割合が多い。ナルクの大きな特徴として、時間預託システムがある。会員になると自分の住む地域のナルクに登録し、ナルクからの指示があったボランティア活動に参加する」(幡郁枝、2010、p17)。

「会場では、小さな子どもたちが、ナルクびわこ湖南の事務局長、渡辺日夫さん (69 歳) にだっこされても嫌がらない。むしろ“高い高い”をしてもらって大喜びで“もっと”ときりがない。全力で遊んでくれる渡辺さんたち男性スタッフはクリスマスにもサンタクロースの扮装をするなど人気者だ。“最初はお母さんにしがみついて離れなかった子が何度も来るうちに他の子どもと遊ぶようになっていく姿を見ると、ここで社会性を身につけているを実感しますね”と渡辺さんも大西さんも目を細める。(中略) 渡辺さんは“男性では私とナルクびわこ湖南代表、中田匡美さんがほぼ皆勤。この子育て支援広場は元気の素なんですよ。子どもたちから元気をもらえます。それによく笑うようになりました。地域の孫育てに貢献しているという喜びが生き甲斐となっています”と言う」(同上、pp18-19)。これは高齢者の生きがいの典型といえるかもしれない。

珍しく男性だけの活動もある。“じゃおクラブ”は神奈川県全域に会員をもつシニア男性の地域集団である。「現在は、就労現役・定年退職 OB ら 170 余名の男性会員が、新横浜を中核拠点にして、湘南 (藤沢・平塚など)、県央 (海老名・相撲原など)、横浜北部・

川崎北部、横浜南部・川崎南部と4地区に分かれ、福祉施設との交流、森林ボランティア、市民的農業といった地域活動に取り組むとともに、それぞれに男性会員同士の交友を楽しんでいる。この“じゃおクラブ”での活動を契機にして、私は他の相当数の市民活動団体とも次々と交流し、地域社会に関しての情報・意見を交換する機会を得た」(守永英輔、同上、2006、p32)。

これは日本全国の日立つ活動をピックアップした側面があり、すべての高齢者ボランティアがこのようにうまくいっているとは言えないかもしれないが、ともあれ、交流を通じて、生きがいを見つけ、それが相互の絆となって、その活動の場が居場所となっていることを指摘できよう。

4.2 社会貢献

上の絆の形成の事例の多くはまた社会貢献の事例であるが、ここでは社会貢献をすることによる自分自身の喜びや満足感が表れている事例を集めた。

次の事例は筆者が兵庫県西宮市の松下町をインタビューした事例である。松下町夙川公園を美しく保つとともに、清掃作業を通じて互いの親睦・交流を図ることを目的に、自治会会員有志で毎月第2土曜日9時～9時40分公園清掃を行なっている。参加者はだいたい20～25名である。Dさんが言ったのはボランティアがだいたい65歳以上の高齢者である。ときどき近くの保護者が子どもを連れていく場合もある。毎回清掃する時、タバコとか、ペットボトルとか、空き缶とか、特にタバコが多い。

Dさんに、この清掃作業がなぜやるのかと聞いたら、「清掃したら、きれいになって、嬉しい」からと答えてくださった。もう一人の84歳ごろのKさんがときどき清掃に参加する。同じ質問をしてみると、Kさんが答えたのは「家では一人で、ときどきそれをやって、体にもいいし、公園がきれいになって自分も嬉しい」と答えてくれた。ここでいう嬉しいは、清掃という社会貢献に役立って嬉しいという意味である。



図 1 清掃作業のボランティア活動に参加している D さん

筆者作成 2019 年 12 月 8 日



図 2 清掃作業のボランティア活動に参加している K さん

筆者作成 2019 年 12 月 8 日

次の事例も筆者がインタビューした西宮市の NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜里浜づくりの F さん⁽²⁾、M さん、L さんである。

F さんは「NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」のリーダーである。78 歳である。もともとはワイヤーの工場では工場長として働いた。若い時は、趣味はなく、家族も考えないで、仕事だけに夢中になっていた。

NPO 法人 チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくりというグループは会員が 30 名いる。今年で活動は 8 年目になる。1 人の高齢者ボランティアが 35 人の小学生を引率する。小学生に環境学習を教えるのである。ときどき外出したときに、突然どこかで小学生から声をかけられてすごく嬉しい感じがするという。



図3 出前講座 出前講座でのMさんのボランティアによる説明

2019年11月29日 筆者撮影



図4 出前講座でのFさんのボランティアによる説明

2019年11月29日 筆者撮影

Fさんがいうには、いまから2年前の秋ごろ、コンビニに入っていると、男の人が私（Fさん）を見て「アッ！里浜のFさんだ」と声をあげた。声の方を見ると、小学3年生

くらいの男の子が2人いてニッコリ笑っていた。

覚えていてくれたとうれしかった。夙川公園を昨年の春に自転車で走っていると、“里浜の人だ”と数人の小学生が遊んでいてこちらを見てニコニコ手を振ってくれた。よく覚えてくれているなと思ったという。

以上のFさんの言葉から、わたしはFさんがボランティアをやることを通して、多く

の人に覚えられることが、何より嬉しいことであるのが分かった。小学校の担任の先生が児童に説明をしているのを聞いて、「浜のことが良くわかりました。ありがとうございます」と御礼を聞くと役に立っているのだなを思う。現地授業に参加したお母さんが、「近くに住んでいるのに浜を良く知らなかった今日は大変勉強になりました、子どもと共通の話題が出来て良かったわ」といってもらえた。1学期の浜の生き物の観察で、「初めてカニを捕まえた」と大興奮した児童を見ると良い思い出を作ってあげられたと喜びを感じる。

また、実物のクラゲを見たことがない子どもが多いので、打ち上げられたミズクラゲを触って大騒ぎしているのを見るとこのボランティア活動をやったとFさんは言っていた。

ここで筆者としてまとめてみると、地元の人、小学校の先生、そして小学生達に浜の環境学習内容を教えて彼らに身近な環境をもっと了解させたり、地元の環境保護を考える意識を育てるし、ここでボランティアという役をやって社会に役にたつ満足感を感じているようだ。

Mさんはつぎのように言う。仕事をしていた時に使っていたノウハウは仕事を辞めるとほとんど使わなくなるのでなんだか寂しい。しかし、ボランティアで活動していると、パソコンでエクセルを使って資料作りができたり写真の編集をしたりができていたので良かったと思う。若い時からずっと身につけたパソコンの技を、定年してもボランティアをしてまだ使えるなんてまた社会に貢献できる満足感もある。そのようにMさんは考えているようだ。

またFさんが言うには、ボランティアが今までの会社の仕事と違う。会社では目標に達するために、常に頑張らなければならない。しかし、ボランティアは気楽さがあり、やったら成果が出たり、もし何か足りない所があっても「ごめん」と言ってもいいのである。ここで仲間達と一緒に会うことができ、日曜ごとに浜の清掃、除草などを行っているが、昼にはワンコインで皆で飲みながらワイワイガヤガヤこの仲間はいろいろな経歴のある人達で話が面白い。そしてボランティアをやってもう一つの楽しさというと、「昼間でもお酒が飲める」ということである。もし家で昼間でお酒を飲んだら、女房からいろいろ言われる。しかし浜の掃除等をして仕事をしてから仲間達とお酒を飲むと、別

に注意もされない。また、もしボランティアをしないと、しゃべる所はない。みんなで飲んでわいわい政治や日常などのいろんな話ができる。ボランティアの仲間の間では利害関係を考えないで気楽に話せる。もしボランティアをしないと、ただ夫婦の間での話だったら、テーマは少ないし面白くない毎日を送る。仲間達と話をして意見の違いが少ないし、揉めることは少ない。

LさんはFさんの紹介で「NPO 法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくり」ボランティアグループに入った。彼が「ボランティアをやって達成感がある。仕事をやめて家にいる時間が長くなる。顔を合わせる人、挨拶ができる人、同じ近所に住んでいても、関係する人は少なくなる。顔なじみの手段としてボランティアをやることである」と言っていた。

Vさんは友人に勧められて、日本シルバーボランティアズ (JSV) に入会する。JSVは農業、工業、教育等、さまざまな専門家をアジア地域へ派遣しており、Vさんは中国山東省済南市石門村に出向く。果樹の生産に協力し、石門村は、一大果樹産地として発展した。「自分としては当たり前のことをしただけだと思っていますが、日本の最高の技術を中国に教えることができたという満足感があります」(NEC ユーザー会ホームページ)とVさんは受賞の感想を述べている。これは自分の技術を外国で生かして、現地に喜ばれた満足感の例である。



図5 中国南通海門徳勝鎮での農民向けの講座

海門市農業科学研究所撮影 2010年6月8日



図 6 Vさんによる中国南通市通州農家でサクランボの接ぎ木の技術の指導

筆者通訳の役をするとともに、撮影 2017年3月8日

次は筆者の調査ではなくて、文献のデータに依拠している。

広島県呉市のふれあい広場のある三条地区は、近年、前者では高齢化、人口減が進み、商店街の空き店舗化が進んできたが、同時にマンションが建てられ、人口の流入も見られる地域である。「ふれあい広場は平成24年9月にオープンした。開設場所は商店街の空き店舗（約11坪）を活用した。活動のそもそもの発端は2人の女性の思いであった。二人とも地区での活動を行ってきており、三条地区のまちと、人の移り変わりを目のあたりにしてきた人達である。Bさんは、男性一人暮らし高齢者の行き場がないことを見かねて、個人で高齢者サロンを運営していた」（大藤文夫、2016、p54）という。

「運営は上記の2人を含めて、ボランティア計18人（女性12人、男性6人）で、1日を3人で分担している。ボランティアは利用者の見守り、お茶の接待をし、話相手になっている。教室には、らくらく体操、うたごえ広場、手芸がある。これらの活動の評価については“大人と子どもの自然な交流が生まれている”、“ボランティアは活動に非常に喜びを感じている。ボランティア自身の介護予防になっている”、“高齢利用者も子どもも“あってよかった”とっている”」（同上、p56）という。これらの事例には社会貢献をする喜びがでていように思う。

4.3 新しい自分の発見・自己実現

Uさんは38年間の教職生活を終えた。“退職後は好きなことをしてのんびり過ごそ

う”と考えていたが、健康生きがいがづくりの資格を取得して自身の生きがいがづくりに役立っている、という記事を見つけて活動をはじめた。そして「中高年の健康と生きがいがづくりを目的に“らくらく体操教室”を平成14年に開講。以来、講話の依頼をされるようになり、また福祉施設などでも講話に加えて以前から得意としている手品を披露するボランティア活動をするようになり、アドバイザーになってから1年足らずで社会活動に参加でき、人に喜んでいただくことを自分の喜びを実感する」(奥村司、2014、pp14-18)。これはひとつ前の社会貢献の喜びの事例ともなる。

彼はいう。「皆さんが喜んでくださる顔を見ると生きがいを感じます。自己満足ですが、こういう自己満足なら最高だと思うのです。年を重ねると体力は劣ってきますが、心は劣りません。でも心をさびさせないようにいろいろな人と話したり知識を得たりして磨く努力が大切だと思います。そして自分の居場所をつくり、自己挑戦、自己発信、自己実現をしていく。私の居場所は体操教室でつくることができました」(同上、pp18-19)。

Uさんは退職後のあたらしいボランティア活動をつうじて、新しい自己実現をすることができた。

Pさんが58歳の時健康生きがいがづくりアドバイザーの資格を取得する。愛媛県長寿社会振興協会が高齢者の仲間づくりの活動をするボランティアを募集していたので、メンバー7人の中に入って3年間活動をする。そしてつぎのような感想を述べている。「いつもたくさんの人が来てくれ、人に喜んでもらえる楽しさを実感しました。そして他人を楽しませることで自分が満足し、仲間ができてそのつながりがどんどん広がっていくことのすばらしさを知りました」(沖中正明、2014、p29)さらにつぎのようにいう。「アドバイザーの活動を通して人に喜んでもらう楽しさを知ってからは、生き方が変わりました。目標が多くなって行動的になり。性格も社交的になりました。定年後にマジック、腹話術、詩吟、ソーシャルワーカーとしての電話相談、講演、執筆活動などをはじめました。それぞれと一緒にやる仲間がいるので、年齢もバックボーンも違う仲間が増えました。マジックと腹話術はゲストの前でやろうと思って、はじめたのですが、今は福祉施設、敬老会、子ども会など、時には大きな舞台でも披露している。自分でもこんなことをやるようになるとは思いませんでした。サラリーマンの時代の私を知っている人が見たら、びっくりすると思います」(同上、p30)。大変身をとげたのである。

5 コミュニティにとって高齢者の居場所の意味

高齢者の居場所というとき、前の節が教えてくれるところから、次の3つの要因が作動したときに、本人たちにとってそこが居場所と感じられるようになるといえる。その3つとは「絆」「社会貢献」「新しい自分の発見」である。そのため、高齢者施設との比較を視野に入れながら、コミュニティにおけるこれら3つの要因を分析することにする。

5.1 人間関係としての絆

前節の事例から推察すると、絆はつぎの3点の特徴をもっているように推察される。ひとつが、「ふれあい関係」である。コミュニティにおける絆というものは人との接触、触れ合いを通じて深くなる。たとえば、4節の中で、ある人が「運転ボランティアによれば“友愛はらだ号”は単に高齢者を病院へ運ぶだけではなく、地域の人々の交流の場にもなっている。車内では野菜づくりの話や孫の話などいろいろな話題が飛びかい、その安堵感から少しの間でも身体の痛みを忘れるほど会話が弾む」といていた。つまり、運転ボランティアというのはただ運転手をするだけではなくて、付き合っているうちに高齢者ボランティアは家族みたいな存在になる。付き合っているうちに、いろいろな話題が出てきて、繋がりが深くなった。コミュニティは高齢者ボランティアにとって人と人の触れ合いを育てるところになる。

しかし、高齢者施設では第3節で示したように、そこで働いた人が老人ホームの決まったルールに応じて仕事をするから、ふれあい関係は、仕事の順序に応じてサービスをするから、人間的な深さに欠ける場合がすくなくない。それは余裕と時間に恵まれていないことにもよるようだ。

二つめが「家族みたいな世代間交流」が成立するということである。前の運転手も家族のようだ、と言っていたが、その家族が親子や祖父母と孫というような世代間の交流による絆である。たとえば4節の中で「子どもたちから元気をもらえます。それによく笑うようになりました。地域の孫育てに貢献しているという喜びが生き甲斐となっています」と言っていた。また「男の人が私を見て“あ！里浜のFさんだと声をあげた。声

の方を見ると、小学3年生くらいの男の子が2人いてニッコリ笑っていた。覚えていてくれたとうれしかった。夙川公園を昨年の春に自転車で走っていると、“里浜の人だ”と数人の小学生が遊んでいてこちらを見てニコニコ手を振ってくれた」というような例もある。

コミュニティでボランティアとして子どもの子育てに力を入れて、自分が幸せを感じながら笑う場合が多くなる。子や孫たちの世代との間の世代間交流によって高齢者ボランティア自身は喜びをもらいながら元気になっているし、高齢者ボランティアと下の世代との世代間交流が絆を生じさせている。

しかし、高齢者施設では第3節で示したように、もともと「一般的に施設に住む高齢者達は自宅の手入れ、掃除、食事の支度が負担になる高齢者達である」。そのため、高齢者施設を選ぶこと自体、自律性の低い高齢者となり、積極的な世帯間交流がむずかしく、主に受け身としての交流となりがちである。

三つめが「まちづくり活動を背景とした」絆である。まちづくり活動においては、行政が音頭とっているし、この地域では阪神淡路大震災を経験したので、住民が自らたちあげたまちづくり活動もある。このまちづくり活動が高齢者ボランティアの絆を強める組織的機能をはたしている。

たとえば、4節の中で、「三世代交流を基本として町内花壇づくりや東の辻水源の水質浄化活動などを通して地域のつながり、協力体制を深めている。現在、少子高齢化社会が急激に進み、町内の連携が一層必要である。東日本大震災の教訓から、現在は“絆”が見直され、街づくりに大きく生かされている」というまちづくりと絆との関係の直接的な表現ある。

また、まちづくりの他の例として「神奈川県全域に会員をもつシニア男性の地域集団“じゃおクラブ”の一員として、10年以上にわたる期間、地域のさまざまな活動に参加し、新しく地域にできた友人たちとの交流を経験してきた」（守永英輔、2006、p32）「現在は、就労現役・定年退職OBら170余名の男性会員が、新横浜を中核拠点にして、湘南（藤沢・平塚など）、県央（海老名・相撲原など）、横浜北部・川崎北部、横浜南部・川崎南部と4地区に分かれ、福祉施設との交流、森林ボランティア、市民的農業といった地域活動に取り組むとともに、それぞれに男性会員同士の交友を楽しんでいる。この“じ

ゃおクラブ”での活動を契機にして、私は他の相当数の市民活動団体とも次々と交流し、地域社会に関しての情報・意見を交換する機会を得た」（同上、2006、p32）。というのも、まちづくりを通じて人間同士の絆を強めているものである。

他方、高齢者施設では第3節で示したように社会福祉施設が地域社会から孤立した状態にあり、地域の人との交流は少しはあるが、距離感があり、絆を形成する機会に恵まれていない。

5.2 社会貢献による充実感

社会貢献の特徴としては、3つが考えられる。1つは「自分が行って嬉しい」ということである。ここでいう社会貢献は具体的には地域社会への奉仕を意味する。そしてそれは自分が満足感を感じることによる喜びがともなっている。

ところで高齢者ボランティアの人たちは、自分がやっていることが社会貢献であることは自分自身でも意識しないことが実際には多い。つまり本人が気付かない社会への奉仕となっている。自分自身が自発的に一生懸命に社会奉仕をするのだけれども、自分が当たり前だと思っていて、周りからもさほど気付かれないものかもしれない。たとえば、「Dさんと多くの高齢者ボランティアたちが公園清掃を行なっている。“タバコとか、ペットボトルとか、空き缶とか、特にタバコが多いな。やった後できれいになった。自分が嬉しい」という。簡単に“嬉しい”と言いながらも、長年続けてボランティアをした素直な気持ちの表れである。Kさんのような高齢者たちがきれいな環境を保ちながら生活するのが望ましいと思って、ゴミを捨てる人を監督する、命令ではなくて、自発的な行為を通して、周りの生活環境をきれいにしていっているのである。

しかし、高齢者施設では第3節で示したように「施設入所高齢者はほぼ一日中同じフロアにいると視覚まで受け身となり、同じ物・ことだけ見えるため、無味乾燥な日常になりがちであると考えられる」。これは極端な表現かもしれないが、高齢者たちが施設での生活が無味乾燥になりがちなようである。通常は自分が勝手に外出ができないので、嬉しい気持ちでなにかやって社会貢献を考える環境雰囲気もないのではないだろうか。

二番目の特徴としては、「孤独の解消」としての社会貢献である。高齢者ボランティアが同じ高齢者の孤独・孤立感に気がついて、自分の力で孤独の高齢者のために居場所を

作りたいと考えているようである。

たとえば第四節で述べたように、三条地区では高齢者の孤立問題があって、居場所のない高齢者が多いことを気づいた。また居場所がない子もいた。そのため、高齢者ボランティアの人たちは自分たちの力でふれあい場を作り、高齢者と子どもの交流もできるようにした。

また、他者の孤独の解消もあるけれども、自分自身の孤独の解消もあることに注意しておく必要がある。たとえばLさんが「ボランティアをやって達成感がある。仕事をやめて家にいる時間が長くなる。顔を合わせる人、挨拶ができる人、同じ近所に住んでいても、関係する人は少なくなる。顔なじみの手段としてボランティアをやることである」と言っていたように、自分の孤立の解消もみられる。

しかし、高齢者施設では、第3節に示したように、ホームに住む高齢者は外で住む高齢者よりもっと孤独感を感じているようである。またホームに住む高齢者が接触できる人はだいたい自分の子どもと親戚、親戚でもだいたい60歳から70歳までの親戚だけである。子どもと親戚の以外の人との接触がすくないため、社会ネットワークはあまりない。それで自分が熱情を持って積極的に自分の力で孤独の解消へのことを考える高齢者がすくない。

三番目の特徴としては、少し例外的な特徴であるが、「自分の身につけた技術を活かす」形としての社会貢献も存在する。4節で示したおもちゃの修繕も技術であるが、それが自分の国のためだけではなくて、外国への技術援助となって実現することがある。それは技術援助を通じて、外国人との友好交流を深め、両国の架け橋ともなることがある。

たとえば第4節の中でVさんに関する事例では、「はじめて訪れた村で先生ぶってあしなさい、こうしなさいといっても、誰もきいてくれません」Vさんが中国に派遣されたとき、最初地元の農民から信頼されなくて、苦勞した。いつか、中国の農民も豊かになれるように、技術を教えて、感謝をされた。しかし、「自分としては当たり前のことをしただけだと思っていますが、日本の最高の技術を中国に教えることができたという満足感があります」と受賞の感想を話す」その言葉は簡単であるが、高尚とともに尊敬すべき価値観の体現じゃないかと思われる。

ともあれ、社会貢献を通じて、高齢者ボランティアたちは充実感をもっているようで

ある。

5.3 新しい自分の発見

「新しい自分の発見」の特徴の一つとしては新しい資格を取って「新しい分野のボランティア仕事に携わる」というものである。そのため、ボランティアの仕事を通して喜んでもらうとともに、自分も楽しさと生きがいも感じるというものである。たとえば、第四節のUさんは「健康生きがいづくりアドバイザーの資格をとった。アドバイザーのボランティアをして、“人に喜んでいただくことを自分の喜びとして実感しながら交流の輪も広がりました」と言った。先輩の意見を聞いて新しい資格を取って、らくらく体操のアドバイザーをした。新しい分野に触れてボランティアの新しい人生をスタートさせる。やりながら他人を喜ばせる同時に、新しい自分の発見を発見している。

またPさんは「今は福祉施設、敬老会、子ども会など、時には大きな舞台でも披露している。自分でもこんなことをやるようになるとは思いませんでした。サラリーマンの時代の私を知っている人が見たら、びっくりする」と言った。新しい資格を取って、定年前の自分とぜんぜん違う。新しい自分がもっと大きな舞台に入った気がするという。

二番目の特徴としては気の合う新しい仲間づくりができて「若い時とは異なった」新しい自分が見つかった。たとえば、第四節の中でFさんはNPO法人チーム御前浜・香櫨園浜 里浜づくりのボランティアをしている。彼が言ったのは「昼にはワンコインで皆で飲みながらワイワイガヤガヤこの仲間はいろいろな経歴のある人達で話が面白い。もしボランティアをしないと、しゃべる所はない。みんな飲んでわいわい政治や日常などのいろんな話ができる。ボランティアの仲間の間では利害関係を考えないで気楽に話せる。もしボランティアをしないと、ただ夫婦の間での話だったら、テーマは少ないし面白くない毎日を送る。仲間達と話をして意見の違いが少ないし、揉めることは少ない」である。つまりボランティアのグループに入って、今まで勤め先との同僚たちとの付き合いが違って、お互いに利害関係、上下関係がなくて、気の合う仲間できるし、新しい友達ができただけで、話の話題が多くなってボランティアの仕事に対しての期待があって楽しいし、若い時と違った新しい自分になる。

三番目の特徴としては自分がやったことが回りから褒められて慰められながら新しい

自分を発見して生きがいを感じてボランティア活動を続けたい。つまり「やりがいのある」自分の発見である。たとえば、第四節の F さんが小学生に環境教育をし、「コンビニに入っていくと、男の人が私を見て“あ！里浜の F さんだと声をあげた。声の方を見ると、小学3年生くらいの男の子が2人いてニッコリ笑っていた。覚えていてくれたとうれしかった」、「現地授業に参加したお母さんが、“近くに住んでいるのに浜を良く知らなかった今日は大変勉強になりました、子どもと共通の話題が出来て良かったわ”とってもらえた」、「小学校の担任の先生が児童に説明をしているのを聞いて、“浜のことが良くわかりました。ありがとうございますと御礼を聞くと役に立っているのだなを思う」。コンビニで環境教育を受けたことがある学生に声を掛けられて本当にびっくりしたほど嬉しい。先生と保護者からは浜のことについて教えられて高齢者ボランティア自身も満足感を感じながらボランティアで自分の生きがいが見つかった。もっとこれからの学生達に浜の生物と浜の歴史などを教えた意欲が湧いてくる。つまりボランティアを通して多くの人に新しい自分の価値が認められる多彩な人生を開いた。

しかし、高齢者施設では第3節で示したように、「入所群で抑うつ状態の高齢者が多かった」と指摘された。やはり高齢者達が主に室内で生活するから、精神的に問題が生じやすいようである。コミュニティボランティアとして活躍する高齢者と比べると生き生きさが異なってくることは否定できない。

6 結論

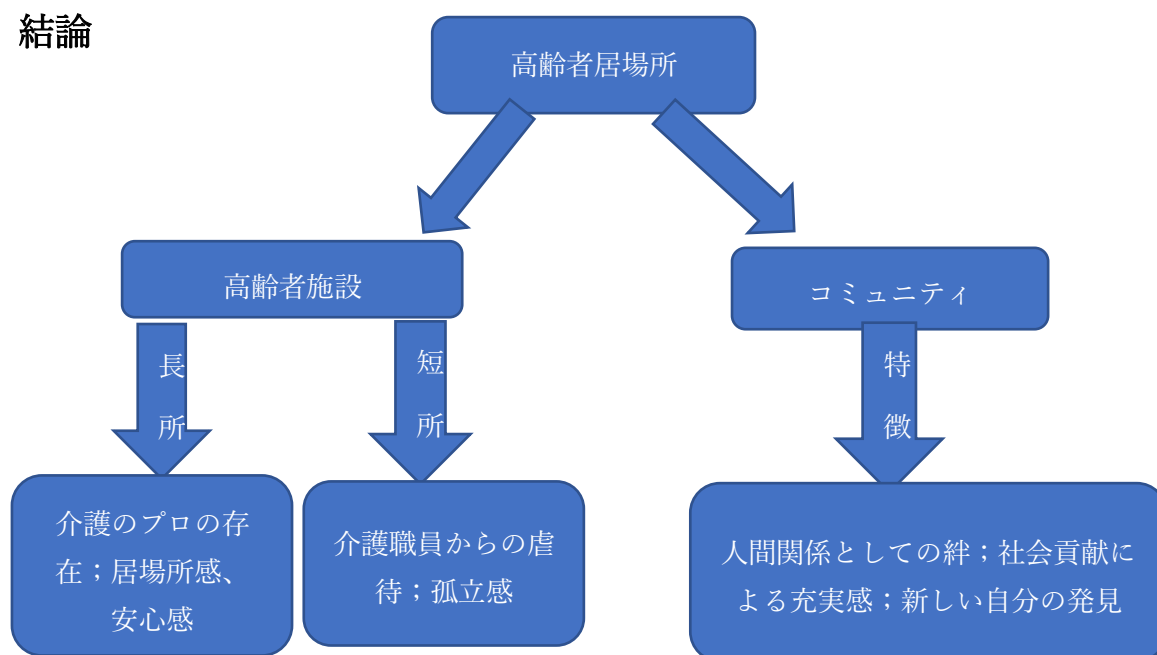


図 7 高齢者の居場所の概念図 (筆者作成)

高齢者にとっての居場所として、コミュニティがどのような位置づけになるかを検討することを課題とした。もっとも高齢者の居場所と言えば、高齢者施設もひとつの大きな役割を果たしている。高齢者施設は専門的な介護に配慮がいきとどき、プロといえるケアがある。また規則が厳しいことからリズムのある生活を送ることができる。そのため施設は高齢者にとっての安全な居場所として認められる。

他方、高齢者施設の現場で働いている介護職員等が仕事のストレスのためか、高齢者に対して虐待がおこなわれているという報告もみられる。また、高齢者施設の現場で労働力不足から、言葉の不自由は外国人の介護士を雇わねばならないというケースもみられる。また、すでに紹介したように、研究者たちの研究の成果によると、施設では孤立と孤独を感じる高齢者がかなり多いようである。

コミュニティは高齢者施設とは異なったもう一つの高齢者の居場所である。第4節で紹介したコミュニティでのボランティアの事例を使いながら、5節では「絆」、「社会貢献」、「新しい自分の発見」の三つの視点からコミュニティの居場所の特徴を分析した。

コミュニティで活躍している高齢者たちは人との触れ合いを通して、絆を築くことができた。また世代間交流があって高齢者たちが元気と喜びをもらった。まちづくり活動

を背景としての絆という特徴も見られる。ここではつまり、人間関係の広がりがある居場所をつくったのだということができよう。

「社会貢献」において、3つの点を指摘した。ひとつには高齢者たちは自分の行為が役に立って嬉しいという気持ちがある。この社会奉仕による自己満足というのはよく理解できるところである。2番目に、社会貢献の作業を行うことで、相互の人間関係ができ、それが孤独の解消になっているということを指摘した。3番目に多くの高齢者はもともと仕事の現場でいろいろな技術を持っていた。その広い意味での技術を生かすことで、社会貢献をしているという喜びと満足感が自分の居場所感を強めている。

つぎに「新しい自分の発見」という特徴においては、多くの高齢者が新しい資格を取得したのち、新しい分野に携わって、自分の新鮮さを維持しながら新しい自分の活躍の場を発見している。その結果、新しい友達ができ、いままでと異なったボランティアの体験をすることで楽しく過ごせるので、それを楽しんでいる自分を発見している。また「やりがいのある自分」を見つけ出している。大変身をした人もいた。自分の努力によって、周りの人に認められて、一層の自分自身の価値が見つかることによってである。

ところで居場所という視点から、高齢者にとってコミュニティと類似の機能をもつ高齢者施設と比較した場合、どのような差異があるのだろうか。じつはコミュニティで活躍できる高齢者は、前期高齢者といわれる年齢的にやや若い人たちである。後期高齢者になれば、施設の利用の利点が浮かび上がってくる。

中西真弓は「老人クラブが先覚者たちの呼びかけによって次第に大きな広がりを見せた後、参加者の高齢化と時代の流れによって次第に新規の参加者が減少しているように、サロン活動も、継続した増加がいつまで続くのか分からない状況であろう」と（中西真弓、2016、p 48）述べている。老人クラブというコミュニティ活動における、一層の高齢化の問題である。

また、「現役会員について見ると、自治会・町内会の課題として“会員の高齢化、役員のみならず手不足”を挙げた人が50%。老いていく組織への危機感がうかがえる」（『朝日新聞』デジタル 2015/10/04）。元気な高齢者は自治会で役に立っているが、それ以上になると無理なのである。

さらに、高齢者ボランティアたちは在宅の生活が多い。もし病気にかかったら、高齢者施設と比べれば、プロなケアがすぐ手に入ることができないので、いかにコミュニティにおける居場所が優れていても、たちどころに施設に依存をせざるを得なくなる。

けれども、詳しく見てきたように、コミュニティというものは一般常識で想定されているよりも、高齢者の居場所としてはるかに大きな役割をもっている⁽³⁾。したがって、高齢者になると、機械的に施設という発想をとる前に、高齢者たちがコミュニティで活躍できる場をつくることを政策的に考えるべきであろう。

【参考文献】：(アルファベットの順序)

新井康友・原田由美子「超高齢社会における高齢者介護支援」『関西学院大学出版会』、2015年 p44

あなぶきの介護「介護付き有料老人ホームの特徴とメリット・デメリット」

<https://www.a-living.jp/contents/72/> 閲覧日 2022年2月11日

文婧「日本的養老サービス模式及其経験教訓」『特区経済』、2020年 p88

馬天月「日本養老サービス的主要特徴」『中国社会報』、2018年 p2

藤原武弘、来嶋和美「老人ホームの老人の孤独感と社会的ネットワークについての調査研究」『広島大学総合科学部紀要』、1989 p63

羽田圭子「広がりつつある高齢者の見守りの現状と今後のあり方について」みずほ情報総研レポート 2017 p2

原田聖子「高齢者施設における虐待の発生と対応：先行研究の検討を中心として」『東洋大学大学院紀要』、2014年、p75

厚生労働省社保審一介護給付費分科会の施設・居住系サービスについて pp1-2

https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000044903.pdf 閲覧日 2022年2月11日

厚生労働省、社保審一介護給付費分科会の介護老人福祉施設第143回

(介護参考資料2) p18 https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000171814.pdf

閲覧日 2022 年 2 月 11 日

川村匡由「高齢者福祉論」『ミネルヴァ書房』、2005 年 pp170-172

楠永敏恵・山崎喜比古「介護老人保健施設に入所した高齢者の“満足”“不満”ならびに
“不満への対処”の分析」『社会福祉学』、2003 年 pp86-87

河合克義・清水正美「高齢者の生活困難と養護老人ホーム」『法律文化社』、2019 年
p19、p43、p75

亀谷秀樹・山村豊等「老年期の心理学」『学述図書出版社』、2004 年 p117、p119

介護アンテナ「特別養護老人ホームのメリット・デメリット」

https://www.kaigo-antenna.jp/kaigo-maruwakari/kaigo-info/contents_002/detail-41/

閲覧日 2022 年 2 月 11 日

木村勇介、深谷安子「施設入所高齢者の日常生活行動に関する要望や困りごとの構成
要素」『老年看護学』、2008 年 p55

丸尾直美・宮垣元・矢口和宏 「コミュニティ再生」『中央経済社』、2016 年 p109

鳥羽美香「養護老人ホームの今日的意義と課題」『文京学院大学人間学部研究紀要』、
2008 年、pp137-138

森川洋「2010・2015 年の国勢調査からみた高齢人口の地域的特徴」『地理科学』、
2018 年、p35-49

守永英輔「高齢者の社会参加」『生きがい研究』、2006 年、p32

みんなの介護ホームページ 『老人ホーム・介護施設の 1 日の流れ』

<https://www.minnanokaigo.com/guide/life/schedule/> 閲覧日 2022 年 2 月 11 日

幡郁枝「地域のニーズに応えながら自らの生きがいも作り出す ナルクびわこ湖南」
『まちむら』、2010 年、pp17-19

西川真理子「居場所の条件—高齢者の居場所から大学生の居場所を考える」『流通科
学大学高等教育推進センター紀要』、2017 年、p66

中河原文「高齢者同士で支えあう、週に一度の“ふれあい朝市”」『まちむら』、2010 年
pp14-16

NEC ユーザー会ホームページ 『MY CHRONOLOGY～未来へ続く年表～

塩崎農園/日中花甲志願者協会 塩崎三郎氏』

<https://jpn.nec.com/nua/my-chronology/07/> 閲覧日 2022 年 2 月 11 日

野島正也「高齢者のボランティア活動」『現代のエスプリボランティア』、1994 年 p64、
p71

直井道子・中野いく子「よくわかる高齢者福祉」『ミネルヴァ』、2009 年 p39

中村美智代「高齢者の居場所研究についての動向と課題」『甲子園短期大学紀要』、2017
年 pp17-18

中村美智代「入所施設を利用する高齢者の“居場所感”に関する予備的検討」『甲子園短
期大学紀要』、2018 年 p 23

中村美智代・大橋徹也・松山光生「高齢者の居場所感質問紙の作成と在宅高齢者の居
場所感に関連する要因の検討」『最新社会福祉学研究』14 号、2019 年 p36

中西眞弓「高齢社会における地域コミュニティについての一考察」『神戸山手短期大学
紀要』、2016 年 p 48

大橋美幸「グループホーム及び高齢者施設における“高齢者虐待”に関する調査—グル
ープホームでの虐待公表を受けて」『函大商学論究』、2012 年 p 85

小黒一正・平方啓介「人口減少・超高齢化下での介護施設の設置のあり方及び GIS (地
理情報システム)の活用に関する一考察 新潟市を事例に」『フィナンシャル・レビュー』
2017 年、p68

大橋謙策「ケアとコミュニティ」『ミネルヴァ書房』2014 年

大藤文夫「ふれあい広場の誕生—呉市三条地区の事例」『広島文化学園大学ネットワー
ク社会研究センター研究年報』、2016 年 p54、p56

奥村司「元気に楽しく生きるための体操教室を開講」『人生は二幕がおもしろい』健康・
生きがい開発財団、2014 年 pp14-19

沖中正明「高齢者の笑顔が絶えないデイサービスの運営」『人生は二幕がおもしろい
超高齢社会への健康生きがいづくりアドバイザーの挑戦』一般財団法人 健康・生きが
い開発財団 2014 年 pp26-31

有料老人ホーム検索 探しつくす「老人ホームのメリットとデメリット」

<https://www.sagasix.jp/knowledge/about/rojinhome-merit-demerit/> 閲覧日 2022 年 2
月 11 日

- 陸継鋒・陳悳「日本養老機構建設及運営経験」『学習時報』、2018年 pp1-2
- 鈴木幾多郎「高齢者の“第三の居場所”のデザイン」『桃山学院大学総合研究所紀要』、43巻1号、2017年 p146
- 清水英孝「住民手づくりのプログラムで高齢者等の交流を促進」『まちむら』、2014年 p11、p13
- 清水祐子・佐藤みつ子他「在宅高齢者と施設入所（入院）高齢者の QOL に関する研究」『山梨医大紀要』、1999年、p26
- 外山義「自宅でない在宅—高齢者の生活空間論」『医学書院』、2011年 p55
- 津軽谷恵「在宅高齢者と介護老人保健施設入所者の主観的 QOL について—Visual Analogue Scale を用いて」『秋田大学医学部保健学科紀要』、11巻1号、2003年 p46-54
- 鄭春姫「高齢者の生活における外出の重要性に関する研究：外出支援の在り方について」『浦和論叢』、54号、2016年、pp26-27
- 八畝耕造、「どうする？自治会・町内会：3みんなの見方」『朝日新聞』DIGITAL 2015.10.04 <https://www.asahi.com/articles/DA3S11998387.html>
- 飛田英子「高齢者向け住宅政策の現状と課題—地域主導でサ高住の機能拡充を」『JRI レビュー』、2015年 p52
- 上野佳代・菊池和美・長田久雄「国内文献にみる高齢者の居場所に関する研究—エイジング・イン・プレイスにむけて」『老年学雑誌』、8巻、2017年 p43
- 矢部広明・宮島直丈「高齢者に対する支援と介護保険制度」『弘文堂』、2009年 p187
- 吉岡なみこ「介護職の“専門性”に対する認識と評価：介護老人福祉施設の場合」、『福祉社会学研究』、8巻、2011年 pp106-111
- 伊藤真理子「外国人介護福祉士候補者等の受入れに関する諸問題—フィリピン、インドネシア、日本でのアンケート調査結果からの報告」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』、38巻、2014年 p100
- 横橋孝保「地域の交流の場としての車内 温かな会話が、今日も絆をつないでいく」『まちむら』、2010年 pp14-16
- 横内理乃・新田静江「介護老人保健施設入所時と2か月後における家族介護者の生活

状況と精神的健康度』『老年看護学』16巻2号、2012年 p84

永松美菜子・村山浩一郎「特別養護老人ホームにおける介護職員への職場内集合研修の現状と課題：北九州市における特別養護老人ホーム（介護老人福祉施設）を中心に」『福岡県立大学人間社会学部紀要』、25巻1号、2016年 p24

鈴木政史「社会福祉施設における地域交流に関する研究」『長野大学紀要』、2009年 p32

酒井郁子・吉本照子「介護老人保健施設入居者への生活リズム調整援助の効果の構造」『千葉看護学会誌』、14巻2号、2008年、p61

丁英順「日本老年福利施設の発展及啓示」『東北亜学刊』、2016年 p63

伊藤智子・加藤真紀他 「特別養護老人ホームで生活する高齢者のエンパワメント支援に関する検討－施設入居前後の社会関連性の変化から」『島根県立大学短期大学部研究紀要』、1巻、2007年、p52

松嶋健 「ピシコナウティカ イタリア精神医療の人類学」『世界思想社』、2014年 p381

【注】

⁽¹⁾ この高齢者施設についてのいわば公的な説明内容と、類似の内容を以下の実証研究がその結果を示している。酒井郁子、吉本照子などは「看護職、介護職が認識している老健入居者の生活リズム調整援助の効果」について面接をし、以下のことを明らかにした。「その効果の性質から、生体リズムの回復、情緒・感情の活性化、基本的生活ニーズの充足、充実した交流、自立、自律という入居者への意義があり、生活リズム調整援助はその人固有の生活リズムを見出し支え拡張を促すプロセス」（酒井郁子、吉本照子など、2008、p61）であると指摘している。

⁽²⁾ Fさんは定年になったときに隣のマンションの人から誘われて、ボランティア活動に参加するようになった。彼は長年、ワイヤーの工場で工場長として働いていた。若い頃は趣味はなく、家族のことも考えないで、仕事だけに夢中になっていた。

Fさんが言うには、ボランティアは今までの会社の仕事と違う。会社は目標を達するために、常に頑張らなければならなかった。しかし、ボランティアには気楽さがあり、やったら成果が出たり、もし何か足りない所があっても「ごめん」と言うことで許してもらえた。

⁽³⁾ この高齢者のための施設とコミュニティとの関係は、高齢者問題だけにとどまるものではない。たとえば、精神病患者に対する施設（精神病院）とコミュニティとの関係についても研究が進んでいる。そして端的にいえば、本稿と類似の指摘になっている。イタリアの精神医療を人類学的に研究した松嶋健によると、「精神病院という装置」は「客観

化・モノ化ということであり、人〈病人〉を“客”の位置にとどめておく」。他方、地域〈コミュニティ〉は「生態学的テリトリーである。そこはくつろぎがあり、遊びのある場所であり、利用者たちの生がそこに編み込まれていくことで“主体性”を具体的に行使できるようになっていく集合的な環境である」（松嶋健、2014、p381）。精神病者に対する地域のもつ積極的意味を評価している。

第四章

中国における高齢者ボランティア研究の現状と課題

1 問題関心

高齢者たちは社会の負担ではなくて、社会への貢献の側面があると私は考えている。本論文では中国のボランティア活動の実態、高齢者たちのコミュニティ⁽¹⁾での活動内容、また高齢者施設では高齢者たちはどのように遇されているのか、に関心を絞りながら、中国での研究の実態を紹介することを目的とする。

現在、中国では以下のような政策がうたれている。

中国では高齢化が進んでいる。尹豪の推測では「高齢者人口の急増のため 2050 年には 65 歳以上人口が 3 億 2300 万人に達し、高齢化率は 23.1%になる」（尹豪、2007、P103）という。

段世江・安素霞によると、「我が国は高齢者の社会参加を非常に重視している。“中華人民共和国老年人權益保障法”が我が国の高齢者の權益を保障する基本的法律として、高齢者の社会発展に参加することについてとくに章を設けている。また八つの方面⁽²⁾において高齢者の社会活動の参加を法律保護の範囲に入れてきた。それは我が国の高齢者の社会参加が自発的に自分の權益を守るという行為から政府の行為へと展開されるシンボルとなる」（段世江・安素霞、2011、p40）という。

中国紀検老齡委事務室が 2003 年に起こした高齢者学識経験者ボランティアサービスの一つを中国政府は“銀齡行動”⁽³⁾とよんでいる。それは重要な運動である。その内容を見ると、“銀齡行動”とは医療衛生に特化した援助から文化、教育、農業等の経済各分野に至るまですべての方面の援助にわたっている。近年、各地において高齢者ボランティア情報管理制度、トレーニング制度と激励制度を創立し、“銀齡行動”を規範化、常態化するように鼓舞している⁽⁴⁾。

また、中国のボランティアについて、ここ数年、中国政府はボランティアの社会に対する役割を重視するようになった。2017年6月7日に国務院第175次常務会議において『志願サービス条例』が成立した。2017年12月1日からそれが施行された（中華人民共和国民政部『志願服務条例』）。

その結果をうけて、高齢者ボランティア活動が一層、盛んになってきた。たとえば、上海市ではつぎのような活動を行っている。韓雯の上海市徐匯区高齢者教育ボランティアに対して調査によると、「我が国の高齢者ボランティア活動が主に専門性サービスと社区サービスに集中しているが、たとえば定年した医者達がボランティアチームを作って“銀齡行動”を起こした。定年した教師が貧しい村鎮地区の小中学校の教育と教学を支援する専門性のあるサービスである。老年教育ボランティアはここ数年高齢者ボランティア教育の発展にともなって発展した高齢者ボランティアである。上海は2014年高齢者教育ボランティアグループを結成するようになった。区ごとに支部グループを形成して、現在（2017年）では高齢者教育ボランティアに29.2万人が応募した」（韓雯、2018、p88）という。

このような政策下において、どのような研究が行われているかを以下で検討する。

2 中国の高齢者ボランティアについての研究

2.1 中国の高齢者ボランティア活動の概況

趙海林は高齢者ボランティアそのものについて広い視点から論考を展開している。かれによると、「高齢者のボランティア活動への従事的重要性を検討し、高齢者がボランティア活動に参加する困難を分析し、さらに科学的なボランティア活動の設計と高齢者ボランティア活動の合理的なアレンジのために、高齢者ボランティア活動の環境を検討し、ひいては高齢者達がボランティア活動に従事する政策を参考として提供する」（趙海林、2014、p86）ということを分析の目的としている。そして「高齢者の社会価値を無視する伝統的な作法を変えよう、“高齢者は社会の負担になる”という偏見を変えよう」という政策的な意図もこの論文で述べている。

そして、高齢者のボランティア活動に参加する重要性について4点を指摘する。1) 高

齢者の心身健康のために。2) 高齢者の社会参加の積極性の促進。3) 全社会の養老の見方を革新すること。4) 高齢化社会を支持するネットの構築である。

また、高齢者がボランティアサービスに参加する困難については以下の5つをあげている。すなわち、1) 考え方が時代遅れのために家庭の支持が乏しい。2) 激励の気持ちが弱いために、長期間の管理が不足している。3) ボランティアサービスにかかわる法制度が現実よりも古いために権益や保障が十分ではない。4) ボランティア組織を管理するための制度が完璧でないのに制度的革新が行われていない。5) ボランティアに従事するための教育とトレーニングの乏しさがある（同上：pp 87-88）と述べた。

王枚・王萍・王磊によると、「都市コミュニティの高齢者のボランティアの有効機制を探る」（王枚・王萍・王磊、2009、p 37）という目的のもとに以下のような調査をし、結論づけた。すなわち「510名のボランティアを対象としたアンケート調査によると、82%以上の高齢者はコミュニティでの共益活動に参加したいと希望している。それは自分の価値を発揮できるからという考えからである。また、高齢者はコミュニティのボランティア活動に参加したいが、“専門的な組織者がいないし、情報などが手に入れないし、家族からの理解はもらえないし、世間からの尊敬がなく、社会に認められない”などの理由で高齢者の参加の熱意に（マイナスの）影響を及ぼしている」（同上、2009、p 37）と指摘した。

さらにこの研究結果に基づき、かれらは以下のように5つの対策を示した。「1つ目は考え方を転換し、高齢者の個人価値を見直す。2つ目は規制とルールを建てて、高齢者のボランティア活動を規範とさせるということである。3つ目は激励を強めるなど、コミュニティにおける高齢者活動に精神的支持を与える。4つ目は予算を多くして、コミュニティに経費の保障を与える。5つ目はコミュニティの高齢者のために、多くの小さな集まれる場所を設定する」（同上、2009、p 38）。

杜鵬・謝立黎・李亜娟は「多くの高齢者をボランティア活動に参加してもらえるように、“年寄りにも何かなすことがある”ということを実現して、社会が高齢者に対しての偏見を削除し、積極的な高齢化のことを目指す」（杜鵬・謝立黎・李亜娟、2015、p90）として、その結論として、高齢者のボランティア活動への参加において「78%の高齢者は参加年数が5年以上である。高齢者がボランティア・サービスに携わる時間がとても

長い。(中略)登録された950人のボランティアには、90%は50歳以上の高齢者ボランティアである。女性の参加者が主となっている。経済レベルの高い高齢者が収入の少なくまた教育歴が低い高齢者より参加率が高い。なお、体が健康である高齢者は参加率がとても高い。今回の調査で婚姻要因が高齢者のボランティアに大きな影響を与えている。夫婦である人びとが高齢者ボランティア活動に参加を希望している割合が高い。つまり経済資源、社会資源、家庭資源の少ない弱者グループが高齢者ボランティアグループから排除されている」(同上、p94)という結果を示している。

李芹によると、「最近中国では、高齢者ボランティアに関する研究として、以下の特徴が見いだせるという。1つ目は高齢者ボランティアに関する詳細な研究は少なかった。2つ目は高齢者に対する注目は消極的に保護されることが前提になっていて、高齢者の積極的で創造性のある面まで掘り下げられていない。すなわち高齢者の知識、能力、それに財産などを活用していないのである。3つ目は既存の高齢者ボランティアの研究においては高齢者の長所と、価値、また、高齢者ボランティアの課題などが述べられていない」(李芹、2010、p73)と問題点を指摘した。

そのうえで彼女は「都市コミュニティの高齢者の特徴、コミュニティ委員会と高齢者のボランティア、それに、高齢者ボランティアによるボランティア従事の価値に対する評価」(同上、p73)ということを明らかにする必要があると指摘して、以下のように分析結果を示した。「中国の都市コミュニティにおいては多くの高齢者達は定年になっても仕事の気持ちをもって積極的にコミュニティサービスの活動に携わっており、自分で選択した共益の活動において自分の知恵と技能を発揮し、人生の価値を体現している。また、高齢者はボランティア活動に参加して、高齢者たちが社会の負担となるというマイナスの世間の見解を変えた。高齢者は社会の中の重要な人力資源として、若者と一緒にボランティアサービスに社会奉仕として貢献できる。高齢化が深刻に進んでいる中国にとっては“年をとっても養老が必要である研究より年を取っても社会に貢献しているという研究がもっと重視されるべきである”」(同上、2010、p79)と述べた。

2.2 高齢者ボランティア活動の動機と参加についての要因分析

段世江・王鳳湘は高齢者ボランティアの研究はその動機を明らかにすることが大切で

あると主張する。その理由として、「たんに参加者自身がボランティア活動に対する理解を深めるだけではなくて、ボランティア活動を選ぶ原因と参加の目的などが理解できるからである。中国における人口高齢化の加速の背景のもとで、和諧社会⁽⁵⁾構築と積極的高齢化戦略の実践のもとで、高齢者のボランティア活動の参加の動機に対しての研究が、中国高齢者が社会参加の実際の要求を理解するのに役に立つ」(段世江・王鳳湘、2010、p 121)と指摘している。

また、さらにかねらは「高齢者がボランティア活動に参加する動機によって、高齢者をボランティア活動に推し進めさせるし、心理的に満足感を与えることができる」。(同上、2010、p 122)と位置づける。そして調査の結果、つぎの結論を述べる。「高齢者はボランティア活動に参加する動機として、“必要な仕事を代わりにしてあげる”、“自己価値の実現”、“人脈のネットワークの形成”、“社会的責任感をもつ”という4つがある」(同上、2010、p 122)という。また、「中国の高齢者ボランティアの参加動機の特徴としては、“動機類型的多元的共生”（動機としてさまざまあり、その多様性がありつつも共同の目的を遂行できる）(同上、p125)であるという。また「“自己価値の実現の精神心理性”、“共産党に対する恩返しという鮮明な時代の特徴”」などがあると指摘する。

張娜によると、「高齢者の人的資源を掘り起こすべきだし、高齢者の社会参加の問題」(張娜、2015、p 91)を研究する必要性を説く。また、「国内では高齢者ボランティアへの従事に関する研究は一定の成果を収めたが、実証研究は相当に少ない」(同上、2015、p 92)と指摘したのち、以下のように分析する。

「“教育を受けた程度”、“子どもと一緒にの居住”、“コミュニティのスタッフとの交流をしているかどうか”、“家族間での相互関心”という変数は高齢者がコミュニティに参加する要因として大きい。高齢者のコミュニティのボランティア従事活動の参加の願望を高めるためには、高齢者の保障体制とその組織基盤を完全なものとする」(同上、2015、p 94)必要があると指摘した。

陳茗・林志婉は、2000年に、厦门市において、アンケート調査を行い、その結果、つぎのことが明らかにした。すなわち「多くの高齢者はこれらのボランティア活動に参加することによって、援助の必要な人を助けている。自分の知識と技能を発揮し、新しい友達ができ、晩年の生活の質を高めることができ、活動から楽しさと満足を得ている。

そのような効果があるので、68.3%の高齢者はこれからもボランティア活動に参加し続けるという。57.4%の高齢者は他人に知識を与えながら、一緒にそのようなボランティア活動に参加すると表明した」（同上、2003、p 27）という。また、「アンケート調査を受けた高齢者たちで、マイナスの評価をしたのは、ボランティアに関する情報が乏しくて、周りにはボランティア団体がいない」（同上、2003、p 28）からだと答えた。

謝立黎によると、なぜ願望がずいぶんあっても低い参加率になってしまったのか、どんな要因によって高齢者がボランティア活動の参加に影響をもたらしたのかという疑問のもとに分析をした。その結果、「都市の高齢者ボランティアは願望が高くて、参加率が低い。40.8%の高齢者は現場のボランティア活動に参加したが、一方、40%の都市高齢者は願望があっても、参加の行為が見えなかった。また高齢者ボランティアは高齢化の傾向がある。高齢者はボランティアへの従事年数が延びている。受けた教育水準が高いほど、それら的高齢者はもっとプロフェッショナルで多様なボランティアへ従事したいと思っている。さらに、健康状況は高齢者のボランティア活動の参加にポジティブな作用をもたらしている。なお、経済状況はボランティアへの従事との関連は非常に少ない」

（同上、2017、p 63）と指摘した。「高齢者のうち年齢が若いほどボランティア活動に参加する程度が高くて、女性高齢者は男性の高齢者よりもっと多くのボランティア活動に参加する」（同上、2017、p 64）という。

曹前は、上海地区の高齢者ボランティアを調査した。その結果「高齢者のボランティア活動の範囲は主にコミュニティであること。高齢者ボランティア活動は居民委員会や社区などのコミュニティ関係の部門と関わりがある。参加する分野として、環境保護に関する活動が 67.6%、コミュニティ教育関係の活動は 14.2%、交通治安関係の活動が 5.7%で、他に少数だが防災関係と法律援助などであった」（曹前、2013、p 46）。

また「高齢者がボランティア活動に参加する影響要因として、年齢、収入、学歴などに関連性がある。高齢者ボランティア活動を一層活発化させるには、4 つのことが提案できる。1 つ目は考え方を変えて、高齢者を積極的に社会人力資源として扱う。2 つ目は広報をつよめて高齢者ボランティア活動の実態を伝わりやすくする。3 つ目は高齢者ボランティア活動に関わる施策を打ち出して、それに沿って活動を行う。4 つ目は活動内容に多様性をもたせて、活動を活性化させる」（同上、2013、p 48）とこのような提案を

出した。

段世江・安素霞によると、「高齢者ボランティア活動への参加は高齢者の定年生活に適応し、社会価値の需要の体現ともなる。高齢者にとってボランティア活動は、生産性の活動と同じで、普通の給料のもらえる仕事と変わらない。それは社会の価値の実現と人生の生きがいの実現になれる」（同上、2011、p40）と指摘し、さらに「社会からの尊重と満足がもらえるし、自分自身も社会に対する責任と貢献をしている。それに、高齢者にとっては、新しい体験ができるし、そこからの責任感と創造力が湧いてくる」（同上、2011、p41）と指摘した。

李広賢によると、「福建省泉州市の高齢者ボランティアの活動の展開状況を例として、人口高齢化の背景の下で、都市高齢者ボランティア活動の検討」（李広賢、2015、p84）を行った。その結果、「泉州市では市高齢工作委員会において、高齢者ボランティア活動を行っている。ボランティア活動は微弱である。うまく組織化されていないし、社会から十分に認識されていない。規模が小さく元気がない。活動の内容も特色がない」（同上：pp84-85）と指摘した。「高齢者ボランティア活動の展開を促す対策とアドバイスとしては、もっとアピールし、高齢者の参加意識を刺激する必要がある。政府の政策を示して、活動に必要な支援を得る。また、地元の文化を生かし、特色のある高齢者ボランティア活動を展開すべきである」（同上、2015、p85）と今後の施策のあり方を述べている。

宋婷・汪丹他は「高齢者ともうすぐ高齢年齢に入る中年者たちがボランティア活動に参加する動機状況を探ること」（宋婷・汪丹等、2017年、p38）を論文の目的としている。そして意外なことに、伝統的な“養老観念”、“親孝行文化”、“孫などの世話”などの要素が中高齢者ボランティアの動機に直接的なプラスの影響を与えている。また高齢者は「“価値表現”の得点が中年より高い。つまり高齢者はボランティア活動を通して自分の価値観の願望を表しているのがもっと強いである」（同上、p40）という。さらに「中高年の自我増強での得点は“価値表現”に次いでいる。つまり中高齢者はボランティア活動を通してもっと多くの友達を作りたい。中高年ボランティア“知識理解型”、“職業生涯型”は第3位と4位に達している。特にこれから定年を迎えている高齢者にとって、ボランティア活動を通して“労働者”から“ボランティア”までの役割の転換が実現できる。しかし、中高年ボランティア社会交際型と自我保護型の動機についてはもっと高めたほうがいい。

つまり“老老互助（高齢者は高齢者を助ける）”というボランティア形式を通して、同年代の交流を深める」（同上、p40）べきだと指摘している。

2.3 高齢者ボランティア活動実践の困難性と対応施策

劉晉飛によると、「学界では、コミュニティボランティアに関する研究は、主にコミュニティボランティアサービスの動機、影響要因、熱意のメカニズム、長期的で有効的なメカニズム、コミュニティボランティアの管理と育成パターンなどの分析があった。しかし、“初創公益組織”（日本の NPO のような組織）という組織がコミュニティの高齢者ボランティアをどう育てたのかという分野の研究は非常に乏しい。そこで、広東の東莞市Dコミュニティの事例を基として、高齢者ボランティアを育てるにはどのぐらいの困難があったのかを分析し、対応政策を検討する」（劉晉飛、2018、p1）と自分の問題関心を明らかにし、以下の分析を行った。

「コミュニティの高齢者ボランティア育成の成功点として、3つのことが挙げられる。1つは、コミュニティのサービスセンターを通して自分をアピールする場を設置する。2つ目は高齢者ボランティアの考え方を広く宣伝する。3つ目はコミュニティの資源を統合し、利用効率を高める。

他方、実践の中の困難として、5つのことが挙げられている。1つ目は高齢者ボランティアの募集体系が非能率。2つ目は高齢者ボランティアに対するトレーニングの内容が単純すぎる。3つ目はボランティア活動の監督がうまくいっていない。4つ目はコミュニティボランティアが熱意をあげるメカニズムが機能していない。5つ目は高齢者ボランティアサービスの評価システムが機能していない。その対策としては、1つ目は高齢者ボランティアの募集体系を強める。2つ目はトレーニングの内容を、各地の条件に適した内容を選ぶ。3つ目は監督のメカニズムを一層、健全化させるということである」（劉晉飛：pp 3-4）と指摘した。

馮美琪が、ボランティアの参加数の不足、ボランティア管理体制の不健全と運行効率の低さ、およびサービス意識が強くなって、専門技術能力の弱さ（馮美琪、2018、p140）があるという問題を指摘している。それを具体的にいうと、「我が国では社区養老サービ

スに携わるボランティアの発展はとても緩やかで、ボランティア人数がまだ足りなくて、欧米先進国と比べて、まだ大きな距離が見られる。欧米先進国は発展が速いので、完璧な制度体系があるからこそ、ボランティアの数が国民の数量の 30%を占めている。(中略) ボランティアの仕事は法律の保障が足りないので、地方政府が一定の条例とルールを出してるが、全国ではまだ法規が空白の状態になっている。それがボランティアの発展に影響している。(中略) 調査によると、ボランティアグループにおいては、数と速度の追求だけで、多くのボランティアはまだトレーニングを受けていないので、サービスの水準がとても低い」と(同上、p140)述べている。

杜鵬・謝立黎・李亜娟は、我が国のコミュニティ高齢者ボランティアの発展形式が多元化されていないといったうえで、以下のような4つの指摘をした。すなわち、高齢者ボランティアに対する施策として、臨機応変であること、情報を得やすくすること、サービスの拡大を実現する方法をさぐること、コミュニティ内で当該活動の理解をたかめること(同上、2015、p94)。

沈娟によると、「高齢者ボランティア組織には、問題がある。1つ目は高齢者ボランティアサービスの思想観念が遅れている。2つ目は有効的な保障メカニズムが乏しい。3つ目は科学的なトレーニングの体系が乏しい。4つ目は有効な考評メカニズムと激励体系が乏しい」(沈娟、2014、pp224-225)という。

さらに「我が国の高齢者ボランティアサービスの組織管理の有効的な手法として、まず、既存の考え方を捨てて、社会の認知を深める。次に、高齢者ボランティアサービスの有効な企画を立てる。合理的な項目“運行機制”(運用メカニズム)を立てる。健全な保障措置を取る。また、トレーニング、激励それに評価制度を立てる。最後に、高齢者ボランティアサービスの組織体系を完璧にする」(同上、2014、p225)と述べた。

2.4 高齢者のボランティア活動の刷新について

李娟・夏宇凡・楊宝婷によると、「我が国では高齢者がコミュニティボランティアサービスに参加する需給メカニズム、規範メカニズム、激励メカニズムそして保障メカニズムが乏しい」(李娟・夏宇凡・楊宝婷、2018、p50)という。

そこで次のような提案をする。「高齢者がコミュニティボランティアの制度設計と革新

のためには以下のような点を推進し、改善させる必要がある。①“互助文化”はコミュニティボランティアのサービスの中の基礎作用である。②積極的な高齢化概念を形成し、高齢者がコミュニティボランティアのサービスに参加する中心的思想とする。③コミュニティのガバナンスを変えて高齢者がコミュニティのボランティア活動に参加する鍵にする。④コミュニティ以外の多くの外の組織などを通して、資金提供を受け、それを活動の資金とする」(同上、2018、pp52-54)。

李琳は、「社会管理を刷新する対策としては、1つ目は政府の既存の役割観念を捨てて、各方面の力を整えて、高齢者サービスに提供するようにする。2つ目はコミュニティ養老サービスの情報ネットの建設を強化し、高齢者の人力資源の情報データを蓄積する。3つ目は高齢者ボランティアのトレーニングと教育を強化し、積極的な高齢化の養老概念で高齢者の人力資源を豊富にさせる。4つ目は監督検査を強くし、法律とルールを完璧にすること」(同上、pp241-242)と提言した。

劉素婷・楊国軍・孫彦東によると、「長期的で有効的なメカニズムを建立し、“高齢者が高齢者を助ける”のを推進し、互助養老を継続させることが必要である。1つ目は激励制度を建立し、ボランティア互助の再生原動力を強くさせる。2つ目は募集制度を建立し、高齢者ボランティアをスムーズに発展させる。3つ目は教育トレーニング制度を建立し、高齢者ボランティアの専門素質を高める。4つ目は社会の多方の資源を整え、養老の社会支持ネットを改善する。5つ目はNPOなどに依託して、互助養老社会の公共サービスを改善させる。6つ目は政策支持の制度を建立し、高齢者ボランティアサービスを持続し促すことである」(同上、pp74-77)と提言した。

3 中国高齢者施設に関する研究

張紀南・韓懿は「中国の高齢者人口数は世界一である。低出生率、低死亡率、低い人口増加率へと移行していることが明らかになった。中国の高齢化社会は“未富先老”の状態に陥っている。中国の高齢者福祉サービスシステムは急速な高齢化に追い付いていない」と(張紀南、韓懿、p103)述べた。

石田路子は「中国の“未富先老”という高齢化の特色、農村部と都市部との地域格差と高齢化問題の関わり、家族介護の限界と家政婦派遣業の隆盛、社区における在宅介護サービスの現状、高齢者介護サービスにおける人材の問題点」(石田路子、2013、pp5-24)について紹介しながら分析し、以下のような結論をだしている。「中国において高齢者介護は家族にとって負担が重くなる重大問題としての自覚はあるが、“介護”については身の回りの世話といった誰でもできる仕事という解釈にとどまり、それが高齢者の尊厳を守り、身体介護のみならず、可能なかぎり自立できる生活を支えていく環境整備や支援方法など専門的な知識や技術を必要とする高い専門性が求められるものであるという理解は非常に希薄である」と(同上、p24)指摘している。

孟健軍は「中国広東省 F 市 J 区の高齢者福祉施設の現地調査」に基づき、つぎの2点を指摘した。ひとつは「高齢化社会に向かう近年の制度設計は現状の実証結果と問題点を評価しつつも、政府の政策意図は常に進化している。これは地域の差異性に対応するパイロット地域の導入、“第12次五か年計画”と“第13次五か年計画”の目標設定の差異から理解される」。ふたつめに「政府の高齢化政策は、高齢化福祉サービス体制を構築するために、政府自身の役割を重視する一方、政府と市場との融合の視点から企業や第三セクターの参入を積極的に取り入れている」(孟健軍、2019、p18)と指摘した。

金紅梅は「自費入所の場合、入所段階で自立度が高い高齢者を優先的に入所させていることから、介護度の高い高齢者は入所施設から排除される傾向にあり、入所者は比較的に自立度の高い高齢者に限られている」(金紅梅、2017、p11)と述べた。

青柳涼子・ト雁によると、「民設民営施設の中にも“一床難求”(高齢者施設でのベッド不足により、高齢者が入り難い現象)の施設が存在することが明らかになった。大企業出資型の施設は、入居が高収入層に限られるという問題があるものの、運営は安定的で利用者に歓迎される実情であった。一方、個人出資型の施設の場合、明暗が分かれており、経営者の理念と専門的認識の有無や経営手法が経営状態を左右する大きな要素であった。運営が困難になっている施設の場合には、介護職員が不足しているか、あるいは専門性が低く、経営者の専門性に対する認識が十分でないのが共通点であった」(青柳涼子・ト雁、2016、p61)と指摘している。

郭芳は「中国の福祉施設の発展状況には2つの特徴がある。それは、中国の高齢者福

祉施設数の不足と空きベッドがあることである。空きベッドが生じた理由は（中略）社会的偏見、負担能力、施設の機能不備の3点が考えられる。そして、（中略）中国においては、高齢者福祉施設への財政支出が日本より少ない、ベッド数が日本より少ない割に、空きベッド状況が続いている、施設の種別が少ない、しかも施設は高齢者の特性を無視し、分類をした収容を実施していない、施設の機能が単一的であり、高齢者の多様なニーズに満たしていないことである」と（郭芳、2014、p154）指摘している。

長屋栄一・鈴木博志は中国の西安市を対象に、高齢者福祉施設への入所の実態と課題を地域や施設の種類の違いに注目して分析する。「老年公寓⁽⁶⁾は、相対的に独居や子どもなしは少ない。要支援・要介護が多く、有病者も多い傾向にある。老年護理院は、男性が多く、要支援・要介護が多いことに特徴がある。老年護理院では、ソフト面よりハード面の改善要望が強い傾向にある。旧市街地では、いずれの施設でも新市街地より年齢層が高い。性別は旧市街地では女性、新市街地では男性が多い。旧市街地では身体状況は悪く、有病者もやや多い。独居は少なく、子ども人数が多い。退休金などの経済的豊かさは旧市街地の方が高い。施設の快適性の高さや環境整備が良いことを理由に施設に入所する状況にないことが確認される。高齢者福祉施設の整備は、旧市街地を中心に配置することが、効率的、効果的であると考えられる。養老院、敬老院、老年護理院では特に行政の勧めが寄与している。基本的な施設内環境の整備やサービス水準に関する入所理由は強く現れていない。全体の介護サービス水準の質を向上すること、設備環境の改善をすることなどが、施設入所を促進する可能性があることを示している。」（長屋栄一・鈴木博志、2016、pp22-23）と指摘している。

包敏によると、「高齢者介護サービスの整備は中国が抱えている様々な社会問題のうち、もっとも喫緊の課題に違いない。（中略）一部が中国における高齢者介護サービスの問題点の打開策になるかどうか今後実施の推移をみていく必要があるが、中国の高齢者介護サービスの問題解決にはサービス内容の法的な規定、量と質の充実化、専門職の養成等の課題解決が避けて通れない」（包敏、2020、p26）と述べている。

「中国の介護保険制度を全国に推進していく上で、介護人材の不足および介護サービスの供給基盤の未整備は制度を弱体化させる要因になる可能性が高い。農村部では年金や医療などの社会保障制度が未整備なまま、都市部では介護保険制度が実施に移されて

きた。(中略) 公的医療保険の積立金を主要な財源とする介護保険制度は財政の持続可能性が難しいというのが本稿の結論である」(張建、2018、p118)と指摘している。

徐栄「①要介助・介護高齢者・介護高齢者の急増。②財政の不十分③老人病院に社会的入院の高齢者の増加④在宅福祉サービス施策の量的不足⑤家庭における介護機能の低下⑥高齢者の所得の保障が低いこと及び格差などの問題点に対する試論的な考案である」(徐栄、2010、p123)と指摘している。

李穎は施設のボランティアについての研究をしている。そして、活動浙江省绍兴市の高齢者福祉施設のボランティア特徴について以下のように述べている。「サービスの主体にはボランティアとして、“NGO ボランティア団体、(中略) 社区ボランティア”などである。サービスの内容としては、主に福祉分野、生活分野、医療分野、教育分野等。サービス形式には豊富で、多くの形式がある。常連形式、臨時形式等。サービス効果としては無料健康検査などである」(李穎、2015、p59)。

高齢者施設のボランティアサービスの問題について以下のように述べた。「ボランティアの供給と需要の問題がある。高齢者施設でのボランティアサービスは祝日だけが多い。ボランティアグループの流動性は大きいし、ボランティアには積極性と定期性は見られない。またボランティアグループには技能トレーニングが足りない。制度の規範と激励対策は不足である」(同上、pp60-61)と指摘している。

4、中国のコミュニティ（社区）における高齢者ボランティアに関する研究

成都市 D 社区を例として、謝媛・朱国紅は高齢者ボランティアの現状と困難について次のような4つの指摘をした。すなわち、

- 1、高齢者ボランティアをつぎつぎとリクルートしていく方法がうまくいっていない。
- 2、高齢者ボランティアがコミュニティ活動に参加するばあい、たとえ積極性が高くても、自主性が乏しく集団意識がない問題がある。
- 3、社区において多くのボランティアが行われているが、組織管理が十分ではない。そのためには、活動を励ます制度が必要である。
- 4、ボランティア活動の経費支持が不足している(謝媛・朱国紅、2019、p62)

と指摘している。

劉晋飛は東莞市 D 社区を例として、社区で高齢者ボランティアの育成の効果と困難について指摘した。第 1 に、社区で高齢者ボランティアを育成する効果としては、

1、社区が高齢者ボランティアにとって自分の精神的様相を表す舞台である。2、高齢者ボランティアサービス精神の観念は広く知られているとともに、よく伝えられている。3、社区の資源の整合と利用効率が有効的に機能している（劉晋飛、2018、p3）と指摘した。

第 2 に、社区高齢者ボランティアの育成と困難という面においては

1、高齢者ボランティアのリクルートがうまくいっていない。2、高齢者ボランティアのトレーニングの内容が単一である。3、高齢者ボランティア活動の監督の効果があまりよくない。4、社区高齢者ボランティアを激励する制度がうまくいっていない。5、高齢者ボランティアサービス評価制度が十分でない（同上、p3）と述べた。

楊燧は Y 社区を例として、高齢者ボランティアサービスの現状と問題について、

1、リクルート方式の単一で、新しい成員の参加はない。2、集団協力の能力は強くなって、活動が小さなグループに分散している。3、トレーニングの内容と方式は単一である（楊燧、2019、72）と指摘した。

陳曉東・蔡如雪は瀋陽市 D 社区を例として、社区の高齢者ボランティアの育成の実用策略について以下のように述べた。

1、活動が独立するためには、高齢者ボランティアの組織を推進し、そのサービス範囲を拡充する必要がある。2、参与のためには、高齢者ボランティアたちを目覚めさせ、いわば知行合一になることが必要である。3、尊厳の維持のためには、サービスのための技術を身につけさせて、サービス活動の専門化を推進させる必要がある。4、自己実現のためには、高齢者ボランティアの潜在能力を発見し、サービスの質を維持する必要がある。5、専門家によるケア。専門的なヘルパーが高齢者ボランティアサービス管理制度の作成に協力し、サービスが持続的に効果が出るようにすべきである（陳曉東・蔡如雪、2020、pp58-59）と指摘している。

宋娟・楊超によると、前期高齢者の活動の積極的利用が経済的社会的利益につながることを指摘している。そして具体的には以下の 3 点を指摘した。すなわち「マクロ保障：

高齢者ボランティアサービスの法律と法規の政策体系を構築し、前期高齢者が社区ボランティアサービスに参加するために法律の保障と政策の根拠を提供する」また「中間支持：社区支持ネットワークを構築し、高齢者ボランティアサービスのために良い社区環境を提供する」。「マイクロ激励：高齢者ボランティアサービスの激励機制を構築し、高齢者ボランティアの参加動機を強化する」（宋娟・楊超、2020、p45）である。

劉紅燕は 60 数区の社区を調査した結果として、「職人的(artisan)信念”にもとづいて、高齢者ボランティアを教育すべきであると結論つけた。ところでここでいう職人的信念とは、職人がもっている高度な技術的集中力を指し、中国語としては“工匠精神”という言い方がよく使われている。かれらは具体的には以下の 4 点を指摘している。「ボランティア向けの場所が乏しくて、組織保障が不十分である」。「高齢者向けのトレーニングが乏しくて、ボランティアサービスの技能は足りない」。「激励をする制度が乏しいため、活動持続性が強くない」（劉紅燕、2017、pp83－84）と指摘した。その結論に基づいて以下のような施策を提案している。「“職人の信仰”のある高齢者教育ボランティアを育成する」。「“参加が大事なこと”という高齢者教育価値観を樹立する」。「柔軟性のある高齢者教育パターンを推進する」。「体験型の高齢者教育教學の策略を提唱する」。「協同發展の高齢者サービスの雰囲気を作る」（同上、p84）と述べている。

蘇進は貴州市の 11 の社区を調査して、高齢者ボランティアに対して以下の結論をだした。「高齢者ボランティアは定年後にも積極性を見出し、活動に意義を見出している。具体的には、一生の経験の活動を通じて実現するという考え方にたっている」。「高齢者は退職後社会的地位を失うが、活動を通じての社会地位を再構築する」。「調査地では高齢者のボランティアでスポーツに関心をもっており、それはめずらしい例であるが、高齢者ボランティアたちは自分の人生経験をふまえながら、社区の精神を重視して、活動をおこなっているのが特徴である」。「高齢者問題は介護の対象として理解するだけではなく、高齢者が社会的な貢献をできる兆しがみられた」（蘇進、2014、p150）と指摘している。

徐鈺茹・俞晶晶は南京市で 1 年以上生活した 60 歳および 60 歳以上の高齢者に対して、南京市鼓楼区、南京市栖霞区、南京市玄武区、広場、生活小区で現地高齢者をインタビューして調査を行った。結論としては、「都市高齢者がサービスを提供する願望はサービ

スを受けられる願望より高い。「収入が高くて生活レベルが高い高齢者が高齢者ボランティアからのサービスを受ける願望がもっと低い」「社会参与の高い高齢者は高齢者ボランティアからサービスを受けたい願望が著しく高くなる」（徐鈺茹・兪晶晶、2019、p16）と指摘している。

郭力・黄紫鈺が高齢者ボランティア協会の発展の問題について以下のように述べている。「調査した X 社区高齢者ボランティア協会は民間高齢者ボランティア組織である。村の共産党委員達の認可を得て、村のガバナンスに大きな貢献を与えたが、正式な登録をしていない。法的には、高齢者ボランティア協会の組織性質と管理方法があやふやなので、大部分の高齢者ボランティア協会は国家からの支持と規範的な管理が乏しい面をもつ」、また「ほかの同目的の組織との連絡が乏しい。X 社区高齢者ボランティア協会は高齢者資源の統合、高齢者の福祉の提供においては重要な役割を果たした。しかし組織管理においてはずっと変わらないというわけではい。現時点では時代とともに変わりつつある。外部の類似の組織との連絡を積極的に取りながら資源統合して発展するのは重要な道である」（郭力・黄紫鈺、2019、p178）と述べている。

ただ「X 社区高齢者ボランティアの通常運営には財政支持が必要だと思われる。その理由の一つは、多くの高齢者ボランティア活動を行っており、高齢者の増加しつづける需要に応じて手が回らないほど大変である。もう一つは村では経済面で厳しい環境の高齢者が多い。（中略）資金が少なくて活動を展開するのは難しい」という。なお「村では高齢化率がだんだん高くなり、多くが失独老人（子どもが亡くなった老人）とか、孤寡老人（配偶者がいない、子どもがいない、世話をしてくれる人はいない。さらに 60 歳を超えて労働力もない老人を指す）とか、国が高齢者ボランティアに対する支持の政策はなくて、地元政府資金には限りがある」と（同上、p178）いう状況である。

張菊・陳雪萍・任蔚虹が中国の高齢者ボランティア研究のことについて以下のように指摘している。「中国の香港が高齢者ボランティア活動の運営と管理が成熟し、多くの高齢者が高齢者ボランティア活動に参加するのは生活習慣になりつつある。上海においては“以老助老”という方式の在宅養老の補助パターンが広がりつつある。それはコミュニティの若い健康の高齢者が高年齢の体の弱い高齢者を助けるという意味である」（張菊・陳雪萍・任蔚虹、2017、p41）と指摘している。

5 結語

2節において、高齢者たちがとても積極的にボランティア活動をすることを欲している調査研究を紹介した。

他方、中国の高齢者ボランティア活動について、高齢者がボランティア活動に参加する困難を趙海林が紹介して分析していた。すなわち家庭の支持、激励の長期間の管理、法制度の整備、革新、またボランティアに従事する人へのトレーニングが必要ということであった。王枚・王萍・王磊が高齢者の参加の熱意に影響する理由を述べて、対策としては趙海林と似た指摘をしていた。また異なる見解として、予算の保障と高齢者ボランティアの活動が行われる環境の整備と高齢者個人の価値の見直しが強調されている。また、杜鵬・謝立黎・李亜娟が経済資源、社会資源、家庭資源の少ない弱者グループが、高齢者ボランティアグループから排除されるという問題点を指摘している。

以上の指摘から、中国の高齢者ボランティアの活動が法制度の整備と革新、予算の確保、そして高齢者ボランティアに関わるトレーニングの教育と高齢者自身の個人価値の見直しが必要なのではないかと考えられる。

段世江・王鳳湘が高齢者の参加動機について「自己価値の実現の精神心理性」「共産党に対する恩返し」という鮮明な時代の特徴があると述べている。また、張娜が教育のレベル、子どもと同居するかどうか、コミュニティのスタッフとの交流があるかどうか、家族間での愛着があるかどうかという変数が高齢者のコミュニティに参加する要因であると述べている。さらに、陳茗・林志婉によると、高齢者ボランティア活動に参加することにより、自分の知識と知能が発揮でき、その活動から満足感を得、それが継続の要因に繋がるという指摘がある。

謝立黎によると、中国の高齢者ボランティアの特徴として高年齢となっている傾向があるという。そして「健康状況」と「経済状況」が参加の要因になっていると述べている。他方、曹前は高齢者の参加動機が年齢、収入、学歴などに関連性があると指摘している。同じ参加動機として、段世江・安素霞が「社会価値の実現と人生の生きがいの実現」の大切さを述べている。宋婷・汪丹他が高齢者達がボランティア活動を通して、友

達ができるし、自己価値の実現ができるし、高齢者間での助けが高められるという。

これらつまり中国の高齢者ボランティア活動にかかわる要因では、健康状況、経済状況、家族状況、年齢、学歴と関連があること。中国の国情の原因で高齢者の参加動機に「共産党に対する恩返し」という特別な特徴があることが注目される。

高齢者ボランティア活動の実践の困難と対応施策では、劉晉飛が「募集体系の非能率」、「トレーニング内容の単純」、「ボランティア活動への監督のなし」、「熱意をあげるメカニズムが機能していない」「評価システムが機能していない」という指摘があった。杜鵬・謝立黎・李亜娟が高齢者ボランティアの発展形式の単一、もっと多くの項目の高齢者ボランティア活動を設計するように提案している。沈娟も高齢者ボランティア組織にはもっと時代とともに理念を開放して、有効的な激励体系と保障メカニズムを設けるように述べている。

高齢者ボランティア活動の刷新については、李娟・夏宇凡・楊宝婷が「互助文化」、「積極的な高齢化概念」、「コミュニティのガバナンスの更新」、「多くの資金を集め」という提案をしている。李琳も「積極的な高齢化概念」を提出し、高齢者ボランティアに関する人力資源の管理の必要性を強調した。さらに法律の規範にも注目すべきであるとした。劉素婷・楊国軍・孫彦東が他の研究者と異なって、中国でも「NPOなどの組織にも依託し互助養老社会の公共サービスを改善させる」べきであるという提案を出している。

いま李琳の「積極的な高齢化概念」を紹介したが、李琳にかぎらず、中国では多くの研究者たちが「積極的高齢化」というボランティアの新しい理念を指摘している。鄔滄萍、謝楠によると、「“積極的高齢化”とは、個々の高齢者が継続的に社会、経済、文化、精神と公民事務に参加することを強め、できるだけ高齢者の自主性と独立性を保持し、生命の全体的角度から個体の健康状況を注目する。個体が老年期に入った後でもできるだけ健康と生活の自立を保つ」（鄔滄萍・謝楠、2011、p7）という意味である。

またここでいう「“積極的高齢化”は2002年のマドリードの国際高齢大会で提出したものであった。これは人口高齢化に対応する新しい考え方である。それは健康高齢化という考え方が必要不可欠な条件である。“積極的な高齢化”は健康、保障、および参与を一体とみなして、高齢者の社会参与の必要性と重要性を強調している」（同上、p7）のである。

高齢者施設に関する研究としては、以下のとおりである。

多くの中日の研究者たちが書いた高齢者施設論文では、中国の“未富先老”の高齢化の状態を紹介している。

たとえば、張紀南・韓懿と石田路子がこう指摘している。特に石田路子が強調しているのは「“未富先老”が中国の高齢化の特色」、「農村部と都市部との地域格差と高齢化問題の関わり」ということである。また中国では高齢者介護が家族にとって大きな負担であるから、介護の専門性に基づく環境整備の必要性があると指摘している。孟健軍が、政府の役割だけでなく、「政府と市場との融合の視点から企業や第三セクターの参入を積極的に取り入れている」という新しい視点を導入している。金紅梅が指摘しているのは、中国の公立入所施設では入所している高齢者の自立度が高い、介護が限られているということである。青柳涼子、卜雁も中国の民営施設では経営者の専門性の欠如と介護者の不足ということをおもっている。郭芳が中国の福祉施設の特徴を明らかにしている。すなわち、公立の施設では施設数が不足しており、他方、民営の施設では、費用のこともあり、空きベッドが生じている。このような矛盾がある。長屋栄一・鈴木博志が中国の西安市で調査したところ、福祉施設に住む高齢者は病のある高齢者で、介護が必要な高齢者であって男性が多いという特徴を指摘しているという。それは包敏と徐榮が指摘するように、介護の専門的な人材の不足とかかわっているのかもしれない。李穎は中国高齢者福祉施設でのボランティア特徴について詳しく述べた。「供給と需給の問題、祝日のボランティア活動が多い、流動性が大きい。ボランティアには積極性と定期性は見られない。またボランティアグループには技能トレーニングは足りない。制度の規範と激励対策は不足である」という。

つまり中国の高齢者施設では「公立施設数の不足」「民営施設の空きベッドが生じる」「経営と介護者の専門化の欠如」「福祉施設でのボランティアの制度と激励対策の不足」という問題を指摘している。

すでに述べたことであるが、コミュニティにおける高齢者ボランティアに関する分析が筆者の一番関心のあるところである。謝媛・朱国紅が高齢者ボランティアの現状と困難について「リクルートの方法が足りない」、「集団意識がない」、「激励制度と組織管理の欠如」、「経費不足」の要点が述べていた。また劉晋飛が「リクルートの方法」、「激励

制度」において謝媛・朱国紅と同じ見方を持っている。しかし、「トレーニングの内容の単一」と「評価制度の不十分さ」もそれに加えて述べている。楊煜も同様のことを述べていた。陳曉東・蔡如雪は独特な視点を持って、「高齢者のボランティア活動の拡充の必要性」、「高齢者ボランティア活動の専門化」、そして「高齢者ボランティアの潜在能力の向上とサービスの質を高める」という策略を提出している。宋娟・楊超も「マクロの法律の保障とミクロの激励機制的構築」を指摘している。

中国では「職人的 (artisan) 信念」という概念がいろんな研究分野で流行っていることもあって、劉紅燕が「“職人の信仰”のある高齢者教育ボランティアを育成する」という施策を提案している。蘇進が他の研究者と違って、スポーツ関係の高齢者ボランティアに注目を集めている。高齢者が自分の人生経験を生かして貢献できるからであるという指摘である。

徐鈺茹・俞晶晶が「収入が高くて生活レベルが高い高齢者はサービスを受ける願望が低い」「社会参与の高い高齢者は高齢者ボランティアからサービスを受けたい願望が著しく高くなる」という発見をしている。郭力・黄紫鈺が高齢者ボランティア団体がもっと外部の組織との連絡が必要で、資金の不足が一番厳しい問題を指摘している。張菊・陳雪萍・任蔚虹が中国の香港の高齢者ボランティアの発展の成熟さを指摘して、上海の“以老助老”の形式がもっと広がりつつあるという助言をしている。

すなわち、多くの中日研究者たちは中国の高齢化問題の深刻さを意識しながら、「未富先老」「地域格差」「経営と介護者の専門化の欠如」という問題を指摘している。また中国の高齢者ボランティアの研究をめぐって、中国の研究者たちは多くの地域では「積極的高齢化」を迎えるために、高齢者のボランティア参加が不可欠なことを強く指摘している。なお、現在中国の高齢者ボランティアの特徴として、「法的整備がまだ欠如」「援助の資金がたりない」「激励制度の欠如」そして「リクルートとトレーニングの単一」「高齢者ボランティア活動の専門化の不足」が挙げられて述べられる。

すでに見た高齢者ボランティアのボランティア活動の積極性を勘案すると、高齢者ボランティアのコミュニティへの参加が、高齢者施設の貢献とはまた異なった貢献を期待できる。コミュニティにおける高齢者ボランティアの活動は中国の深刻な高齢者問題の解決に一定の意義があると考えられる。その意味からも、すでに見てきたように、研究

者たちが指摘している問題点をひとつひとつ解決することを通じて、コミュニティにおける高齢者ボランティアの活躍を期待することになる。

【参考文献】：(アルファベットの順序)

日本語文献：

青柳涼子・ト雁「中国の高齢者施設の現状に関する類型別考察—中国 3 都市 8 施設における聞き取り調査から」『淑徳大学研究紀要』2016、p61

包敏「中国における高齢者介護サービスの現状と今後—“国務院弁公庁による高齢者介護サービスの発展推進に関する意見”を中心に」、『東京医科歯科大学教養部研究紀要』、50号、2020年 p26

尹豪(若林敬子編著・筒井紀美訳)「中国 人口問題のいま—中国人研究者の視点から」『アジア経済』、48巻6号、2007年 p103

石田路子「中国における高齢者介護サービスの現状と課題」『城西国際大学紀要』、2013年 pp5-24

徐栄「中国の高齢者福祉入所施設の在り方に関する研究」『評論・社会科学』、2010年 p123

胡宝奇・大和三重「中国都市部における高齢者の在宅サービス利用意向及びその関連要因：“社区”特性と社会的ネットワークを中心に」『Human Welfare』、9巻1号、2017年 p206

金紅梅「中国都市部における公立高齢者入所施設の自費利用者の実態とその支援」『福祉のまちづくり研究』、2017年 p11

郭芳「中国高齢者福祉施設の不足と制約—日本との比較を通して」『21世紀東アジア社会学』、2014年 p154

孟健軍「経済社会構造転換に伴う高齢化政策に関する—考察—中国広東省 F 市 J 区の

高齢者福祉施設の現地調査に基づく」『RIETI Discussion Paper Series』、2019年 p18

張紀南・韓懿 「中国における高齢者福祉の現状および問題点に関する分析」『城西現代政策研究』、2019年 p103

長屋栄一・鈴木博志「中国西安市における高齢者福祉施設の入所意識、改善要望の地域別分析」『福祉のまちづくり研究』、18巻3号、2016年 pp22-23

張建「中国における介護保険制度の試行現状と課題」『岡山大学経済学会雑誌』、2018年 p118

中国語文献：

段世江・安素霞 「志願者活動は城市老年人社会参与の主渠道—兼論老年志願者活動開展の必要性」『河北大学学报哲学社会科学版』、36巻3号、2011年 pp40-41

段世江・王鳳湘 「中国老年志願者参与動機の質性分析」『河北大学学报（哲学社会科学版）』、35巻2号、2010年 pp121-125

韓雯「老年志願服務促進老年人繼續社会化研究—基于上海市徐汇区老年教育志願者的調研」『職教論壇』、2018年 p88

馮美琪「我国社区養老志願者隊伍建設研究」『現代商業』、2018年 p140

郭力・黄紫鈺「主体性視角下老年志願者協會参与村庄治理研究—以安徽省鎮X社区為例」『湖北農業科学』、2019年 p178

徐鈺茹・俞晶晶「城市老人志願養老服務参与意願研究」『法制博覽』、2019年 p16

李芹「城市社区老年志願服務研究—以济南為例」『社会科学』、6号、2010年 pp73-79

李広賢「人口老齡化背景下城市老年志願者活動研究—以福建省泉州市為例」『牡丹江大学学报』、24巻1号、2015年 pp84-85

李娟・夏宇凡・楊宝婷「以互助文化為引領創新老年人参与社区志願服務」『老齡科学研究』、6巻9号、2018年 pp50-54

李琳「發揮志願者作用 参与創新社会管理」『人力資源管理』、2012年 pp241-242

李穎「绍兴市養老機構志願服務的現状、問題、对策」『绍兴文理学院学报』、35巻10号、2015年 pp59-61

劉晉飛「培育老年社區志願者的實踐困境與應對之策」『東莞理工學院學報』、25 卷 4 号、2018 年 pp1-4

劉素婷、楊國軍、孫彥東「“老幫老”互助養老長效機制建設」『福建江夏學院學報』、2016 年 pp74-77

劉紅燕「以志願服務推進老年教育發展的路徑探析」『當代繼續教育』、35 卷 197 号、2017 年 pp83-84

長田洋司「現代中國都市基礎構造の變化と社會的ネットワーク形成」『日中社會學研究』16 号、2008 年 p128

王枚·王萍·王磊「開展社區老年志願者活動的理論與實踐研究」、『理論導報』、2009 年 pp37-38

謝立黎「中國城市老年人社區志願服務參與現狀與影響因素研究」『人口與發展』、23 卷 1 号、2017 年 pp63-64

謝媛·朱國紅「培育社區老年志願服務的探索—以成都市 D 社區為例」『社會與公益』、8 号、2019 年 p62

鄒滄萍·謝楠「關與中國人口老齡化的理論思考」『北京社會科學』、2011 年 p7

曹前「上海市老年人參與志願者活動現狀及趨勢探析」『湖州職業技術學院學報』、2013 年 pp46-48

沈娟「老年志願服務組織管理的長效機制探究」『中外企業家』、2014 年 pp224-225

宋娟·楊超「城市低齡老人參與社區志願服務的激勵對策研究」『社會與公益』、2020 年 p45

宋婷·汪丹他「安徽 343 名中老年人志願者效能動機現狀調查」『護理學報』24 卷 11 号、2017 年 pp38-40

蘇進「貴陽市社區老年志願者公共體育服務現狀研究」『社會體育學』、2014 年 p150

陳曉東·蔡如雪「策略建構：積極老齡化視角下社區老年志願者的培育—基於對瀋陽市 D 社區的實證研究」『萍鄉學院學報』2020 年 pp58-59

陳茗·林志婉「老年志願者活動的理論思考和實證分析」『人口學刊』、4 号、2003 年 pp27-28

杜鵬·謝立黎·李垂娟「如何擴大老年志願服務—基於北京朝外街道的實證研究」『人口與發展』、21 卷 1 号、2015 年 pp90-94

張娜「城市社区老年人志願服務参与意願影響因素分析－以开封市為例」『西北人口』、36卷5号、2015年 pp91－94

張菊・陳雪萍・任蔚虹「老年志願服務總述」『現代經濟信息』、2017年

赵海林「积极老齡化背景下的老年人参与志願服務建設」、『成人教育』、7号、2014年 p86

楊燿「社区老年志願服務問題探究－以 Y 社区為例」『社会与公益』2020年 p72

【注】

⁽¹⁾ コミュニティについて改めて言及しておく。中国ではコミュニティのことを社区と表現している。胡宝奇、大和三重によると、「社区は“コミュニティ”の訳語である。2000年、中国政府は“全国で都市社区建設を推進することに関する民政部の意見”において、社区を“一定地域の範囲内に居住する人々によって構成される社会生活の共同体”と定義した」（胡宝奇、大和三重、2017、p206）という。ただ、日本語のコミュニティと社区は微妙に概念が異なるので、一般的にはコミュニティという用語を以下では使用するが、事例に近い指摘や、引用においてはしばしば社区をつかう。

⁽²⁾ この八つの方面は以下のような方面である。青少年と児童に対して社会主義、愛国主義、集体主義と刻苦奮闘などの優良伝統教育を行う。文化と科学知識を伝える。問い合わせサービスを提供する。法律を守りながら科学技術開発と応用に参加する。法律を守りながら形成と生産活動に従事する。ボランティアサービスに参加して社会公益事業を起こす。社会治安の維持に参加する。民間のトラブルを協力して調停させる。他の社会活動に参加する、である（全国人民代表大会ホームページ、「中華人民共和国老年人權益保障法」、2019年）。

⁽³⁾ 銀齡行動という言葉は中国では高齡者達が行動するという意味である。

⁽⁴⁾ http://www.gov.cn/jrzq/2011-11/29/content_2006151.htm 中華人民共和国中央人民政府『2011年参加“銀齡行動”老年志願者達到70万人』閲覧日2022年2月11日

⁽⁵⁾ 長田洋司によると、「“和諧社会”とは調和のとれた社会と訳される。2004年9月19日の中国共産党第十六期中央委員会第4回全体会議において、“社会主義和諧社会を構築する”という概念が正式に提起される」（長田洋司、2008、p128）という。

⁽⁶⁾ 高齡者が集中的に居住し、食事、衛生管理、文化娯楽、医療保健サービス体系がすべて揃っている総合管理の住宅パターンの高齡者マンション。

第五章

中国の社区における高齢者ボランティア活動 ——積極的高齢化の課題に焦点をしばって——

1 問題関心

前章の中国を対象とした先行研究に基づくと、その指摘のうち、注目すべきことのひとつは「積極的高齢化」ではないだろうか。すでにみたようにここでいう「積極的高齢化」とは、鄔滄萍・謝楠によると、高齢者の自主性と独立性を保持しつつ、健康であることをめざすものである。この積極的高齢化がどの程度、現場で実現されているかをあきらかにすることを本章の課題としたい。

それとこの積極的高齢化とかかわって、前章で高齢者自身の個人的価値の見直しの必要性という指摘があったが、自主性と独立性を担保するには、自分自身が生きていて価値があるかどうかを自己確認する必要がある。したがって、具体的には、高齢者たちがボランティア活動に参加することによって、どのように自分の生きがいを確立していったかも分析することにしたい。すなわち生きがいに支えられて積極的高齢化が実現できているのだと想定する。

本章は中国のコミュニティである社区を対象にする。段世江は組織化された中国の高齢者ボランティアはつぎの4つの型、すなわち、協会型と協助型、専項型、参与型⁽¹⁾があり、そのうち社区に強くかかわるのは協助型と参与型であると指摘した(段世江、2012、pp3120-3121)。

したがって、分析のつづきとして、最初に協助型をとりあげ、そのつぎに参与型のボランティア活動をとりあげることにする。協助型の方は高齢者の自発による組織化がみられるものである。具体的には協助型は社区居民委員会の支持の下で成立して、社区の仕事を協力することを目標としたパターンである。

2 “協助型”の事例



まず、筆者が2019年に調査した中国の“協助型”の事例を紹介する。筆者は2019年8月に竜湖佳苑社区を対象として、フィールドワークの調査を行った。高齢者ボランティアに対するインタビューと、高齢者ボランティアの記録した文章の両方を参考にして、以下に事例を記述する。

「竜湖佳苑社区」は2019年2月22日に成立したばかりの社区である。この竜湖佳苑社区は中国南通市崇川区天生港鎮街道に属する社区である。その高齢者ボランティアであるAさんは今年で61歳である。社区においては「調解員」（社区に住んでいる住民の間で何かトラブルがあったら、仲人として全力で解消する人）というボランティアをしている。この役職は社区から毎月電話代として880元（13000円）もらえる。



図1 Aさんがボランティアの仕事の現場 筆者撮影

2019年9月19日

彼女は2008年に定年退職した。定年前はある工場で品質管理検査員として働いていた。社区のリーダーから勧められて調解員となった。その理由は、たまたま地元の住民の家々の状況をよく知っていたからであるという。以下に調解員としての仕事

の事例の紹介をする。

事例(1) ある夫婦が住んでいた家屋を取り壊すときに、同じ場所に政府が高層のマンションを建てるが、その夫婦は居住権と子どもがその両親を扶養すべきであるという契約が締結された。2019年6月のことである。締結にもかかわらず、その子どもである男性は両親に対して息子がやるべき義務をしなかった。この男性の妹が来て、そのことをすごく怒った。

調解員であるAさんはその妹から話を聞く。そして妹の話が事実であるかどうか確認して、それから妹とそのお兄さんの夫婦を呼び出して両親に対してどう対応すべきか、一家の兄と妹なので、両親のために何でも気楽に話し合っただけで対処しなければならないと忠告をした。その後、Aさんの理解によると、お兄さんと妹、そしてその両親が一緒に座りながら仲良く話をしていたという。その後、お兄さんが両親の世話をよくしているそうだ。

事例(2) 2019年8月13日のこと。ある住民の報告によると、その住民の団地の7階の住民が夜にゴミをベランダに捨てたまま、その後ゴミが下のベランダにかけてあった服を汚してしまった。それは「本当によくない品行である」とその住民がAさんに報告した。それを受けてAさんは住民グループのチャットで「同じ団地に住んでいて、毎日会える近隣住民同士なので、お互いの立場に立って、考えた方がよい。自分の便利のことばかり考えて、周りの住民に迷惑をかけてしまっている。衛生を守るためのマナーが必要である。お互いにいたわりながら理解しあうべきである。すなわち「和諧社区」⁽²⁾を構築すべきである」とその事情を批判し、呼びかけた。

☆ これらの事例から分かることは、以下のようなことだろう。「調解員」であるAさんは幸せな家族をもっている。すなわち主人と娘さんがいる。家族から支えられながら社区でこのボランティアをしている。そのボランティアの仕事は社区の中のいろいろな住民間でトラブルを解決するために、一定の役割を果たしている。Aさんによると、「本当に毎日がたいへんですが、目が覚めて、いろいろな住民が自分を待っている感じがします。家に帰ったときにはいつも、たいへん疲れを感じます。しかし、すこしでも社区の安全・安心のために、住民を守りきれたらとても嬉しい感じがします」

と言っていた。

以上の文章からつぎのようにまとめられる。すなわち、A さんがしている調解員というボランティアの仕事では、そのほとんど全てを彼女が自分一人で考え、調整をしている。住民の間では A さんに対しての信頼感が高い。その社区でなにか住民の間でトラブルが起これば、住民が一番先に思い出すのは A さんである。A さんによると、もし私がボランティアをしないとすれば、ただ家でご飯を作ったり家族の世話をする老後生活となってしまう。けれども、このボランティアをしていると、毎日、やる気のある仕事が自分を待っている実感がある。自分が社区に住んでいる住民と付き合っているうちに、あっという間に毎日がすぎるのだという。このような住民たちの生活上の矛盾を自分なりに考えぬいて解決をしていくことに彼女は生きがいを感じているようだ。

事例 (3) 次に紹介するのは B さんである。B さんは 55 歳で定年退職をして、この社区が成立して以来、ボランティアをずっとやっている。若いときに、体の体調があまりよくないので、婦人病の手術を受けたことがある。ここでのボランティアの仕事としては、社区での配偶者のいない高齢者、それと子どものいない高齢者、生活に障害がある高齢者のために昼の助餐サービス⁽³⁾をしている。B さんが主に食事を作る役をしている。「定年をしてから何をするのか、迷っていた。もしここでのボランティアをしないと、家では逆に病気にかかりやすい」と彼女はいう。また「ここで、社区のスタッフの手伝いもしていて、多くの高齢者を助けることができ、自分も嬉しい。最近では前より健康になった。主人も安心している」と言ってくれる。

☆ この事例から言えることはつぎのようなことではないだろうか。高齢者の B さんはもともと健康状態があまりよくなかったが、ボランティアを通して体調がよくなったと述べている。彼女はボランティアをしているうちに、定年をしてからの自分の価値を見直した。自分より年取った高齢者のためにお昼ご飯を作って、高齢者たちに愛情のあふれたご飯を提供して、一人暮らしの高齢者に便宜を与えた。この助餐サービスは小さい話だが、助餐サービスを受けている高齢者にとって、この食事は健康の維持の源である。とくに障害のある高齢者にとっては自分で自炊ができないので、とて

も大事なサービスである。しかも B さんご自身が自覚しているように、B さんは以前は体調はよくなかったが、ボランティアをしていて健康になったという。ここでのボランティア活動を通して、自分が満足し、生きがいのある生活を送っている。

事例(4)個人ではなくて、この地域のボランティアのグループの活動を取りあげる。そのグループは全部で 22 人によって構成されている。高齢者が突然手助けを必要とする場合がある。たとえば電灯の交換とか、買い物とかなどである。それを手伝うとかれらはとても助かる。

ボランティアのグループの 3 人に対してインタビューをした。

まず C さんと D さんの夫婦である。この夫婦は共に定年退職した。二人は一生仲良く暮らしてきた。定年となったあと、ただたんに息子とお嫁さんと孫のために、ご飯を作るだけではしょうがないと感じた。そこでなにか有意義なことを探したという。そこで住んでいる社区に登録をしてボランティアをすることになった。「いつか私たちも年を取るよ。現在まだ歩けるし、体も丈夫だ。そこで高齢者のために助けたい」と主人が言った。「我が家のお嫁さんと息子がすごく親孝行をしてくれているので、家族内の事柄であまり心配したことがない。毎日に余裕があるので、なにか社区でやることにした」と奥さんが言った。

次に F さんに対してインタビューをした。F さんが言ったのは「娘の一家が蘇州にいるので、孫の世話をしなくてもいい。主人が最近病院を定年退職した。それで家のご飯づくりは全部を彼に任せた。そのため、私がなにができるかと、ときどき考えていた。一つは体を鍛えることである。もう一つとして友たちから勧められてここでのボランティアをしはじめた。だれもだんだん年を取る。今私たちはまだ若いから、自分の力で回りの私たちより年齢の高い人を助けるのがいい」と考えたそうである。

すなわち、この事例をまとめると、彼らは幸せな家族を持っていて、家でやることはない。「なにか有意義なことを」を求めて助けをもとめる高齢者への応援とサポートを積極的にすることにより、第二の人生のやりがいを掘り出すことになると思った。また F さんが言っているように「体を鍛える」という健康への関心が強い。健康を維持することで、積極的高齢化に貢献できるとかれらは考えていると言えよう。

以下は直接的な聞き取りではなくて、次にインターネットで調べた中国の社区においての高齢者ボランティアに関する事例である。

事例(5) 中国湖南省長沙市湘雅路街道文昌閣社区に住んでいる劉光華は、ネット監督ボランティアをしている。未成年者がネットカフェを利用することがあるかどうか、タバコを吸う行為があるかどうか確認するというボランティア活動をしている。「ネットカフェ監督員という仕事は高齢者の暇な生活を充実させるとともに、社区のネット文化環境を浄化させた」(李尢新華社、中華人民共和国中央人民政府ホームページ)という。

☆ この事例から言えることは以下のようなことだろう。ネットカフェ監督員という高齢者ボランティア活動は、ネットカフェというとても現代的なものなので、高齢者との組み合わせとして、興味深いボランティア活動の形式である。高齢者ボランティアを通して、未成年者をネットカフェに入らせないように未成年者を、よい成長環境を囲まれるように一定の意義を果たしたと考えられる。高齢者ボランティアが監督というボランティア活動を通して社区の安心安全な環境が作れる役割を果たしている。定年した高齢者がまた社会に対して一定の役割を果たすことができ生きていきを与えている。

事例(6) 今回の新型コロナの背景において社区での高齢者ボランティアがたいへん大きな役目を果たした。寧夏回族自治区西夏区西花園路街道社区での耿さんは78歳で、住民の情報の登録というボランティア活動をしている。はじめの頃は社区での共産党支部書記である郭さんが高齢者の免疫力の低さを心配して、新型コロナの特別な時期には高齢者ボランティア活動をさせないほうがいいと考えていた。しかし、耿さんのような高齢者ボランティアはその特別な時期にこそ何かできることをやりたいと思った。そこでたとえば2020年2月1日から社区での住民の出入り情報を記録したり、消毒等をしたりすることをした。この社区で同じボランティア活動をやっていた65歳の周さんが言うには「疲れはぜんぜん感じないです。年をとってもまだ社会に役に立つことができるが嬉しい」(郝楠・楊夢、2020)。

☆ この事例から見えるのは高齢者ボランティアが喜びをもって自主性を実現していることである。新型コロナは本当に人類にとっての災難である。とくに免疫力の弱い高齢者はかかりやすいし、死亡率の高い病気である。しかし、高齢者ボランティアが積極的に提案を出して、この特別な時期に何かできることはやりたいという。

事例 (7) 遼寧省瀋陽市大東区洮昌街道北海社区での高齢者ボランティアの事例である。このボランティアの中での最高年齢は78歳である。張さんはそれに次ぐ77歳で、そのボランティアグループの1人である。ある日、社区において違法なパンフレットを配った女性を発見したので、張さんがその人を捕まえて派出所(警察所みたいな所)へ連れていった。また、社区の水道管が老化して水が逆流したことがあった。社区の中が汚い水でいっぱいになった。張さんが社区の閻書記と一緒に地元政府にその問題を報告して解決に取り掛かった。もう一人の高齢者ボランティアの曲さんがボランティアとして、気づくのは道の凸凹があるかどうか、ゴミ捨ての問題、住民間でのトラブルの解決などである。曲さんが気づいたのは北海社区の道では、街灯が付いていないので、2008年のある夜、女性がお金を奪われた事件があった。曲さんが積極的に閻書記と政府の関係部門と相談をして街灯をつける費用を捻出した。そのことにより北海社区ではどこでも街灯がついていることになった。その評判で“民生おばあちゃん”の美名がつけられた。“民生おばあちゃん”の努力によって、社区においての不良現象が減少して、近所間での関係が仲良しになった」(呂良徳、2014)という。

☆ 張さんと曲さんが行ったボランティア活動はすべて自身で気づいた課題であった。自主的ではあるが、もっと個人の内発的な動機があってボランティア活動をしたことに注目したい。そして「民生おばあちゃん」という美名も周りが名づけたものであり、それは高齢者ボランティアの社会価値の体現ではないかと思われる。

事例 (8) 湖北省宜昌市樵湖社区にも高齢者ボランティアグループがある。そのグループは2014年に設立された。そのボランティアの名前は“平安義務巡邏隊”である。夜7時から9時まで順番で回ったり、防火、盗難防止活動をする。また、高齢者ボランティアたちが定期的にゴミを清掃するとともに、道路の清潔の保持を呼び掛けるとい

う。また社区の中のトラブルを解決する。たとえば、ある住民がペットを公共広場で飼っていた。その犬はとても大きくて、怖いのである。多くの住民がペットの飼い主に、ペットを自宅へ連れて飼うべきだと勧めたが、この飼い主が聴かないのである。社区の高齢者ボランティアがそのペットのことを知ったので、何度も飼い主と話し合いをした。その結果、飼い主は要望を聞き入れた。一週間後、公共広場に犬のいない環境が戻った。

「あなた、私、彼がお互いに奉献すれば、千万住宅にサービスする」というスローガンを持った高齢者ボランティアが熱意をもつことで社区がもっと穏やかになる」と樵湖社区の蔣主任が感想を述べている。「年を取ったのですが、防火、盗難防止などの小さなことがまだできるから、社区環境の改善に力を入れた」のだと高齢者ボランティアの魏さんは言っていた（羅娜・方琪・夏玉梅、2018）。

☆ 彼ら自身が考えているのは「年をとっても、防火、盗難防止などの小さなことができる」ということである。他方、社区の主任がいうには「熱心な高齢者の奉献のおかげで、社区がとても和やかになる」ということである。それは高齢者への最高の賞賛ともいえる。高齢者ボランティアの価値が社会的に認められる象徴ではないだろうか。高齢者ボランティアが自分の知恵を生かしながら解決をしている。この事例でもしろういのは、高齢者の活動だからこそ、社区が和やかになるという指摘だろう。

事例（9）江蘇省南通市徳民社区老来楽サービスセンターは2018年からスタートした。38人の“小老人（年齢の若い老人）”が46人の老人病にかかった高齢者に対して、“黄手環”という手助けのボランティアをしている。その高齢者ボランティアには企業退職者がもっとも多い。それらのなかには、教師退職、医者退職、さらに公務員幹部退職もいる。手助けの内容は共同に困難を感じる問題などである。たとえば、高齢者の共通課題としての認知症予防体操などである。もし個人的な問題なら、“小老人”が“老老人（年齢の高い老人）”のお宅を訪問して解決を試みる。たとえば、衛生清掃、心理障害、診療外出などのためである。

教師を退職した80代の黄さんは長男が精神障害患者で、次男も急病で突然なくなってしまった。そのため長年まったく元気がなかった。“小老人”の巖さんは医者を選年

退職した人で、“医学的見地から気分と健康とのかかわり”についての説明をしながら黄さんを導いている。

88歳の高さんは御主人が亡くなってから、認知症の初期症状があらわれた。高齢者ボランティアの王さんは「水と電気を忘れないで」「ドアと窓を忘れないで」「ガスを忘れないで」などの札を作って高さんの記憶力を喚起する。「いくら困難があっても、解決の方法を考える」と高齢者ボランティアの顧さんは言っていた。また「手助けをすることでいいことをした感じがある」と、ある高齢者ボランティアが言っていた。

(李錦誠、2020)

☆ このような事例をみると、“小老人”が“老老人”に手助けをすることは簡単に思えるが、実際は手助けの内容は多種多様であり、“小老人”が“老老人”の現実の困難に応じてそれぞれ工夫をする必要がある。ただ老老人の困ったことに対して小老人が全力で助けたいという気持ちが強いようである。その小老人の中で医者のような専門的な知識を持っている人材いるので、具体的な手助けだけでなく、一定の心理的安定感を与え、また健康知識をも与えることができている。

ここからふたつの積極的高齢化の事象が観察される。ひとつがすでになんども指摘されていることだけれども、高齢者が高齢者に対してとても役にたつ活動をしていいようことの満足感である。たとえば、「功績と徳行のよいことをした」というように、定年退職しても高齢者ボランティアという活動を通してまだ社会に役立つことができ、自分も生きがいの価値も感じるというような例である。ただ、ここで小老人が老老人に対してと表現されているように、いわゆる前期高齢者が後期高齢者に対して、活動をしていることに注目しておきたい。

ふたつめの積極的理由として、活動者側の専門性がみられることである。活動者側には教師退職、医者退職、さらに公務員幹部退職などがいるのである。たとえば医療に詳しい小老人”の巖さんがその例である。

3 “参与型”の事例

参与型は協助型と異なり、その地区のリーダーが中心になって活動をするのが特徴

である。協助型の方は、すでに事例で見たように、高齢者の個々人がその自発性によって行動するところからはじまるものである。参与型は高齢者がボランティア活動に参加して中国でいうところの「和諧社区の建設と社会発展」に寄与するもので、組織的なものである。

事例（1）江蘇省靖江市斜橋鎮阜康社区では、多くの高齢者たちは自分たちの子どもがそばにいない環境にある。そのため社区のリーダーの徐さんのアイデアで“以老助老”という名前を付けてボランティアグループをはじめた。そのボランティアでは多くの教師の退職者や村の幹部等が参加する。劉さんはその高齢者ボランティアの1人である。彼はもともと村の幹部であった。彼がやったボランティア活動は心理カウンセリングみたいな活動である。「私はボランティアが楽しいし、そのような雰囲気をつくる必要がある。定年退職しても誰もがまだ社会で自分の力を発揮できる。年を取れば、なにごとにも敏感となり神経質になりやすく、多くの高齢者が相談にやってくる」と劉さんは述べている。（葉麗莉、2019）

☆ この事例から見ると、この社区リーダーが気づいたのは定年退職した高齢者も大切なボランティアのメンバーであることである。多くの高齢者はもともと仕事の関係で社区の住民の事情をよく知っている。そのため定年退職した高齢者にボランティアのグループに参加してもらうことになる。参加した高齢者ボランティアたちは自分のできることを精一杯やっている。たとえば、ボランティアの劉さんはもともと村の幹部なので、多くの住民をよく知っている。そこで劉さんが相談のカウンセリングになった。「定年退職してもまだ社会で自分の力を発揮できる」という。この事例はいままで紹介した事例と異ならないが、リーダーが活動を意図的に「楽しくする」と考えているところがあり、それが、後の事例でも出てくるが、参与型のひとつの特色となっている。たしかに仲間と組織的な活動をすると、ボランティア活動に楽しい側面がともなう。現実には楽しくない側面も多々あるため、リーダーが意図的に楽しい環境をつくることになる。意図的に楽しくすることで積極性を保証しているのである。

事例（2）山東省青島市黄海路社区には芸術団がある。芸術団に参加しているのは多くは高齢者ボランティアである。彼らの平均年齢はとても高く、80歳である。それぞれ

が芸術の技能を持っている。孫さんは撮影が好きで、カメラを使って地域の多くの活動の撮影をしている。「撮影が好きで、それで撮影の技を発揮して、住民にサービスを提供して大きな価値を発揮できる」と孫さんが言っていた。ときどき大型の活動の場合、撮影の好きな友達を呼ぶ。また、「年を取ればとるほど、そのボランティアの活動の中で若さを感じている」と太鼓のグループに参加した 82 歳の劉文信が言った。(半島都市報、2013 年)

☆ この事例は、すでに指摘した事実と変わるところがないが、ただ、とても高い高齢者の事例であること、またそれが芸術活動であるので、事例として示しておきたい。

事例(3)安徽省銀西社区には“五老”ボランティア項目が 2019 年 3 月に成立している。ボランティア活動によく参加するのは 22 人である。平均年齢は 72 歳である。

住民間でトラブルが起こるときや、家族成員間での関係が緊張するとき、配偶者と子どものいない高齢者が困難にあったときなどに、“五老”ボランティア項目に登録した高齢者ボランティアが登場する。

たとえば、戴という名のおばあさんが手術を受けて体が動けなくなる。ボランティアの王さんがその状況を知った後で、毎日訪れて、生活においても心の支えにおいても細かく世話をしあげた。また、道路で車両がうまく停まっていない場合、彼らが説得をする。さらに、多くの住民が衛生を大切にする目的の都市を作っていこうとする場合に、彼らが積極的に PR の宣伝のパンフレットを作ったりする。たとえば「張さん、これは衛生都市の宣伝のパンフレットです。よく読んでね。衛生都市にするのは市の重要な任務です。自分のせいで行政からの点数を引かれるのは絶対許せないからね」とボランティアの胡さんがパンフレットを渡ししながら説明をしたりしている(李棟、2020)。

また、多くの子どもたちが放課後に、両親は仕事がまだ終わっていないこの時間に、子どもの健康成長を守るために、工夫して“四時間の小レッスン”というオリジナルな方式で子どもの勉強と安全守りに力を入れている。

☆ この事例でも、高齢者ボランティアが社区において住民のために、「高齢者福祉」、

「環境保全」、「世代交流」などの分野で積極的に活躍していることが分かる。大切なことは定年退職しても多くのアイデアが自主的に、子どもの安全と健康成長のために、いろいろ活動していることである。遊びと勉強の手伝いをしているうちに、高齢者ボランティアたちが結果的に自身の知恵を子どもに伝えている。

事例（4）雲南省麗江市古城区大研街道新義社區の活動は、平均年齢が62歳の高齢者ボランティアグループである。彼らは定年退職後、麗江の古城文化の伝承と保護に力を入れている。古城には多くの民間技芸と民族祭の文化的資源がある。だが、多くの地元民が引っ越をしたので、民芸のかなりが消滅する傾向にある。

そのため祝日には、社區の高齢者ボランティアたちが自分たち独自の力で社區における伝統イベントや祭りなどを行っている。たとえば、中秋節になると、月餅を一緒に作ったりするとか。元宵節になると、子どもの目の前で提灯を作るとかである。

「生きているうちに、どうにかしていくつかの意義と価値のあることをやりとげたい。民族と民間の文化を伝承し、故郷と子孫、後代に宝物となる社会財産を残したい」と高齢者ボランティアのリーダーである和さんが言っている（陳佳飛、2019）。

また、新義社區の高齢者ボランティアたちが定期的にナシ族の言葉（納西母語）を伝える講座を開いたり、歌踊り、伝統飲食などのトレーニング講座などを開いている。

☆ この事例から見ると、かれらが地元文化の保持という文化に注目しているところが、いままでの事例と異なるところである。文化は価値の表現ともいえるものであり、それが自分たちの価値観と共鳴している事実を指摘しておきたい。

事例（5）68歳の劉さんは湖南省雨湖区雲塘街道汽車駅社區に住んでいる。この社區には社區ボランティアがある。その活動があると、彼が必ず一番先に積極的に申し込む。たとえば、文明和諧の創建と社區の清掃のとき、彼は参加をして、“疲れた”というような消極的な言葉はいっさい吐かないという。

この社區にレストランがある。そのレストランのガス換気扇から油が流れていた。多くの住民がそのことについて社區にクレームを言った。

ボランティアの劉さんと社區のリーダーが何回もそのレストランにガス換気扇の交

換と店を清潔にする要請を出したが、レストラン側の反応はなかった。そのときボランティアの劉さんが自分自身でガス換気扇を掃除した。そのことにレストランの店長は感動した。その後はそのレストランはガス換気扇を注意しながら使うようになった。そして定期的に清潔の処理をやるようになった。

「自分は気力があるかぎり、ボランティア活動を続けていく。社区はいわば大きな大家族なので、自分が全力でその大家族のために何かやるのはあたりまえのことだ。定年になっても、まだ有意義なことがやれるなんて、自分がやっていることはまだ価値のあるものだ、これから続けていく」という（譚麗、趙金偉、2018）。

☆ この発言や行為から言えることは以下のことではないだろうか。劉さんが自分のやったことはレストランの店長を感動させた。店長に伝えたのは経営してお金を儲けながらも周りの住民のために生活環境にきれいに保つのも大切ということである。彼は自分のやることによって、意図せずに周りの住民の意識を変えた。

彼の積極性とはその基礎に大家族（＝社区）という強い仲間意識がある。その仲間が幸せになるために、レストランを清潔にするなどの積極的な行為を行ったのである。したがって、彼の視野はレストランという個別の店だけに向けられているのではなくて、社区全体の構成員に向けられていることに特徴があろう。

事例（6）寧夏興慶区大新鎮燕翔園社区には20名ぐらいからなる高齢者社区ボランティアがある。彼らはたくさんの道具を持っていて午前中から社区の中を回ったりしている。道具にはハサミのようなよく使われる道具だけでなく、自転車修理用の専門道具と家電製品修理用の専門道具、そして血圧測定器なども揃えられている。この高齢者ボランティアグループは社区の人のために無料サービスをする。

たとえば後期高齢者のために電線の修理とか、環境の緑化の手入れとか、後期高齢者のための散髪とか、いろいろやる。「年をとった。家にいても、あまりやることもなくて、社区でできることをやって、忙しくなって、逆に健康になって元気になってくる」という（肖夢旗、2020）。

☆ この事例での特徴は、家にこもっていると非健康になりがちだが、このように活

動をすると、活動そのものや彼らから健康をもらえると意識していることである。また、他のボランティアに比べて、かれらは多くの道具をもっているし、技術ももっている。それが積極性を導いているところがある。

事例 (7) 北京市石佛宮西里社区に銀齡助老理髮服務隊がある。この隊と名づけられている団体は毎月 22 日に社区の大広場で高齢者のために理髮をする。また、毎月 17 日に足の不自由の高齢者のためにサービスとして自宅訪問をする。

2015 年にそのボランティアグループのリーダーの郝さんが社区に申請して、理髮の技能を持っている高齢者を集め、銀齡助老理髮隊を形成した。なぜ郝さんは高齢者たちのために理髮ボランティアサービスをスタートさせたかということ、ある日 80 歳ぐらゐの一人の高齢者が杖をつきながら歩いているのを見て、とてもつらい感じを受けた。その高齢者に、何をしに行くか聞いたところ。その高齢者は理髮に行くか答えた。「彼のつらい様子を見て、私の心を痛んだ。自分は理髮ができるので、それらの体の不自由な人を助けることができる。そのため社区に申請して、自分の理髮の技を生かして、多くの理髮の技を持っている高齢者を集める」(張静雅、2019) ことにしたのである。

現在ボランティアは 12 人いる。グループの成員は全部が 70 歳以上の高齢者である。そのボランティアグループのスローガンは“高齢者のため”である。ボランティアの陳さんが言ったのは高齢者の生活は若者よりつまらないが、このボランティア活動があったので自分の生活も充実してきたという (同上)。

☆ 郝さんがそのボランティアグループの創始者である。先に紹介したように、彼が 80 歳の高齢者の理髮を経験して感動してから、積極的に社区に申し込んで、自分の理髮の技を生かしてボランティアグループを形成した。大切なことは、ここに“積極性”と“自主性”がともに強くよく見られることである。郝さんが社区での後期高齢者の“理髮難”という高齢者の生活の悩みを発見して、自分が持っている技を生きたいという気持ち強く反映されている。そしてもう 1 人の高齢者が「そのボランティアがあったから自分の生活も充実になってきた」ということを言っていた。

事例 (8) 安徽省馬鞍山市金瑞社区では高齢者ボランティアたちが高齢者のために網

戸を交換する作業をしている。リーダーの趙さんがボランティアをするきっかけになったのは、3年前に1人暮らしの高齢者を訪れたときに、網戸が古くて、破れているのを発見した。そこで、彼が自分自身でお金を出してその高齢者のために網戸を交換した。その後、彼が気づいたのは社区にはこの種の高齢者が多いということである。そこで彼は、技を持っている高齢者たちを集めて、ボランティアグループを形成した。

65歳の許さんは大工として30年間の仕事の経験があった。水道と電気の修理などでもできる。それらの技術を使ってボランティアとして活躍している。たとえば、83歳の独居の謝さんが家の板が水に浸かってドアが締められなくなった。もし、修理会社に頼むと、少なくとも3000元が必要である。そこで、高齢者ボランティアのグループはその謝さんの悩みを知って、すぐに修理に駆けつけて、25円で修理をしてしまった。ボランティアの許さんが言ったのは「自分の身に着けた技をいかして他人を助けることができ、それを自分も嬉しく思う。とくに弱い立場に立つ高齢者が私たちの助けを得ると、とても嬉しい顔を見せてくれるので、そこからつよい達成感がもらえる」という（劉小慶、2019）。

☆ 高齢者ボランティアが同様の高齢者を助けることにより、相互に嬉しく思うのだという。これも高齢者ボランティアがボランティア活動を続けられる原動力となるのではないかと考えられる。

4 “積極的高齢化”と自分の生きがいの分析

いままで見てきた事例で明らかのごとく、中国の高齢者が定年後も受け身としての存在ではなくて、自分が社会に対して積極的に何かできることを考えながら社区というコミュニティでボランティア活動をやっていることが示された。これらの事例から個人の内発的な動機を持ちながら自主性と独立性をもって活動していることが分かる。

ほとんどの高齢者たちはそれぞれに若いときに多様な分野で仕事をしてきた。そのため、社区のリーダーや社区の住民から見ても、かれらは社区において信頼できる人たちである。またこれらの事例は、中国の大都市北京、南京から地方都市の安徽省馬

鞍山市、雲南省麗江市まで、広い地域の事例となっている。

それらの事例から、“積極的高齢化”を分析のために“他人の便益のため”“地域文化と社区環境を守るため”そして“自分の便益のため”に分類して検討しよう。

4.1 他人の便益のため

ここでの“他人の便益のため”とは、具体的には高齢者ボランティアたちが社区住民の便益のためにボランティアサービスをすることを意味する。そのサービスの内容は社区により多様である。しかし事例で示したように、どんなボランティアサービスの内容でも高齢者たちが積極性を持ちながら頑張っている姿を見ることができた。

この“他人の便益のため”は、“住民間でのトラブルを解決する”、“前期高齢者が後期高齢者の世話をする”、“子ども、青少年の見守りの役”の3つに分けられる。そのうち、前者のふたつは社会福祉色がよく、後者は世代保護の色彩が強い。

1) まず“住民間でのトラブルを解決する”ことについてである。高齢者ボランティアは社区に長く滞在しているので、社区の状況をよく知っている。またかれらは総じて温厚な年寄りなので、社区のリーダーと市民たちから信頼されており、定年後の生活を送りながら自主的に自分の知恵を生かして社区での多くのトラブルを見つけ出し、それを解決したりしている。

たとえば、竜湖佳苑社区における調解員のAさんは社区の住民の家々の状況をよく知っているから、社区のリーダーから調解員としての仕事を頼まれた。対象は住民間でのトラブルである。親孝行を実施しない兄とそれを怒っている妹との兄弟関係の修復、そして両親の扶養の説得、また衛生環境を守らない団地住民への教育とかである。

「毎日家に帰ったとき、大変疲れを感じる。しかし、すこし社区の安全・安心のために住民を守りきれたらとても嬉しい感じがする」と言っていた。

「嬉しい」という言葉は心からの率直な感想であろう。自身の力で住民間でのトラブルを解決したからである。つまりボランティア活動から他者によって自分自身の生きている価値が認められたからである。また自分の向上の気持ちが毎日のトラブル解決に繋がっているようである。

また湖北省宜昌市樵湖社区には“平安義務巡邏隊”という高齢者ボランティアグループがあった。そのボランティアグループは主に防火、盗難防止活動をする。社区のり

ーダーから「熱心な高齢者の奉獻のおかげで、社区がとても和やかになる」という指摘を受けた。高齢者ボランティアが自分の知恵を生かしながら社区の問題を解決した。さらに、遼寧省瀋陽市大東区洮昌街道北海社区に活躍している“民生おばあちゃん”のボランティアが住民のトラブルや社区の安全性問題などを解決したりしている。つまり高齢者ボランティアの活動があったからこそ、社区が和やかになるし、高齢者ボランティアグループが社区にとってかけがえのない財産だと評価されている。

次に“前期高齢者が後期高齢者の世話をする”をとりあげよう。

彼らは定年するまでは医者、教師、理髪師のような技術を必要とする仕事に従事していた。彼らが社区で行ったボランティア活動は主に専門性にかかわるボランティア活動である。さらに専門的な道具を持っているボランティア活動もある。トラブルの解決には高齢者の定年後の個人価値の実現になるのではないかと考えられる。

たとえば、江蘇省南通市徳民社区の老来楽サービスセンターに所属する高齢者ボランティアグループは“認知症予防体操”をやったり、主人がなくなった高齢者の高さんに対して専門性の高い心理ケアと心理治療をやったりしている。北京市石佛宮西里社区では銀齡助老理髪服務隊の郝さんの呼びかけで、社区で理髪隊を形成した。自分の理髪の技を生かして高齢者のために理髪する。特に体の不自由な高齢者がいたわりの対象とされている。

安徽省馬鞍山市金瑞社区に登録しているボランティアたちは大工の専門性の高い技を持っている高齢者人材である。網戸の交換を行ったり、高齢者お宅の板の修理などをしたりしている。「弱い立場に立つ高齢者が私たちの助けによって、とても嬉しい顔を見せて強い達成感がもらえた」という。

“子ども、青少年の見守りの役”はどうだろうか。

社区のリーダーたちは高齢者ボランティアの資源を利用して彼らに青少年の成長にも見守ってもらいたいと考えている。それに応えて、高齢者ボランティアたちが責任感を持ちながら社区での安心安全な環境を作ることに貢献している。

たとえば、湖南省長沙市湘雅路街道文昌閣社区での劉光華のネット監督ボランティアである。彼らは未成年者のネットカフェの利用することを監督しているボランティアである。そのボランティアは現代情報社会に適合した高齢者ボランティア活動をしている。また安徽省銀西社区には高齢者ボランティアたちが“四時間の小レッスン”と

いう特別な方式で子どもの勉強と安全守りに力を入れている。

子どもと青少年はこれからの時代の中心となる。保護者だけでなく、社区の高齢者ボランティアの力を貸りていることがわかる。

4.2 地域文化と社区環境を守るため

地域文化を地元に住んでいる人たちは愛着を感じている。高齢者ボランティアは意識しながら、自分の力で地元の文化を伝承したり、多くの子どもと若い人に地元の文化を教えたり、またそれを守りたいと思っている。高齢者が自分の撮影した写真などを通して、若い人に社区の文化を伝える。また、社区の衛生環境を保つために、高齢者ボランティアたちが自主的に自分の役割を果たして、社区の環境を清潔にする活動もしている。その結果、社区に大家族のような強い仲間意識が醸成されたと言っていた。

地域文化を守るための例として、たとえば、雲南省麗江市古城区大研街道新義社区では高齢者ボランティアたちが地元の文化の保持に努めている。青島黄海路社区には高齢者ボランティアたちが芸術を通じて高齢者ボランティアの活気のある面を表した。撮影を通して社区の文化を住民に伝えた。

社区環境を守るための例として、たとえば、湖南省雨湖区雲塘街道汽車駅社区での高齢者ボランティアが社区にあるレストランの換気扇交換をしたりしている。つまりここでの高齢者ボランティアの積極性はレストランを清潔させることだけではなく、社区の全体の仲間意識に注目するのが大きなポイントである。

つまりここでの高齢者の“積極性”とは地元、とりわけ社区の文化の保持に注目していることである。また、社区環境の例から分かるようにその“積極性”は社区をあたかも大家族とでもいえる仲間意識を醸成したことである。

4.3 自分の便益のため

“自分の便益のため”とは高齢者ボランティアたちがボランティア活動を通して、自分がその活動からやる気を感じたり、健康になったり、若さを感じたりして、その結果、自分の便益を得ることである。

たとえば、江蘇省南通市竜湖佳苑社区で調解員としてのAさんが言うには「もし私

がボランティアをしないとすれば、ただ家でご飯を作ったり家族の世話をする老後生活となってしまう。けれども、このボランティアをしていると、毎日、やる気のある仕事を自分が待っている実感がある」という。つまり A さんがボランティア活動することでやる気が生じ、それに生きがいを感じているのである。B さんはもともと健康状態がよくなかったが、高齢者のために食事の世話をすることを通じて自分の価値を見直した。それが健康を保つ源になったとも考えられる。C さんと D さんは家でとくになにもやることがなかったので、ボランティア活動を通して、第二の人生のやりがいを掘り出すことになった。

また、青島黄海路社区の芸術団に加わっている高齢者ボランティア活動に参加した高齢者が言うには「年を取ればとるほど、そのボランティア活動の中で若さを感じる」という。つまり高齢者ボランティアがボランティア活動によって若さを保ちながら健康になったようである。また、寧夏興慶区大新鎮燕翔園社区の高齢者ボランティアが言うには「年をとった。家にいても、あまりやることもなくて、社区でできることをやって、忙しくなって、逆に健康になって元気になってくる」という。

つまりここで示されているのはボランティア活動そのものから健康がもらえる。つまり高齢者の積極性が健康維持に関わるといえる。総じていえば、高齢者ボランティアたちがボランティア活動によって、健康をもらって、健康になるので、さらにボランティア活動に参加するようになるのである。

5 結論

中国の高齢者ボランティア活動において、中国の研究者の間では、「積極的高齢化」が注目されていることを冒頭の問題関心のところで述べた。そしてボランティア活動を通じて、高齢者たちがどのようにして、自分の生きがいを確立しているのかを分析したいと述べた。

事例分析を通じて、積極的高齢化をつぎの 3 つに分類してその内実を深めようとした。その 3 つとは“他人の便益のため”“地域文化と社区環境を守るため”そして“自分の便益のため”に分けた。

その3つの特徴として事例を通じて以下のようなことが分かった。

“他人の便益のため”としては、以下の3つであった。1つ目は高齢者ボランティアたちが知恵を生かして社区でのトラブルを見つけたり、解決したりしている。2つ目は前期高齢者が後期高齢者の世話をするとき、とりわけ高齢者ボランティアたちの専門性が発揮されている。それは定年後の個人価値の実現になると考えられる。3つ目は高齢者ボランティアたちが子ども、青少年の見守りの役として彼らの成長に力を入れている。

そして“地域文化と社区環境を守るため”としては、高齢者はとても強く地元の文化保持したいので、それを若者に伝えていきたいと考えている。そして地区環境を守るために自主的に活動をしている。その結果、社区をあたかも大家族とでもいえる仲間意識を醸成されたことが注目される。

“自分の便益のため”ではとりわけ、健康維持に関わっている。ただ、事例が示すように、ボランティア活動は家に閉じこもっているだけではなくて、いろいろな人と交流をするので、健康の維持は精神的な面ともかかわっていることをAさんが述べていた。この事実については、研究者の李光、李紅霞の指摘がすでにある。すなわち、かれらは「健康が高齢者身体健康だけでなく、高齢者の心理健康も含まれているからだ」（李光・李紅霞、2020、p8）と言っている。

これらの3つの特徴は、便宜上分類をしたが、相互にとっても強く関連していることが分析から理解していただけると思う。基本的には自分の生きがいの発見が健康に結びついている。かれらが積極的になるのは、他人の便益のため、また地域文化を守るためとしながらも、意図してか意図しないでいるかは分からないが、結果的にはそれが自分の便益になっているという自覚がある。これが積極的高齢化の実態であろう。

【参考文献】：(アルファベットの順序)

段世江「我国城市老年志願者活動的一般狀況」『中国老年学雑誌』、2012年 pp3120-3121

范正輝「終身教育視野下積極老齡化路径研究」『継続教育研究』、2021年、pp41-45

李光・李紅霞「積極高齡化視域下老年人力資源開發的策略」『中国成人教育』、2020年、p8

呂良德「老年志願者—社區里的熱心人」『瀋陽日報』 東北新聞網、遼寧頻道ホームページ、<http://liaoning.nen.com.cn/system/2014/08/01/012531102.shtml>、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

李棟「社區里的“夕陽紅”—南樵區銀花街道銀西社區“五老”志願服務項目先進事跡」、滁州文明網ホームページ、http://chz.wenming.cn/zyfw/202006/t20200604_6505313.shtml、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

李錦誠「“小老人”真情携手“老老人”」江海晚報ホームページ、http://www.zgnt.net/jhwbszb/pc/c/202008/09/content_29018.html、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

李尢「社區老年志願者 网吧義務監督員」新華社、中華人民共和國中央人民政府ホームページ、http://www.gov.cn/jrzg/2011-03/03/content_1815471.htm、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

郝楠・楊夢「社區老年志願者：用實際行動發揮余熱」『銀川日報』、寧夏文明網ホームページ
http://nx.wenming.cn/2015sy/2015zyfw/17zy/202003/t20200304_5456562.html、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

羅娜・方琪・夏玉梅「老年志願服務隊 傾情演繹夕陽紅 義務社區巡邏 調解鄰里糾紛淨化轄區環境」喬奇、宜昌文明網ホームページ、http://yc.wenming.cn/wmdt/201810/t20181023_5504733.html、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

葉麗莉「阜康社區：“以老助老”点亮老年居民生活」『靖江日報』、楊蕊菁、常州大學懷德學院ホームページ、<http://hdc.cczu.edu.cn/2019/0314/c13457a201442/page.htm>、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

肖夢琪 「20 名老年志願者發揮余熱服務居民」、銀川晚報ホームページ、http://szb.ycen.com.cn/epaper/ycwb/html/2020-07/21/content_29071.htm、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

「青島黃海路社區老年志願者積極發揮余熱為居民服務」『半島都市報』、青島文明網ホームページ、http://qd.wenming.cn/zyfw/201311/t20131125_908920.html、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

陳佳飛「新義社區老年志願服務隊：踐行初心 夕陽輝映党旗紅」麗江網ホームページ、<http://www.lijiang.cn/ljxw/yqsx/2020-01-08/46565.html>、閲覽日 2021 年 6 月 7 日

譚麗・趙金偉「湘潭 68 歲志願者熱心服務社區」、『湘潭日報』蔡麗娟、湘潭文明網ホームページ
http://hnxt.wenming.cn/ywyq/wmbb/201804/t20180417_5154995.html、

閲覧日 2021 年 6 月 7 日

張静雅「老年志願者毎月義務為社区老人理髮」『新京報』、騰訊網ホームページ、
<https://new.qq.com/omn/20190923/20190923A01A2J00.html>、閲覧日 2021 年 6 月 7 日

劉小慶「社区大事小情、老年志願者们一起守望互助」馬鞍山日報ホームページ、
http://epaper2.wjol.net.cn/epaper/wjwb/pc/content/201903/25/content_13375.html
、閲覧日 2021 年 6 月 7 日

鄔滄萍・謝楠「関与中国人口老齡化的理論思考」『北京社会科学』、2011 年 p7

長田洋司「現代中国都市基礎構造の変化と社会的ネットワーク形成」『日中社会学研究』16 号、2008 年

【注】

⁽¹⁾ これら 4 つの型は以下のような特徴をもっている。すなわち協会型は政府など上から組織づけられた単一機能で広域をカバーするもので、スポーツ協会などである。

協助型は社区において高齢者が自発的に活動する組織を意味する。このボランティアの組織は社区委員会あるいは政府の関係部門がサポートすることが条件である。専項型は国の施策として、子どもの成長援助などの特殊な目的のために行う高齢者ボランティア活動であって、必ずしも社区とは結びつかない。参与型とは、社区において高齢者が社区のボランティア組織に参加する型である。

⁽²⁾ 長田洋司によると、「2004 年に“和諧社会”（調和のとれた社会）という新しい概念が提起され、その基盤として“和諧社区”という“社区建設”の新たな方向性が打ち出された」（長田洋司、2008、p119）。

⁽³⁾ “助餐サービス”とは食事の世話をしてあげるということである。

結 論

序章でも述べたことだが、中国では高齢者問題は、大きな課題となっている。そして高齢者個々人に対する具体的な対応策として、以下の3つが指摘されている。すなわち、「在宅養老」(家で老後生活を送ること)「高齢者施設での養老」「コミュニティ養老」である。その3つの概念については、すでに序章で詳しく述べた。

このうち、本論文は、将来に向けての「コミュニティ養老」の可能性を模索したものである。

第一章では「高齢者の社会活動」と「高齢者のボランティア活動の動機および継続性」、また「高齢者ボランティア活動の健康に及ぼす影響」の三つの項目に分けて、日本の研究者の内容を検討した。

「高齢者の社会活動」の分野においては、身近な人びととの関係性を重視する「自己完結型」する活動が日本では多いという指摘があり、興味をひかれた。友達の多さ、そして活動に誘われることが社会活動の促進要因になったという指摘もあった。

また居住年数が5年未満と短いものはボランティア活動の参加の阻害要因という指摘もあった。すなわち高齢者たちの居住年数が長ければ社会活動に参加する割合が多くなるということである。また、かれらの幸福感を構成しているのは社会的な活動だけではなくて、近所の買い物の手伝いというような個人活動的なボランティアの活動もあるという指摘も考えさせられる。

ボランティア活動に参加する高齢者が不参加の高齢者より生活満足度が高く、生きがいを感じるという。その理由は、高齢者自身が知識と能力が生かせるし、いろんな人たちと交流ができるからである。この指摘はありふれているが、本論文の関心からすれば大切な指摘である。

「高齢者のボランティアの動機および継続性」については、自律的な動機付けが社会活動での生きがいを促すという見方があった。継続性については、無理のない姿勢、気楽さ、そして自己管理が継続性に繋がるという指摘があった。

継続要因としては定期的・継続的な交流の楽しみとともに、ボランティア自身の役割意識が必要であるという。

「高齢者ボランティア活動の健康に及ぼす影響」については、ボランティア活動によって、活動が楽しくなり、それが認知症などの病気の予防もできるし、また交友関係が増え、その結果、活動を積極的に行っているという指摘がある。つまり、活動の満足感や感動が、高齢者の心身によい効果を与えているという。

第二章では、第一章の研究成果をふまえ、高齢者たちがボランティア活動に参加する動機について分析をした。ボランティア活動にはそれぞれ固有の目的がある。しかし、高齢者たちは自分たちの通常の活動の目的を超えて、がむしゃらに強い熱意でボランティア活動をしつづけることがしばしばあった。

そのような動機の背景として、「無自覚な自己快楽」と呼べる側面を取り上げ、その中身を明らかにしようとした。その結果、第一に“人間相互の絆の維持”の大切さ、第2に“高齢者がボランティア活動において主役となる意識”、第3に活動をすることで“心の安らぎを覚える“という3点がこの無自覚な自己快楽を構成していることがあきらかにされた。

第三章ではコミュニティは高齢者施設とは違ったもう一つの居場所であるという仮説にたって分析をした。調査の結果、“絆”、“社会貢献”、“新しい自分の発見”の三つの視点からコミュニティの居場所を考えてみた。

“絆”という点からみると、世代間交流や、“まちづくり活動”が人間相互の関連性強めることがあきらかになった。

“社会貢献”には自分のやることが役立って嬉しい。社会貢献をすることにより、相互に人間関係ができ、孤独の解消になった。また自分の若い時に身につけた技術を生かして自分の居場所感を感じたという。

“新しい自分の発見”としては、新しい技術を身につけられたので、新鮮さを持ちながら新しい活動の舞台を発見し、それは自分自身の価値の再発見となったという。これらから、コミュニティが高齢者の居場所として大きな役割を果たしていることがあきらかになった。

第四章では中国の高齢者ボランティアの研究を整理した。研究としては「法制度の整備と革新」、「予算の確保」、「高齢者ボランティアに関するトレーニング教育と高齢者自身の個人価値の見直し」といった問題が取り上げられていた。

そして具体的には“健康状況”、“経済状況”、“家族状況”、“年齢”、“学歴”との関係で検討をされている。そして、多くの研究者たちが“積極高齢化”という高齢者ボランティアにかかわる新しい理念を指摘しており、その点は注目してよい。

また、高齢者の参加動機には“共産党への恩返し”という特別な特徴を指摘する論考もあった。

またコミュニティとの比較の意味でとりあげた高齢者施設については、「地域格差」、「経営者と介護者の専門化の不足」、「福祉施設でのボランティア制度と激励対策の不足」という指摘をする論文が多かった。

また中国における研究においては、つぎのような中国における問題点を指摘する論考があった。すなわち、「ボランティアのリクルートの方法が確立していない」「高齢者相互の集団意識が弱い」「励ましの制度と組織管理が欠如している」「経費が不足している」というような点である。

第五章では第四章で指摘されていた“積極的高齢化”に焦点をしばって分析をした。それを“他人の便益のため”、“地域文化と社区環境を守るため”、“自分の便益のため”の3点に分類して検討をした。まず“他人の便益のため”には“住民間でのトラブルを解決した”、“前期高齢者が後期高齢者の世話をした”、“子ども、青少年の見守りの役をした”といった特徴を見つけられた。次に、地域文化と社区環境を守るため”には高齢者が地元文化の保護の役割を果たしているのが分かった。“自分の便益のため”にはボランティア活動を通して、余得として自分の健康維持ができることに、ボランティアたちは気がついたようである。すなわち、高齢者ボランティアたちはボランティア活動を通して周りの人を助けながら、自分自身も健康を保っており、それが“積極的高齢化”の実現の一歩になったという。

以上の5つの章に分けた研究を通して、日本と中国の高齢者ボランティアの役割が一目瞭然となった。

日本の高齢者ボランティアの役割と活動は以下のような特色をもっていた。一つ目は日本の高齢者ボランティアたちは、自分のペースでボランティアを行い、自分の固有の知恵を発揮している。二番目は高齢者ボランティアたちは健康を大事に考えており、ボランティアを通じて健康になると思うことが活動の

動機となっている。三番目は、高齢者たちは孤独解消のために活動に参加している。四番目は地域の各年齢の人たちと絆を深めている。五番目は一層自分の価値を発見したいという気持ちがある。

一方、中国の高齢者ボランティア役割と活動は以下の通りである。一つ目はいわゆる“積極的高齢化”の体現であった。高齢者がボランティアに参加するのは積極的高齢化の実現のためであった。二つ目は自分の健康のためにボランティア活動に携わった。三番目は、青少年の成長環境を守ることが動機になっていた。四番目は高齢者ボランティアがボランティア活動を通して共産党への恩返しをしているという意識がみられる場合があった。五番目は高齢者ボランティアが後期高年齢の高齢者のために介護などをして、介護ヘルパーのような存在になっている。

日中高齢者ボランティアの役割の共通点としては、ボランティアをすることによって、高齢者たちが健康を保つことができるという意識があった。両国での調査を通して分かったことは、かれらはボランティア活動をしたい時にするという事実である。また両国での高齢者ボランティアたちは自分の専門性の知恵を発揮したいという気持ちが強かった。それは年を取ってもまだ社会に貢献したいという気持ちがあるからのようである。三番目は地元の人たちと絆を結びたいという気持ちがあった。

なお、中国の高齢者ボランティアたちのあいだで共産党に対する感謝の気持ちが入っているというのはもちろん中国固有の特徴である。

そこで、両国の比較について、いくつかを補足しておきたい。

両国で異なることとして、日本の先行研究においては、活動のマイナス要因として、社会活動の「阻害要因」という視点からの研究が多かった。「居住年数の多寡」「新たな場への参加を好まない」「新たな活動をすることなどに対する関心が低い」「新たな活動をするところではない」といった個人の動機に関わる阻害要因の研究が特色である。他方、中国の先行研究では「高齢者ボランティアの参加不足」「募集体系の非能率」「高齢者ボランティア活動評価制度」「ボランティア活動への監督」「ボランティア管理体制と法律の不健全」のボランティア活動そのものの困難性が指摘されている。

日本では高齢者について前期高齢者と後期高齢者という言葉が使われてい

る。他方、中国では厳密に高齢者に関する区別の言葉がないものの、“小老人”と“老老人”という言い方が使われている。ここでの中国での「小老人」の概念は、日本ほど明確に年齢を示せないが、おおよそ60歳から70歳ぐらいまでを指す。また、「老老人」はそれ以降の年齢である。日中高齢者ボランティアの事例ではともに後期高齢者や老老人への支援という特徴が見られた。

なお、日中高齢者ボランティア事例においてとりわけ大きな差異は自主性と自発性の多少の違いである。日本の高齢者ボランティア団体は民間団体が多い。それは高齢者たちが定年になって自発的に組織を形成するグループである。たとえば、NPO法人チーム御前浜・香櫨園浜・里浜づくりのグループである。その参加者のほとんどは一緒にゴルフ場でゴルフをやる仲間たちである。やりたい時にやるのは彼らのスローガンである。しかし、中国の高齢者ボランティアグループは民間団体があるが、直接あるいは間接的に行政のサポートが入っている。

最後に全体的にまとめ直すと、当初想定したように、コミュニティにおけるボランティア活動が高齢者施設における高齢者の養老に比べて、勝るとも劣らない機能をもっていることがあきらかになった。とくに中国では今後とも高齢者が急増するという社会的危機を迎えることになる。そのためにも、たんに高齢者施設を造りつづけるのではなく、社区（中国のコミュニティにあたる）における高齢者ボランティア参加の鼓舞が大切なことがわかる。

なお、言うまでもなく、高齢者ボランティアとは、高齢者に対する高齢者によるボランティア活動を意味する。だが、本研究でも明らかにしたように、肝要なことは、高齢者ボランティア活動そのものが、高齢者の養老になっていることである。それはボランティア活動が高齢者に生きがいを感じさせるとともに、生きる張り合いと関係があるのだろうが、本人の健康増進にも寄与しているようであるからである。